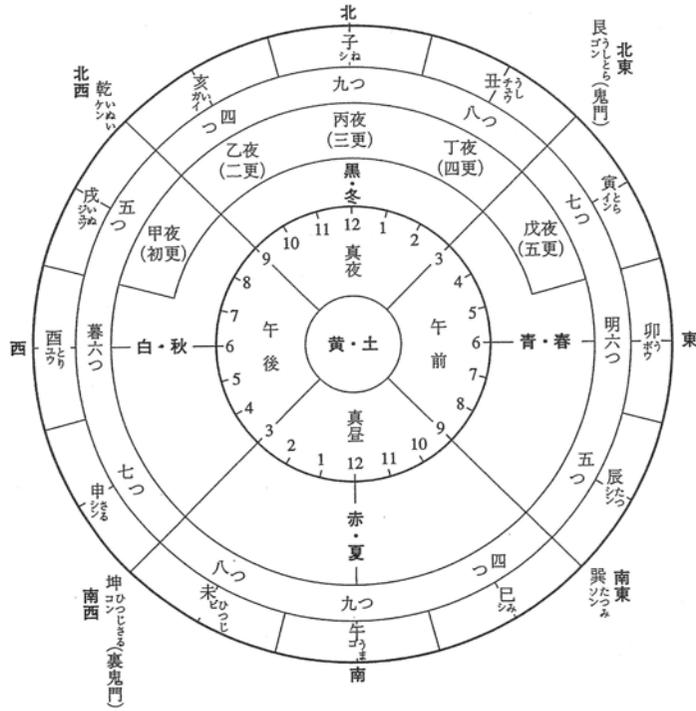


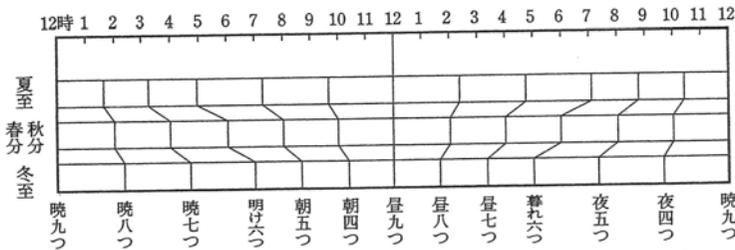
第一編 資料編



【方位・時刻】



江戸時代の不定時法



江戸時代、民間で行なわれた時刻法は不定時法といい、夜明けと日暮を境として昼と夜とをそれぞれ六等分したが、季節により変動があった。上記の表は、夏至(げし)・春分(秋分)・冬至(とうじ)の時刻を示したものである。(『吹上郷土史』より)

【干支順位表】

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
きのえね 甲子 コウシ	きのうし 乙丑 オウチュウ	ひのえとら 丙寅 ヘイイン	ひのとう 丁卯 テイボウ	つちのえたつ 戊辰 チュウジン	つちのとも 己巳 キシ	かのえうま 庚午 コウゴ	かのとひつじ 辛未 シンミ	みずのえさる 壬申 ジンシン	みずのとう 癸酉 ミズウ
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
きのえいぬ 甲戌 コウジュウ	きののとう 乙亥 ヘイガイ	ひのえね 丙子 ヘイシ	ひのとうし 丁丑 テイチュウ	つちのえとら 戊寅 チュウイン	つちのとう 己卯 キボウ	かのえたつ 庚辰 コウジン	かのとも 辛巳 シンシ	みずのえうま 壬午 ジンゴ	みずのとう 癸未 ミズミ
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
きのえさる 甲申 コウシン	きののとう 乙酉 ヘイユウ	ひのえいぬ 丙戌 ヘイジュウ	ひのとう 丁亥 テイガイ	つちのえね 戊子 チュウシ	つちのとう 己丑 キチュウ	かのえとら 庚寅 コウイン	かのとう 辛卯 シンボウ	みずのえさる 壬辰 ジンシン	みずのとう 癸巳 ミズシ
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
きのえうま 甲午 コウゴ	きののとう 乙未 ヘイミ	ひのえさる 丙申 ヘイシン	ひのとう 丁酉 テイユウ	つちのえいぬ 戊戌 チュウジュウ	つちのとう 己亥 キヘイ	かのえね 庚子 コウシ	かのとうし 辛丑 シンチュウ	みずのえとら 壬寅 ジンイン	みずのとう 癸卯 ミズボウ
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
きのえたつ 甲辰 コウジン	きのとも 乙巳 ヘイシ	ひのえうま 丙午 ヘイゴ	ひのとう 丁未 テイミ	つちのえさる 戊申 チュウシン	つちのとう 己酉 キユウ	かのえいぬ 庚戌 コウジュウ	かのとう 辛亥 シンヘイ	みずのえとら 壬子 ジンシ	みずのとう 癸丑 ミズチュウ
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
きのえとら 甲寅 コウイン	きののとう 乙卯 ヘイボウ	ひのえたつ 丙辰 ヘイジン	ひのとも 丁巳 テイシ	つちのえうま 戊午 チュウゴ	つちのとう 己未 キミ	かのえさる 庚申 コウシン	かのとう 辛酉 シンユウ	みずのえとら 壬戌 ジンジュウ	みずのとう 癸亥 ミズヘイ

(『吹上郷土史』より)

# 資料編 目次

参考資料(時刻・方位・干支順位表)

## 目次

第一章 古 代	5	第四章 ふるさとの記録	55
第一節 日本三代実録	7	第一節 字・小字一覧	57
第二節 薩摩国正税帳	15	第二節 石碑・記念碑・歌碑	71
第二章 近 世	19	第三節 ふるさとの唄「町歌・音頭・イメージソング」	90
第一節 花尾神社関係資料	21	第五章 年 表	95
1、花尾権現御祭之事 享保一三年 黎明館蔵(文書720)	21		
2、廃寺之節花尾山江仰渡之写	27		
3、嘉永五年(一八五二)棟札	29		
第三章 近現代	31		
第一節 郡山村・町歴代三役、議長・教育長	33		
第二節 郡山町立学校・校歌・歴代校長	35		
第三節 戦没者名簿(西南の役は第八編第一章に掲載)	45		
1、日清戦争	45		
2、日露戦争	45		
3、日中戦争より太平洋戦争	45		

# 第一章 古代

凡例

日本三代實録は、『國史大系 四』吉川弘文館刊行から転載した。  
薩摩國正税帳は、『寧楽遺文 上卷』東京堂出版から転載した。

## 日本三代實錄卷第四

起貞觀二年正月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉 勅撰

二年春正月壬子朔。天皇不受歲賀雨也。御前殿賜宴侍臣。賜御被。所司各奉職。奏七曜曆。藏氷厚薄。腹赤魚。舉音樂。並如舊儀。于時。天皇御東宮。是日廢朝賀。故宴於前殿。○四日乙卯。所司獻剛卯杖。天皇不御前殿。付內侍奏。○七日戊午。車駕幸豐樂院。觀覽青馬。賜宴奏樂。賜祿如舊儀。○八日己未。於大極殿。始講最勝王經。如常。以藥師寺僧花嚴宗傳燈大法師位明哲爲講師。○十四日乙丑。大極殿齋講畢。僧綱引名僧。奉參御在所論義。施被如常。○十六日丁卯。踏歌之節。天皇御前殿。賜宴奏樂。蹋歌如常儀。是日。以參議正三位行民部卿兼皇太后宮大夫伊豫權守伴宿祢善男爲中納言。民部卿皇太后宮大夫如故。從四位上行伊豫守春澄朝臣善繩爲參議。散位從五位上小野朝臣千株爲內匠頭。從五位下行上總介藤原朝臣貞庭爲大藏少輔。散位正五位下弘宗王爲左京大夫。從五位下行駿河介坂上大宿祢瀧守爲山城介。左京大夫從四位下紀朝臣今守爲攝津守。圖書頭從五位上當麻真人清雄爲伊賀守。外從五位下行音博士上毛野朝臣永世爲尾張介。從五位下行大內記高階真人菅根爲遠江守。外從五位下行侍醫與道宿祢名繼爲駿河介。侍醫如故。散位從五位下佐伯宿祢真利爲甲斐守。從五位上平朝臣春香爲武藏介。從五位下和氣朝臣春生爲上總權介。從五位下藤原朝臣大野爲介。參議正三位行右衛門督源朝臣融爲近江守。右衛門督如故。從五位下守左近衛少將兼行上總權介藤原朝臣良尚爲權介。少將如故。

二品行彈正尹賀陽親王爲常陸太守。彈正尹如故。二品行兵部卿忠良親王爲上野太守。兵部卿如故。散位從五位下橘朝臣信蔭爲出羽守。從五位下豐住朝臣永貞爲若狹守。從四位上清原真人長田爲加賀守。從五位下行造酒正伊統宿祢福代爲介。左京亮從五位下清原真人貞爲越後守。散位從五位下藤原朝臣興世爲但馬介。左近衛少將正五位下良岑朝臣清風爲播磨權介。少將如故。從五位下行脩中介朝野朝臣貞吉爲守。散位從五位下內藏朝臣高守爲介。從五位下藤原朝臣貞高爲讚岐介。參議從四位上守大藏卿兼行因幡守清原真人岑成爲大宰大貳。散位從五位下藤原朝臣眞數爲少貳。右近衛中將從四位下源朝臣興爲筑前守。興去年正月兼筑前守。母憂去職。今以本官起之。從五位上行大宰少貳小野朝臣貞樹爲肥後守。外從五位下行少外記秦宿祢安雄爲豐後介。散位從五位下藤原朝臣雄瀧爲日向守。○十七日戊辰。天皇幸豐樂院。觀射禮。○十八日己巳。車駕幸豐樂院。觀賭射。左右近衛少將侍。帝御座東西。書中不如舊儀。凡御豐樂殿。覽賭射之時。左右近衛少將各一人。相分昇侍。帝高御座東西。書諸人射的中不。他皆效此。○廿一日壬申。天皇內宴近臣。如常儀。凡每年正月廿一日。天子內宴於近臣。喚文人賦詩。預席者不過四五人。內教坊奏女樂。親王公卿及文人殿上六位已上。賜綿各有差。他皆效此。○廿七日戊寅。詔。越前國氣比神宮寺置十僧爲定額。隨闕補之。授遠江國從四位下敬滿神正四位下。正五位下。下苑河內神。小國神。從五位下鹿苑神並授從四位下。從五位上矢奈比賣神。真知乃神並正五位上。美作國正五位下中山神從四位下。散位外從五位下大秦公宿祢此雄爲出雲介。○二月壬午朔。三日甲申。春日祭如常。○四日乙酉。祈年祭如常。○五日丙戌。信濃國正六位上馬背神。飄別神。妻科地神。无位駒。

弓神。出速雄神並授從五位下。○六日丁亥。釋奠如常。直講從六位下。苅田首安雄講毛詩。文人賦詩。○八日己丑。進肥前國從四位下田嶋神階。加從四位上。授從五位上荒穗天神正五位下。從五位下豫寺比咩天神。久治國神。天山神。志々岐神。溫泉神並從五位上。正六位上金立神從五位下。○十日辛卯。大原野祭如常。從五位上行大學博士大春日朝臣雄繼以孝經奉授。天皇。正五位上行大學頭豐階真人安人為都講。正五位下守權左中弁兼行式部少輔大枝朝臣音人。正五位下守右中辨藤原朝臣冬緒寺預席。○十一日壬辰。公卿於太政官曹司廳。列見文武官成選之人。正五位下良岑朝臣親子。從五位下藤原朝臣有子。並進階級。加從四位下。授從五位下藤原朝臣宜子正五位下。无位水取連夏子從五位下。正六位上和久勝清子外從五位下。從三位源朝臣全姬為尙侍。○十四日乙未。請六十僧於東宮。限三箇日。轉讀大般若經。散位從五位下正岑王為大監物。從五位下橘朝臣岑範為圖書頭。彈正少弼從五位下平朝臣實雄為式部權少輔。二品行彈正尹兼常陸太守賀陽親王為治部卿。常陸太守如故。防葛野河使散位從五位下佐伯宿祢真持為玄蕃頭。散位從五位下藤原朝臣緒數為諸陵頭。從五位上安倍朝臣真行為刑部大輔。治部卿正四位下源朝臣生為大藏卿。外從五位下行侍醫兼駿河介興道宿祢名繼為醫博士。餘官如故。散位外從五位下春道宿祢永藏為造酒正。四品行上總太守本康親王為彈正尹。上總太守如故。散位從五位下藤原朝臣安棟為少弼。從五位下藤原朝臣大野為左京亮。大監物從五位下安倍朝臣有道為右京亮。正五位下行內藥正兼侍醫參河權介物部朝臣廣泉為參河權守。內藥正侍醫如故。散位從五位下和氣朝臣春生為遠江權介。從五位上伴宿祢龍男為上總介。鎮守將軍從五位上坂上大宿祢當道為權介。散位外從五

位下神門臣氏成爲下總介。從五位上豐井王爲但馬權守。左馬頭從五位上清原真人秋雄爲介。左馬頭如故。散位從五位下藤原朝臣興世爲因幡守。從五位下小野朝臣春枝爲鎮守將軍。○廿五日丙午。僧正傳燈大法師位真濟卒。真濟者。俗姓紀朝臣。左京人也。祖正五位下田長。父巡察彈正正六位上御園。真濟少年出家。學大乘道。兼通外傳。夙有識悟。從大僧都空海。受真言教。大師海公鑒其器量。特加提誘。遂授兩部大法。爲傳法阿闍梨。真濟時年廿五。時人奇之。真濟入愛當護山高尾峰。不出十二年。嵯峨天皇聞其苦行。爲內供奉十禪師。承和之初。遣使聘唐。真濟奉朝命。隨使渡海。中途漂蕩。船舶破裂。真濟纔駕一筏。隨波而去。泛々然不知所到。凡在海上廿三日。其同乘者卅餘人。皆悉餓死。所活者真濟與弟子真然二人而已。真濟唯佛是念。自然不飢。豈非如來冥護之所致哉。南嶋人遙望海中。每夜有光。恠而尋之。拯得着岸。皮膚腐爛。尸居不動。嶋人憐愍。收而養療。遂得歸本朝。仁明天皇擢爲權律師。文德天皇甚見尊重。爲權少僧都。未幾轉權大僧都。少頃爲僧正。於是真濟抗表請以僧正位讓先師空海。中心懇切。至于再三。天皇感激。贈空海法師以大僧正位。緇徒榮之。真濟表請建一重寶塔於高尾岑神護寺。造五大虚空藏菩薩像。安置塔中。置七口僧及度年分三人。春秋二季。永設法會。轉讀虚空藏十輪寺經。以鎮護國家也。守其遺跡。至今修之。天安二年八月。文德天皇寢病。真濟侍看病於冷然院。大漸之夕。時論噉々。真濟失志隱居。遷化時年六十一。○廿八日己酉。授脩後國正六位上大藏神。神田神並從五位下。○廿九日庚戌晦。雷雨晦合。○三月辛亥朔。近江國建部神列於官社。○二日壬子。割阿波國美馬郡。置三好郡。○三日癸丑。御燈齋潔如常。○七日丁巳。詔以武藏國正稅穀四百斛。上野國二百斛。賜傳燈大法師位。

圓仁。於彼國應養宿祿。故有此賚。○廿日庚午。從五位上行參河守御長真人近人爲越後守。散位從五位上並山王爲紀伊守。從五位上行紀伊守文室真人益善爲豐前守。薩摩國從五位上開聞神加。從四位下。從五位下志奈毛神。白羽火雷神。智賀尾神。賀紫久利神。鹿兒嶋神並授。從五位上。正六位上伊余色神從五位下。○廿五日乙亥。特有勅。免除太政官厨借。大藏省錢七百卅四貫。絹六十九疋。綿八万四千三百卅屯。絲一千八百斤。調布一万三千六百端。商布一万九千八百廿六段。鐵二百廷。公卿已下弁大夫已上於左仗頭拜賀舞蹈。○廿九日己卯。迅雷暴雨。右京一條三坊地壹町。賜從五位上小野朝臣千株。從五位下藤原朝臣良尙等。○夏四月辛巳朔。帝御南殿。賜宴侍臣。次侍從被召。侍右仗下。左右近衛府遞奏音樂。日暮酒酣。親王公卿促席御前。各奏絲竹。坐歌起舞。非侍從及外吏五位未得放還。并外記史內記六府將監尉以下門部以上預見參者。賜祿各有差。參議以上別加賜御衣。夜分之後。盡歡而罷。是日。詔以從五位上藤原朝臣廣基。從五位下源朝臣有爲。次侍從。○四日甲申。平野廣瀨。龍田等祭如常。○五日乙酉。梅宮祭如常。○六日丙戌。殞霜殺草。○八日戊子。內殿灌佛如常。詔東大寺大毘盧遮那佛會事。惣聽修理大佛檢校修行傳灯賢大法師眞如處置。又詔二品治部卿賀陽親王。大納言正三位源朝臣弘。正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿祿善男寺。勾當供養大佛會事。○十一日辛卯。廻飄起。外記候廳前。旋轉西行。小虫無萬數。飛散其中。是日。詔准據承和。仁壽舊跡。新錢三万賜侍從厨。○十五日乙未。六府警固。緣賀茂祭也。○十七日丁酉。賀茂祭如常。齋內親王未入野宮。故不向社。○十八日戊戌。諸衛解嚴。○十九日己亥。詔五畿七道諸國。令境內僧尼。誦佛頂尊勝陀羅尼。日滿廿一遍。……後略

# 日本三代實錄卷第廿六

起真觀十六年七月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉勅撰

秋七月丁亥朔。二日戊子地震。大宰府言。薩摩國從四位上開聞神山頂。有火自燒。煙薰滿天。灰沙如雨。震動之聲聞百餘里。近社百姓震恐失精。求之著龜。神願封戶。及汗穢神社。仍成此祟。勅奉封二十戶。授伯耆國正六位上天乃佐奈咩神從五位下。○四日庚寅。廣湍龍田祭。○十日丙申。鷺集紫宸殿前庭。○十一日丁酉。僧正法印大和尚位真雅上表。請解僧正。曰。沙門真雅言。量力審分。煙竹之篇垂規。犯戒違儀。霜蓮之喻可取。真雅心同。伽犬身類。繫猴狂花。徒發於非時。甘菓何期於登熟。時謬藉殊常之寵。猥叨非據之榮。道乖濟時。智不周務。未曾引一滴以添大海。撮微塵以裨須弥。曉夕思惟。身心慙愧。所以欲執降退。歲月已深。在今述宿素之懷。豈追陳虛飾之讓。但真雅昔在陛下誕育之始。聊申左右擁護之誠。自謂且緩殘喘之期。助致太平之化。是故遲疑猶豫。未敢自辭。方今草木之齒七十有餘。樹老葉危。望秋風而將落。鐘鳴漏盡。恨夜行之不休。况亦積以羸痾。漸覺加劇。常恐深山忽破。不復見金輪之威儀。瑩水忽流。无由奉玉辰之光飭。亦自慙焉。真雅生已荷德。死不忘恩。唯願陛下憐一老僧。賜其骸骨。若得解彼法維。臥月壘以終餘年。湔此塵勞。飲石泉以養衰疾。足矣。伏待矜允。必降天慈。詞盡精誠。悲纏涕泣。臨表哽戀。不能自堪。无任懇欵之至。謹奉表陳。請以聞。優詔不許。○十四日庚子。除目七人。○十八日甲辰。先是大宰府言。大唐商人崔岌等卅六人。駕船一艘。六月三日着肥前國松浦郡岸。是日。勅。且

朝廷乎寶位无動久。常磐堅磐爾。夜守日守爾。護幸賜比。諸不祥事波乎未然。防除賜比。風水之灾不發賜天。五穀豐稔爾。天下平安。守護賜止倍。恐美恐毛。申賜久。申。餘社告文亦復准此。近江國正五位下新河神三。上神並授正五位上。○廿七日戊申。右大臣從二位兼行左近衛大將源朝臣多抗表請罷大將職不許之。○冬十月壬子朔。皇帝御紫震殿。賜宴侍臣。左右近衛府遞奏音樂。日暮奏和琴。作和歌。群臣具醉。極歡而罷。賜祿各有差。散位從五位下良岑朝臣遠年以吹笛。被喚昇殿。預非侍從并大夫外衛佐等之例賜祿焉。○三日甲寅。先是。大外記大藏朝臣善行修解申請僞。大和國靈驗山寺。有長谷壺坂兩精舍。並有燈分稻。付國司出舉。但至子嶋山寺。凡其靈驗。彼兩寺之亞也。而未有燈分。照曉夜者。星月而已。望請以私稻四百束。付之國宰。加舉正稅。送利稻於寺家。爲長明燈之資。至是。詔許之。○五日丙辰。勅分遣使者於山城。大和。河內。和泉。攝津等國。令春宮田獲稻并地子之直運送京師。大學寮返上修理料貞觀錢五十貫文。去貞觀十四年所請也。○六日丁巳。雨雪。有虹。降宜陽殿西廂。○八日己未。授攝津國正六位上長柄神從五位下。是日。勅皇妣贈皇太后山陵置守冢五戶。外祖父贈太政大臣正一位藤原朝臣總繼。外祖母贈正一位藤原朝臣數子墓各一戶。一陵二墓。並在山城國愛宕郡。○九日庚申。先是大宰府上言。管肥前國。自六月澍雨不降。七月十一日。國司奉幣諸神。延僧轉經。十三日夜。陰雲晦合。聞如雨聲。遲明。見雨。粉土屑砂。交下。境內水陸田苗稼。草木枝葉。皆悉焦枯。俄然降雨。洗去塵砂。枯苗更生。薩摩國言。同月十二日夜。晦冥。衆星不見。砂石如雨。檢之故實。穎娃郡正四位下開明神發怒之時。有如此事。國宰潔齋奉幣。雨砂乃止。八月十一日。震聲如雷。燒炎甚熾。雨砂滿地。晝而猶夜。十二日自辰至子。雷電。砂降。未

止。砂石積地。或處一尺已下。或處五六寸已上。田野埋瘞。人民騷動。至是。神祇官卜云。粉土之恠。明春彼國當有災疫。陰陽寮占云。府邊東南之神。當遷去於隣國。由是。登麻穀稼有致損耗。是以下知府司。令彼兩國。奉幣部內衆神。以祈冥助焉。○十日辛酉。律師法橋上人位玄津卒。○十一日壬戌。令鑄錢司作錢機百五具。其五十二具半新作。五十二具半修理舊機。○十九日庚午。引僧廿口於仁壽殿。轉讀金剛般若經。限以三日。大宰府少貳已下官人徵贖銅。先是。彼府年貢鶉違期。詔下刑官斷罪。刑部省斷云。職制律云。事有期會。而違者一日笞卅五。日加一等。罪止徒一年。名例律云。同司犯公坐者。長官爲一等。次官爲一等。判官爲一等。主典爲一等。各以所由爲首。其闕無所承之官。亦依此四等爲法。又條云。五位已上犯流罪以下減一等。又條云。七位已上犯流罪以下。各從減一等。又條云。七位已上犯流罪以下各從減一等之例。又條云。應議請減。及八位已上犯流罪已下聽贖。據檢此等文。府司湏四月以前貢進。而違官符旨。延及七月。計其日數。既過罪止。仍以少貳源朝臣精。御室朝臣安常。爲第二從。杖一百。並帶從五位上。請減一等。各杖九十。合贖銅九斤。大監平高平。少監多治有友爲第三從。杖九十。高平帶正六位上。例減一等。杖八十。合贖銅八斤。有友帶正八位上。合贖銅九斤。少典清科全棟帶從七位上。例減一等。杖七十。合贖銅七斤。豐井安基帶正八位下。合贖銅八斤。○廿日辛未。先是。大唐商賈人着大宰府。是日。下知府司。禁王臣家使及管内吏民私以貴直競買他物。○廿一日壬申。雷二三聲。不雨。美濃國多藝郡六領外從七位上刑部連。雄春雄犯罪。爲其父所告。春雄亦爲父不孝。仍付國宰。令推斷。○廿二日癸酉。仁壽殿轉經事畢。詔以權僧正法印大和尚位遍照爲僧正。少僧都法眼和尚位平恩爲大僧都。……後略

第二節『薩麻國正稅帳』（『寧樂遺文』上卷 竹内理三編 東京堂出版）

○薩麻國正稅帳 字面ニ「薩麻國印」アリ○正倉院文書

（備註書）

「薩麻國天平八年正稅目錄帳從八位上行目吳原忌寸百足」

斗 八升 斛別入一升

定實壹仟貳伯玖拾肆斛捌斗貳升 動不

簸振量定粟穀肆伯參拾陸斛玖斗參升 振入卅九斛七斗八升九夕

定實參伯玖拾漆斛貳斗玖合壹夕

穎稻參萬漆仟陸伯漆束捌把拾分把之玖

穎粟參仟參伯貳拾陸束陸把拾分把之壹

糯壹仟貳伯陸拾壹斛 養老四年

鹽漆斛漆斗參升玖夕

酒肆拾伍斛伍斗伍升漆合

雜用穎稻肆仟漆伯貳拾漆束捌把拾分把之肆

酒壹拾陸斛貳斗漆升漆合 充華人一十一郡六斛九斗一升八合、當郡九斛三斗五升九合

依例正月十四日、讀八卷金光明經并十卷金光明

最勝王經佛聖僧及讀僧一十一軀、合一十三軀

供養料稻貳拾束伍把拾分把之肆 軀別一束五把八分

當國僧合一十一軀 十軀二百八十四日惣單參仟玖一軀一百一十三日惣單參仟玖

伯伍拾參人供養料稻壹仟伍伯捌拾壹束貳把 僧別四把

春秋釋奠料稻玖拾貳束 先聖先師并四座料稻

壹束陸把 四把國司以下學生以上惣七十二人

食稻壹拾肆束肆把 二把別脯參拾壹斤 直稻參

拾壹束 別鯨參拾陸斤 直稻參拾陸束 別一斤

雜腊壹斗伍升直稻陸束 別二雜菓子參斗 直

稻參束 別酒捌斗 先聖先師座別一升 國司以下人別一升

元日拜朝廷刀禰國司以下少毅以上惣陸拾捌人

食稻壹拾參束陸把 二把別酒陸斗捌升一升

國司巡行部内合玖度惣單壹伯肆拾捌人 上六十三人 從八十五人

食稻伍拾束漆把 上人別四把 酒伍斗參升 目以上二十三 從人別三把 別一升 史生五十八 別八合

參度正稅出舉并收納 一度守一人 從三人 并四人 并四人六日 一度醫師一人 單陸拾貳人 上貳拾肆

人 守七人 史生參拾捌人 一十七人

壹度責計帳手實 守一人 目一人 醫師一人 單玖人 從六人 并九人一日

上參人 目以上二人 從陸人 醫師一人

壹度檢校庸席 醫師一人 從二人 單肆人 上貳人 醫師二人

師從貳人

壹度檢校伯姓損田 目一人 從二人 并三人二日 醫師一人 從一人 并二人五日

單壹拾陸人 上漆人 目五人 從玖人 醫師五人

參度賑給 一度醫師一人 從一人 并二人十九日 一度史生二人 從一人 并二人五日 一度守一人 目一人 并九人一日 從單伍拾漆人 上貳拾漆人

目以上五人 從參拾人 史生廿五人

往來驛使合頭壹拾人 一人七日 二人三日 從壹拾肆人 四人二日 四人一日 從廿五人 食稻貳

七人二日 四人一日

惣單陸拾陸人 頭廿五人 食稻貳

七人二日 三人三日

惣單陸拾陸人 頭廿五人 食稻貳

拾貳束參把頭人別四把酒貳斗參升一十五人別一人合  
往來傳使合頭肆拾貳人二百卅八人日、三人從玖人合

二日、六物單壹伯壹拾肆人從頭一百二十八人食稻肆拾肆  
束陸把從頭一人六把、別一人、別四酒捌斗貳升參合  
頭一人一升五合、一十六人、別八十一人、別八合

新任國司史生正八位上勳十二等韓柔受郎從二人

起七月廿七日盡十月廿九日合玖拾貳日、單壹伯

捌拾肆人、食稻漆拾參束壹把自七月廿七日、至八月廿九日合卅三日、依國司部內巡行食法、日別充七把、九月十月、酒貳斗陸升肆合、并二箇月依公解食法、月別充廿五束

運府甘葛煎擔夫參人十九日惣單伍拾漆人 食稻壹

拾漆束肆把三人十日、人別日四把

運府兵器料鹿皮擔夫捌人十九日惣單壹伯伍拾貳人

食稻肆拾陸束肆把八人十日、人別日四把

運府筆料鹿皮擔夫貳人十九日惣單參拾捌人 食稻

壹拾壹束陸把二百十日、人別日四把、二八九日、人別日二把

惣單壹仟

陸伯貳拾玖人糧給稻陸伯肆拾束捌把一千五百七十五人、別

四把、五十四人、別二把

國司年料壹仟伍伯束

遣唐使第二船供給穎稻漆拾伍束陸把

酒伍斛參斗

疾病人壹伯肆拾捌人給藥酒漆斗參升貳合卅人、別六合、八

十人、別五合、卅八人、別四合

釀酒料稻貳伯參拾捌束 得酒壹拾漆斛

出舉壹萬壹伯束死伯姓一十一人、免給稻一百卅五束

定納本玖仟玖伯陸拾伍束 利肆仟玖伯捌拾貳束

伍把 合壹萬肆仟玖伯肆拾漆束伍把

國司借貸肆仟玖伯束

遺壹萬漆仟捌伯捌拾束拾分把之伍

酒貳拾玖斛貳斗捌升

天平四年未償壹仟玖伯捌拾玖束伍把死伯姓二人、免給稻五十一束

徵納壹仟玖伯參拾捌束伍把

都合簸振量定稻穀壹仟肆伯貳拾肆斛參斗振入一百廿九斛、別入一斗

斛、別入一斗

定實壹仟貳伯玖拾肆斛捌斗貳升動

簸振量定粟穀肆伯參拾陸斛玖斗參升振入卅九斛七斗、二升九夕

定實參伯玖拾漆斛貳斗玖合壹夕

穎稻參萬玖仟陸伯陸拾陸束拾分把之伍

穎粟參仟參伯貳拾陸束陸把拾分把之壹

糲壹仟貳伯陸拾壹斛養老四年

鹽漆斛漆斗參升玖夕

酒肆拾陸斛貳斗捌升

甕壹拾漆口大甕一口、中甕七口、小甕九口

正倉玖間並構木倉 借屋壹間

合壹拾間不動一間、動用一間、糲納一間

死馬皮參領 賣直稻參拾束 領別一十束

天平四年未償壹仟貳伯肆拾伍束伍把死伯姓一人  
免給福五十一束

徵納壹仟壹伯玖拾肆束伍把

都合簸振量定稻穀參伯玖拾壹斛振入卅五斛五斗  
四升五合

定實參伯伍拾伍斛肆斗伍升伍合動用

穎稻壹萬漆仟陸伯壹拾肆束玖把

正倉伍間並構木倉 借屋壹間

合陸間動用一間 穎稻納伍間

大領外從六位下薩麻君福志麻呂

少領外正七位下勳八等前君乎佐(マ)

主政外少初位薩麻君宇志マ

主帳外少位上勳十二等肥君廣龍

主帳外少位下勳十等會縣主麻多

酒捌斛  合

天平四年未償捌伯伍拾肆束伍把死伯姓二人  
免給福卅三束

徵納捌伯貳拾壹束五把

都合簸振量定稻穀漆伯參拾壹斛陸斗肆升振入六十六斛  
五斗一升二合

定實陸伯陸拾伍斛壹斗貳升捌合動用

簸振量定粟穀壹伯壹拾肆斛壹斗振入二十斛三斗  
七升二合七夕

定實壹伯參斛漆斗貳升漆合參夕

穎稻伍萬捌伯肆拾束捌把

穎粟漆伯伍拾伍束參把拾分把之玖

繡壹仟伍伯肆斛參斗壹升養老四年

酒壹拾斛漆斗肆升參合

正倉壹拾貳間正倉二十間  
借倉二間 並構木倉

新造壹間構木倉 借屋貳間

合壹拾伍間動用一間 繡納一間  
穎稻納十三間

大領外正六位下勳七等肥君病

少領外從八位下勳七等五百木部死

主政外少初位上勳十等大伴部足床

主帳无位大伴部福足

少領外從八位下勳十等薩麻君鷹口

主政外少初位上勳十等加士伎縣主都麻理

主帳无位建部神嶋

主帳无位薩麻君須加

河邊郡

天平七年定正稅穎稻貳仟陸伯玖拾束肆把

雜用壹伯捌拾漆束肆把

酒漆斗貳升參合高城郡酒者

依天平七年潤十一月十七日恩 勅、賑給寡惸等徒

合



# 第二章 近世



第一節 花尾神社関係資料

1 花尾権現御祭之事／享保一三年（一七二八）

〔黎明館所蔵（文書720）〕

（朱書）「此朱書者年中祭米として先升ニ而真米四石五升被相渡候

印ニ而候事、

但、四石五升之祭米之一条者大宮司役所江委細相知れ居候

事、

花尾権現御祭之事

正月元日

等堂王院かん房

（朱書）「一真米式斗式升」

一膳具拾式膳

一花米五升 赤ぬり木地四ツ

赤ぬり九、台ニすへ

一御飯米壺升五合 等堂王院ニ而焚方

一御造酒三盃

但、黒ぬりへし拾式、

三ツ葉之笹之葉銘々差上ル事、

一白木九きよう拾式膳

一赤ぬり木地拾式 御飯つき用

一つきぶくう四ツ

内、式ツ、瓦ニのせおこない棚ニ上ル

式ツ、同、御嶽ニ右同断、

但、山竹之葉ヲ敷事、

一小たぶ箸拾式膳

一御とう明

右つき調、都而大宮司

同御手なか、大宮司

正月二日 御祭り 折入

厚地村庄屋

（朱書）「一真米式斗式升」

上物右同断

外ニ、初壺升、

但、重式ツ入おこない棚ニ上ル、

正月三日 本地堂御祭り

代宮司

福永門・田中門

（朱書）「二真米壺斗八升」

一赤ぬり木地三ツ 御くうつき用

一すゝびん三ツ

但、御造酒つき用、三ツ葉笹之葉差事、

一御飯米壺升五合

但、等堂王院ニ而焚方、

一小たふのはし三膳

一御灯明有

つき方上方右同断、

一花尾山御宮内、黒ぬりへし之笹候得共、すゝびんニ 繰替ニ相成

候、

正月七日 御祭り

谷口門

(朱書)「一真米壹斗八升」

一膳具四膳

一黒ぬりへし六ツ

一御造酒三盃

但、笹之葉さし上ル事、

一御飯米壹升五合

但、焚方右同断、

一赤ぬり木地四ツ

但、御飯つき用、

一白木九行四ツ

但、きんだん折折かぶする事、

一花米五升

一赤ぬり木地四ツ

一赤ぬり九台四ツ

一次ぶくう拾式

内、五ツツ、弐膳、

弐ツ瓦こまたん、山竹葉敷

一小たふはし四膳

一御灯明有

右、つき方上ヶ方同断、

正月十二日 御祭り

大乘院

(朱書)「一真米弐斗弐升」

一上物元日御祭同様、つき方上ヶ方右同断

一大かね有り

但、ならし方之数拾三、

正月十三日 御代参

(朱書)「一真米弐斗弐升」

一御宮外取扱所夫

一夫仕名主

一隨身門内布砂有、横間弐尺五寸

一盛砂片平九ツツ、都合拾八

正月六日 御祝物

但、所夫弐人大宮司方江相付相勤事、

二月 ひかん入御祭

福元門

(朱書)「一真米壹斗八升」

一上物正月七日御祭同様

一しめおろし同断

二月 ひかん神楽舞

所中

但、引合本触より夫作与、

一御造酒

但、焼酎二而相濟事、

へし三ツつき方、

一花米壹升

一赤ぬり木地三ツ 花米つき用

一参銭拾三銅

一千度参り日数しきふ花

三月三日 御祭り

今別府門

(朱書)「一真米壹斗九升」

一大ひよふり拾貳膳 赤ぬり腰高ノ筈

但、壹膳餅数拾貳ツ、

桃枝銘々敷事、

外、壹膳瓦貳ツ、おこない棚

右同断

一御造酒三盃

一黒ぬりへし拾貳、御造酒次用

一花米五升

一赤ぬり木地四ツ 花米次用

一赤ぬり九台四ツ

一灯明有

一大かねならし方数拾三

一餅押シ方前日しめおろし

かん房・大宮司・庄屋・本触

四月十五日 御祭

盛満門

(朱書)「一真米壹斗八升」

一上物正月七日祭り同様

一しめおろし三日前 大宮司

五月五日 御祭り

田中門

(朱書)「一真米貳斗貳升」

一茅卷拾三掛

但、赤ぬり腰高二しよふぶ敷

上ル事、

卷方三月三日之通り、

一御造酒三盃

一黒ぬりへし拾貳

但、御造酒つき用

笹之葉右同断

一花米五升

一赤ぬり木地四ツ

但、花米次用、

一しめおろし、前日大宮司

五月 皐月神楽

所中

引合夫ひかん神楽同様

一花米壹升

一赤ぬり木地三ツ 花米次用

一御造酒はくし

一 黒ぬりへし三ツ 御造酒つき用

一 千度参り有り

一 参銭三拾三銅

五月四日 御祝物

大平門

ふつしよぶ持越大宮司江相付祝方事

六月十五日 祇園御祭

大平門

(朱書) 「一真米壹斗八升」

一 上物正月七日御祭同様

一 しめおろし三日前大宮司しめおろし方

七月七日

脇門

(朱書) 「一真米壹斗八升」

一 上物右同断

一 しめおろし同断

八月 ひかん入御祭

茄子田門

(朱書) 「一真米壹斗八升」

一 上物右同断

一 しめ右同断

八月 ひかん神楽

所中

但、引合夫二月同様

一 上物二月ひかん同様

八月十二日

一 御造酒三盃

但、付酒、

右大宮司方

一 所夫壹人大宮司方江取事

九月九日 御祭り

米倉門

(朱書) 「一真米貳斗貳升」

一 上物正月元日御祭同様

一 しめおろし右同断

十一月朔日 御祭り

久保田門

(朱書) 「一真米壹斗八升」

一 上物正月七日御祭同様

一 しめ右同断

十一月 初申御祭り

代宮司

岩戸門

一 岩戸山之神三社

(朱書) 「一真米壹斗八升」

一 花米壹升

一 御くうしとき有

一 御造酒有

一同所講人耆社

但、上物右同断、

一 しめおろし当日、大宮司

十一月十八日 六社講(権カ) 現御祭り

代宮司

久保山門

(朱書) 「一真米壹斗八升」

一 上物初申祭り同様

一 しめおろし同断

花尾山御嶽熊(熊野カ) 三社大講(権カ) 現御祭り

坂口門

一 御造酒三盃

一 花米壹升

一 御くうしとき有

十一月廿四日 御祭り

(朱書) 「一真米壹斗八升」

一 上物正月七日御祭同様

一 しめおろし三日前大宮司

菌田門

十一月廿八日 みうけん(妙見カ) 御祭り

代宮司

永田門

(朱書) 「一真米壹斗八升」

一 花米壹升

一 御造酒三盃

一 御くうしとき有

一 しめおろし当日大宮司

十二月十二日 御祭り

大乘院

(朱書) 「一真米貳斗貳升」

一 上物正月元日御祭り同様

花尾山いんす御祭り

等堂王院かん房

但、閏月有之候年ハ閏月、

無之年ハ何月ニ而も宜事、

一 上物膳具四膳、正月七日御祭り同様

十二月十五日 御祭り

上床門

(朱書) 「一真米貳斗貳升」

一 上物正月七日御祭り同様

一 しめおろし三日前大宮司

五月 虫ぎねん

所中

一 膳具四膳、正月七日御祭同様

- 一 花米壹升
- 一 参銭三拾三銅

十二月廿五日正月之御祝物

- 一 いけわい五ツ
- 一 門松花炭并うらしろ・橙・いつる葉
- 一 柱折調

右者所夫五人大宮司方江相付相勤事

三月杉葉落シ所夫四人大宮司方江

八月七日所夫五人大宮司方江

八月十一日所夫四人大宮司方江

八月十三日石とふろとき方所夫四人大宮司方江

十二月十二日御祭ニ付取構方所夫夫仕名主

御直参之節、御宮内所夫夫仕名主

差引大宮司

一 隨身門内布砂横式尺五寸盛砂

左右ニ拾八

一同外布砂有

一 御石布砂之事、横間式尺

盛砂左右ニ九ツ

一 丹後局井桓之内こふらいいべい

御はいせき式枚大宮司より敷付之事

一 いよきんあじり井桓之内右同式枚

御はいせき大宮司より右同断

一 大宮司勤場御石いがき外ニ相勤事、

一 じろ堂鎖前卷ツ

一 びしや門右同式ツ

一 隨身門

一 金とふる卷対

一 唐金くわひん卷対

右式行御宮内有、

一 びしや門堂平組畳九枚

右堂ノ内有之候、

右三行大宮司方預り、御石花香所、

享保十三年戊申九月改之、

大宮司 貴嶋甚右衛門

正徳三年癸巳四月十一日

しる堂大かねならし方大宮司受持被仰付候ニ付、御受いたし  
代々相勤事、毎月朔日十二日十五日廿八日朝夕ならし方堅ク  
可相守事、

『(旧)郷土史』上巻 二二四頁 参照

## 2 廢寺之節花尾山江仰渡之写／慶應三年（一八六七）、慶

應四年写

〔黎明館所藏（文書719）〕

（表紙）

「廢寺之節

華尾山江仰渡之写」

写

一高式拾石

郡山

平等王院

右者、思召之詛被為在、此節 華尾神社別當職被召放候二付、大乗院江合院被仰付、御宮御内陣江御奉納之勢至菩薩其外之仏体并仏具等者都而同寺江引取候様被仰付、右寺高之儀者被召揚候、一頼朝公御髮毛与相唱、右江被為納候髻觀音御社内江御安鎮相成居候二付、此節大乗院江御格護被仰付候、一御前御切封二而被為納候 頼朝公御髮毛之儀者是迄之通御内陣御格護被仰付候、

一右寺跡者其俣大宮司役所被仰付候、

一当分之大宮司役所者取除二而同所江御建立之護国御神殿前通道幅

三間位此節開方之上、左右江杉植付方被仰付候、

一愛染明王堂宇并平等王院脇江建立之觀音堂者解毀被仰付、仏体者都而大乗院江可引取候、左候而御社入口石仏之儀者取除候様被仰付候、

一高式拾五石宛

平等王院脇坊

曼荼羅寺 普賢院

本地院 多聞院

右、前条同断二付此節廢寺被仰付、寺高被召揚候、左候而多聞院儀者寺家取除、地面者護国御神殿御庭内相成候様被仰付候、

一熊野権現 本地弥陀觀音藥師

右華尾山巔二往古より御安鎮之所、本地之説を以御神殿江藥師像安置相成居候処、右者此節大乗院格護被仰付、熊野権現祭祀之儀者大宮司江委任被仰付、代宮司貴嶋甚兵衛二も致手伝候様被仰付候、

御山内末社

一稻荷 一春日

一秋葉 一王子

右神社祭祀之儀者以来大宮司社役を以相勤候様被仰付候、一御局御灰塚江六地藏体之仏軀彫刻之由候間、右者此節取除被仰付候、左候而圀垣等之儀是迄之通堅固二召置候様被仰付候、

一御山内町石二彫刻之梵字者此節都而消除候様被仰付候、

一御宮脇江安置之毘沙門像者大乗院江被引移、右堂宇者当分之通被召置、以来社家中繰廻を以長日番相勤、御社頭廻諸所掃除方等無懈怠相勤候様被仰付候、

一二王門并鐘樓者取除二而二王門跡江者二之華表御引直被仰付候、一華尾社之儀、是迄蒲生其外三ヶ郷住居之社家被召附置御祭祀相勤候様今般御祭典之次第神道一篇被仰付候二付而者大祭等之節可差

支候付、以来、市来・串木野・隈之城・榎脇・始羅郡山田・帖佐・

谷山・伊作八ヶ郷之社家被召付、郷々神社祭祀等之儀者是迄之仕  
向通被仰付、都而備前守支配被仰付候、

多聞院支配隱居寺跡

一山野地七畝八歩

但、材木与唱来候、

大乘院支配

一右同 式反五畝

但、大師山与唱来候、

曼荼羅寺支配隱居寺跡

一右同 五畝

但、切通与唱来候、

大乘院支配

一右同三反三畝拾歩

但、弘川与唱来候、

右弘川与唱来候地面者以来大宮司支配被仰付候、外三ヶ所前条脇

坊廢寺地之儀者權大宮司并平社家可召移候附取調可被申出候、

一厚地村之儀全体神領地、殊二百姓二茂是迄大乘院江相附候奉公も

有之候付、華尾神社御祭事其外夫役等も外村割合申付置候趣も有

之候得共、此節大乘院別当職被召放神道一篇之御祭祀被仰付候二

付而者奉公方も相省候二付、以来右百姓共儀御神事并御社御修甫

者勿論、御奉公人差入日数之不抱多少、都而御神社ニ關係之公役

者一切厚地村百姓受持ニ申付候、

神領之内

一高七拾石之所務米

右、年中御祭祀向并諸社家御賄料等ニ以来右之通被差分置候条、

神供物等一切物奉行所御規模帳ニ居置、右所務米を以相弁候様被

仰付候、左候而是迄 御神事勤之節社家中江御賄并布施物被下候

節、寺社奉行江申出、物奉行手形を以為渡来由候ニ付、以来も其

通被仰付、布施物之儀向後御祭奉与唱被召替候条、供物等之儀物

奉行より取調可申出候、

一真米四石五升

右者厚地村六社權現其外小社之為祭祀料、神領高所務米之内より

大宮司方江被相渡候条、村中配当方之儀是迄之通可取計候、

一高式百石之所務米

六拾壹石式斗

一御切米式拾五石

井上備前守

一御切米七石六斗五升宛

華尾神社權大宮司

有屋田清次郎

藪田但馬介

一御切米五石宛

郡山一ノ宮大明神社司

前田安房

華尾神社代宮司

貴嶋甚兵衛

右者 花尾神社領郡山厚地村高八百九拾九石六斗三升四合四才之内

より右六行之通所務米差分被相渡候二付、右差引残高所務米を以、  
以来御社頭御修甫又者臨時之御祭料等二被振向置、余分者年々被  
屯置候条、帖佐与御代官より高員教等猶又委細取調可申出候、  
一御切米之儀、神領高所務米之内より被成下候二付而者当秋取調迄  
之間御米繰之儀物奉行御代官致吟味可申出候、  
一右被召揚候寺高之儀、当秋より帖佐与御蔵入二而海陸軍方江被差  
分置候、

一住僧之儀引取方之儀、外廢寺之振合通、

一堂宇并寺家廻其外取除亦者引直二付而者掛御作事奉行受持二而可  
致取扱候、

一寺地跡御竿入之上諸取扱向并道広方等掛郡奉行より可致取扱候、

一此節取毀之堂宇并家作廻等之儀、同所社家之者并江申受等可被仰  
付候間、取調可申出候、

右之通被仰付候条、右箇条向々於御役局遂評議、混雜之儀共無之  
様可被致取扱候、此旨寺院取調掛御役々江申渡、物奉行御代官其  
外可承向江茂可申渡候、

四月

刑部

慶応三年卯四月、新納刑部殿より仰渡之写、

慶応四年戊辰九月於樋脇温泉岩城盛英写之、

此主

貴嶋宇治

源朝臣貴嶋蔵人頼恵

### 3 棟札／嘉永五年（一八五二）

從四位上左近衛權中将源朝臣齊彬

及鐘楼造替

上棟薩州日置郡山郷花尾大権現

宝殿舞殿拜殿

嘉永五年壬子八月二日起工

同六年癸丑三月廿八日畢功

城代兼家老 島津豊後藤原久宝

寺社奉行 島津相馬源久平

側役趣法掛 三原藤五郎藤原義礼

使番作事奉行勤 石原龍助加茂近封

高奉行細工奉行勤 堀八郎右衛門藤原金純

寺社方取次 田原仲之丞藤原直容

作事方掛藏方目附 岡村新之丞藤原良平

作事方下目附 高崎権大夫藤原能賢

作事方下目附助 松元寛左衛門平良中

細工所下目附 長井仲兵衛藤原利謙

細工所下目附定助 白坂郷左衛門藤原敦烈

栗川権十郎藤原用行

種子島次左衛門藤原時行

宇都宇佐衛門藤原能安

児玉彦左衛門藤原利貞

林仲之丞多々良昌経

細工所書役

大工頭 阿蘇鉄也中臣政辰

飾師主取 有村貞太郎平正守

塗物師主取 植村平右衛門藤原長寛

令法久住 利益人夫

聖主天中天 迦陵頻伽声

卍 (種子キリク弥陀) (種子サ観音) (種子バイ薬師) 奉再興花尾権

現宮

哀愍衆生者 我等令敬礼

天下泰平 国土安全

夫当社三社大権現宮者在山奇地靈樹木森鬱間而号満家院厚智

山其崇神也、安置源右将頼朝公及局永金阿闍梨三軀之尊像而

雄鎮国家之靈殿也、物換星移宮宇稍頽敗焉、当山正僧正堯満

慨之而聞之于今公々則命有司經營之土木大興始去歲壬子而終

今茲癸丑之秋複故加新結構倍于当初也、以此思之神靈之德沢

豈不啻天長地久乎、回以記之為棟札文焉尔則奉祈、

斉彬国君及斉興公若殿様

御武運長久御息災延命御子孫繁昌

国家泰風雨順時百穀成熟万民豊楽者也

維時嘉永第六龍集癸丑十一月十三日大曜參宿

別当平等王院兼帶大乘密院四十二葉正僧正堯満

開眼供養導師大乘院院代安養院現住法印覺寶敬白

裏

我此土安穩天人常充滿

(種子)

園林諸堂閣種々宝莊嚴

諸定奉行 潮音院 覺道

檀行司 松樹院 覺品

右同 延壽院 順應

大乘院知事 普賢院 騰周

平等王院看坊 實音

多聞院 諦傳

曼荼羅寺 堯寛

本地院 快栄

総而供養僧侶三十五口

寶珠院現住権大僧都法印覺亮謹識

厚地村莊屋 中馬弥兵衛平秀世

# 第三章 近現代



## 第一節 郡山町・町歴代三役、議長、教育長

### 村長・町長

氏名	就任～退任	氏名	就任～退任
白坂素一郎	明治 22～27.9	多丸善太郎	昭和 5.2～6.2
重久純孝	明治 27.9～32.4	国分友睦	昭和 6.3～21.10
郡山喜平次	明治 32.5～35.3	増満喜吉	昭和 21.10～30.5
有馬純幸	明治 35.3～35.10	国分友睦	昭和 30.5～31.9 ※
木場貞幹	明治 35.10～38.3	国分友睦	昭和 31.10～42.4
郡山矢一郎	明治 38.4～43.12	中村 正	昭和 42.5.1～平成 3.4.30
竹内隆助	明治 43.12～大正 9.3	岩戸良治	平成 3.5.1～7.4.30
木場貞義	大正 9.4～昭和 5.1	池山泰正	平成 7.5.1～16.10.31

(役場資料。※ 昭和31年9月までは郡山村長)

### 助役

氏名	就任～退任	氏名	就任～退任
有馬純幸	明治 22.10～35.2	山口盛高	昭和 21.5～22.3
山口盛秀	明治 35.3～38.8	白坂正男	昭和 22.6～30.5
藤崎造右衛門	明治 38.9～(大正 11.1)	中村 正	昭和 30.7.2～42.3.21
多丸善太郎	(大正 11.2～昭和 5.2)	大淵脇強	昭和 42.6.29～50.10.6
有馬栄一郎	(昭和 5.2～6.2)	井上邦矢	昭和 50.10.6～60.4.1
肥後喜一	(昭和 6.3～10.3)	前田百千	昭和 60.4.1～平成 3.6.10
柳田良治	昭和 10.4～15.2	池山泰正	平成 4.4.1～7.2.24
重久尚孝	昭和 15.3～21.3	藪田睦雄	平成 7.7.1～16.10.31

(役場資料、但し( )内の期日は『鹿児島新聞』の記事より作成)

### 収入役

氏名	就任～退任	氏名	就任～退任
井尻冬七	明治 22.6～25.12	中園金之助	昭和 6.3～16.3
郡山喜平次	明治 25.12～32.4	山口盛孝	昭和 16.5～19.2
大内田七兵衛	明治 32.5～35.11	吉留義行	昭和 19.3～31.3
竹内隆助	明治 35.11～36.3	谷山静雄	昭和 31.8.10～43.8.10
桑原市蔵	明治 36.3～36.9	有馬秀夫	昭和 43.8.10～51.8.10
永田栄之進	明治 36.11～44.10	小原正澄	昭和 51.8.10～59.8.10
郡山源一	明治 44.11～11.1	前田利賢	昭和 59.8.10～平成 1.2.1
多丸善太郎	大正 11.1～15.9 ※	藪田睦雄	平成 1.3.1～7.6.30
有馬栄一郎	大正 15.9～昭和 6.3	木場新浩	平成 7.7.1～15.6.30

(役場資料、※ 本資料では、多丸善太郎の任期は上記の助役の任期と重なっている。  
有馬栄一郎の任期は上記の助役の任期と重なっている。)

### 町議会議長

氏名	就任～退任	氏名	就任～退任
郡山源一	昭和 21.5.1～22.6.1	石神盛行	昭和 54.5.1～58.4.29
白坂昇	昭和 22.6.2～26.4.29	岩戸良治	昭和 58.5.2～平成 2.12.25
折田政雄	昭和 26.5.4～28.1.30	谷口孝義	平成 2.12.25～3.4.29
脇栄吉	昭和 28.2.24～30.4.29	上野美義	平成 3.5.1～6.12.22
重久尚孝	昭和 30.5.6～34.4.29	重信明満	平成 6.12.22～7.4.29
宮田正寿	昭和 34.5.6～46.4.29	益満勝彦	平成 7.5.1～11.4.29
竹下久盛	昭和 46.5.1～49.2.25	白坂親志	平成 11.4.30～11.9.28
片平敬次	昭和 49.3.5～54.4.14	盛満一兵	平成 11.9.28～16.10.31

(議会事務局資料)

### 教育長

氏名	就任～退任	氏名	就任～退任
永尾歳行	昭和 31.10.1～39.9.30	善福肇	昭和 55.10.6～平成 4.10.5
内匠屋一三	昭和 39.10.6～43.3.31	牛野喜一郎	平成 4.10.6～12.10.9
木山常一	昭和 43.4.10～47.10.5	大迫健一郎	平成 12.10.9～16.10.31
山下正男	昭和 47.10.6～55.10.5		

(教育委員会資料)

第二節 各学校 校歌・歴代校長

◇ 郡山小学校

郡山小学校校歌

作詞 椋 鳩十  
作曲 武田恵喜秀

一 瑠璃晴天の大空に  
そびえて高い八重の山  
峠越す虹の理想持ち  
未来を開く郡山  
ああ 郡山小学校

二 松尾城址の森木立  
すくすく伸びて天をつく  
森の若木の力持ち  
元気に伸びる郡山  
ああ 郡山小学校

三 甲突川の水清く  
明けの明星影うつす  
その清らかな心持ち  
大きく育つ郡山  
ああ 郡山小学校  
〔「学校要覧」 昭和四七年制定〕

(旧) 郡山小学校校歌

作詞 養手重則  
作曲 西 勇恕

一 松尾の城のあとどころ  
明るい窓よ ときわぎよ  
なかよしこよし 元氣よく  
学ぶこの幸 この恵  
小学 小学 郡山

二 水上清い甲突の  
川の流れよ せせらぎよ  
なかよしこよし 肩組んで  
磨くこの魂 このからだ  
小学 小学 郡山

三 はるかに仰ぐ八重岳の  
かがやく嶺よ 白雲よ  
なかよしこよし すくすくと  
育つこの夢 この望  
小学 小学 郡山  
〔「八〇周年記念誌」 昭和二八年制定〕

郡山尋常高等小学校校歌

作詞 肥後盛熊  
作曲 不明

一 明治十年ととせ のちみとせの後三年  
吾が学校まなびやの開かれし  
遠きゆかりを思うとき  
胸に高鳴る郷土愛

二 花尾八重山いと高く  
甲突川はいと清し  
自然の姿身にしめて  
学ぶ我等の楽しさよ

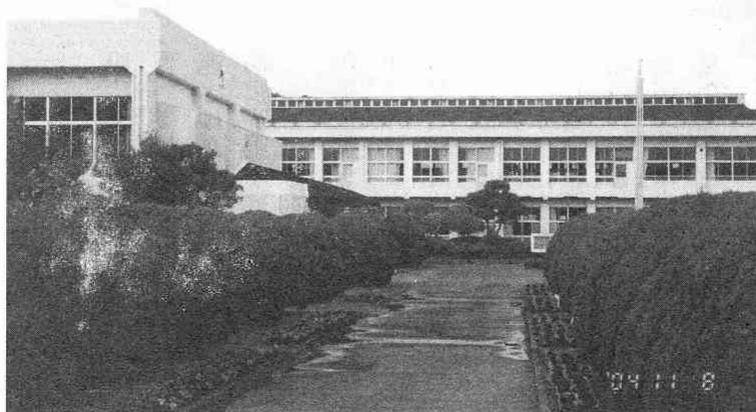
三 誉れも高き薩摩人  
勅語みことごの旨をかしこみて  
皇国みくにの為に世の為に  
重き使命を果たさなん  
〔(旧) 郷土史・下〕 昭和五年制定〕

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
	不明	明治 11～19	12	川路 迪郎	昭和 8.4～12.3
1	鬼丸 角司	明治 19～25.2	13	岡元 定国	昭和 12.4～14.3
2	白坂 金之丞	明治 25.2～26.7	14	中村 利男	昭和 14.4～17.3
3	長谷 辰二	明治 26.8～32.3	15	今市 清佑	昭和 17.4～20.12
4	山口 醇	明治 32.4～34.3	16	田中 彦吉	昭和 21.1～21.8
5	大寺 量之助	明治 34.5～34.12	17	地福 森吉	昭和 21.11～25.3
6	川畑 吉助	明治 35.2～39.3	18	横山 満雄	昭和 25.4～28.3
7	堀之内庄五郎	明治 39.4～43.3	19	新納 忠良	昭和 28.4～36.3
8	外山 直吉	明治 43.4～43.10	20	島田 一春	昭和 36.4～37.3
9	入来院 貞熊	明治 43.10～45.3	21	坂之上新蔵	昭和 37.4～43.3
10	林川 正浩	明治 45.4～大正 12.3	22	稲津 工	昭和 43.4～46.3
11	北野 栄蔵	大正 12.4～昭和 8.3			

昭和 46 年（1971）4 月常盤小・大谷小と合併し、（新）郡山小となる

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
1	鬼丸 良孝	昭和 46.4.1～49.3.31	8	植村 輝美	平成 3.4.1～6.3.31
2	城内 清人	昭和 49.4.1～53.3.31	9	青山 巖豪	平成 6.4.1～9.3.31
3	原口 秀雄	昭和 53.4.1～55.3.31	10	籠原 眞吾	平成 9.4.1～12.3.31
4	宮之原智徳	昭和 55.4.1～57.3.31	11	迫田 瑞雄	平成 12.4.1～15.3.31
5	養母 秀人	昭和 57.4.1～60.3.31	12	徳田 博	平成 15.4.1～
6	中村 義廣	昭和 60.4.1～62.11.4			
7	西田 實	昭和 62.11.5～平成 3.3.31			

（「郡山小学校要覧」より）



現在の郡山小学校

◇ 花尾小学校

花尾小学校校歌

作詞 蕨手重則  
作曲 西 勇 恕

- 一 その名も高い うぶすなの  
花尾神社の あるところ  
鐘がなるなる きょうもまた  
みんな元気で 精いっぱい  
学ぶ花尾の 力の子
- 二 甲突川の 水上の  
清く明るい せせらぎに  
歌がわくわく きょうもまた  
みんな仲良く 助けあい  
励む花尾の 力の子
- 三 朝夕仰ぐ 八重岳の  
嶺にかがやく 白い雲  
夢がよぶよぶ きょうもまた  
みんな雄々しく 羽ばたいて  
伸びる花尾の 力の子  
〔学校要覧〕 昭和三〇年制定

花尾尋常高等小学校校歌

作詞 川路迪郎  
作曲 田中義人

- 一 花尾の山の春の花 甲突川の秋の水  
明るき姿清き色 幼き心育まん  
自然の教え豊かなる 我が魂の揺籃地
- 二 あな賢しや大詔 世界に比なき帝国の  
輝く歴史彌遠き 祖先の遺風承け継ぎて  
若き生命の一筋に 使命や重し祖国の子
- 三 老杉高く秋の空 千古の縁秘めて立つ  
神威床しき神社 朝な夕なに拝みて  
皇道広く施さむ 尽忠報国誓うかな  
〔旧〕郷土史・下 昭和一一年制定
- (傍注は『鹿兒島新聞』より。その記事では、二番と三番の三行目が入れ替わる。)

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
1	大山 武	大正 9.8～13.3	14	堀内 徹	昭和 47.4～52.3
2	加覧善左衛門	大正 13.4～昭和 6.3	15	宮下 千秋	昭和 52.4～54.3
3	松下 茂丸	昭和 6.4～8.3	16	竹下 虎雄	昭和 54.4～56.3
4	小牧 豊	昭和 8.4～8.11	17	吉原 政四郎	昭和 56.4～59.3
5	石田 正志	昭和 8.12～9.8	18	林 正春	昭和 59.4～62.3
6	鮫島 利道	昭和 9.9～12.3	19	寺師 和子	昭和 62.4～平成 1.3
7	野間口 高	昭和 12.4～21.3	20	有村 正照	平成 1.4～3.3
8	竹下 義章	昭和 21.4～26.3	21	川原 清美	平成 3.4～6.3
9	重信 国安	昭和 26.4～31.3	22	原口 孝一	平成 6.4～10.3
10	山下 貢	昭和 31.4～40.3	23	有村 搏一	平成 10.4～12.3
11	嶽崎 政美	昭和 40.4～	24	牧之瀬 育子	平成 12.4～16.3
12	榎園 徳蔵	昭和 40.4～44.3	25	井上 義一	平成 16.4～
13	田平 重雄	昭和 44.4～47.3			

(「花尾小学校要覧」より)



現在の花尾小学校

◇ 南方小学校

南方小学校校歌

作詞 浜田盛秀  
作曲 西 勇恕

一 雲ばらいろに 明けそめて  
若木のみどり 三重が岳  
ああ仰ぐ目も はつらつと  
あふれる希望 わく力  
南方校 花かおる

二 庭のいちようを はぐくんで  
流れも清い 川田川  
ああ向上の 意気高く  
学びの道に はげむとき  
南方校 鐘さやか

三 平和な広田 玉の汗  
ゆたかにみゆる 東俣  
ああむつまじく 肩くんで  
六年たのしい 夢と歌  
南方校 光あれ

〔「学校要覧」 昭和三年制定〕

南方尋常高等小学校校歌

作詞 田原実樹  
作曲 田原 修

一 雅健の姿三重岳は 俊麗の裡力あり  
清く流るる甲突は 進みて止まぬ気を示す  
此処に御神の名に負ひて 立てる母校や南方

二 隼人の祖の宮柱 太しく建てる靈域に  
耀き残る遺蹟や 鍛えし文武の跡承けて  
学びの窓の明暮に いざ修めなむ人の道

三 行く手の道は遠くとも 我に至誠の努力あり  
集へ同胞手を取りて 共に教へつ教わりつ  
学びの園の萬ごと いざ究めなむ諸共に

四 健児の胸にたぎる血や 意気は我等の生命にて  
不撓の駒の身体練り そば立つ山も踏み越えつ  
学びの林わけ入て やがてかざさむ花紅葉

〔(旧) 郷土史・下〕 昭和二年(ころ)

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
1	長谷 辰二	郡山小学校校長兼任	16	宮下 弘之	昭和 28.4.～34.3
2	山口 醇		17	石神 一男	昭和 34.4.～40.3
3	河野 貞和		18	西 市次	昭和 40.4.～46.3
4	大寺量之助		19	黒岩 東三	昭和 46.4.～47.3
5	加世田真義	明治 34.5～43.	20	伊藤 祐弘	昭和 47.4.～52.3
6	河野 貞和	明治 43.3. ～大正 2.	21	中村 司	昭和 52.4.～55.3
7	宮田 俣一	大正 2.～8.12	22	宿利原 甚吉	昭和 55.4.～60.3
8	上之 覚蔵	大正 9.1.～15.2	23	下 利三	昭和 60.4.～63.3
9	山元 貞夫	大正 15.3. ～昭和 7.2	24	上江 達也	昭和 63.4.～平成 1.3
10	今田中諭吉	昭和 7.3.～13.2	25	小牧 三郎	平成 1.4～5.3
11	小倉 魁	昭和 13.3.～17.2	26	岩本 重弘	平成 5.4～7.3
12	相良 樫男	昭和 17.3.～19.2	27	城戸 賢信	平成 7.4～9.3
13	宮原 景久	昭和 19.3.～20.1	28	松下 志朗	平成 9.4～13.3
14	沖元 恕	昭和 20.2.～22.3	29	蜷川喜久夫	平成 13.4～16.3
15	徳重 時雄	昭和 22.4.～28.3	30	原口 敏夫	平成 16.4～

(「南方小学校要覧」より)



現在の南方小学校

◇ 郡山中学校

<p>三 祖国の栄え村の幸 ひらく使命をにないつつ 文化をききずく勤労の 力あふれて日に進む ああわが郡山中学校 〔創立五〇周年記念誌〕 昭和二六年制定</p>	<p>二 流れ清らかな甲突の 水が貫く道一つ 真理の光もとめよと たゆまず磨く身と心 伸びゆくあすへ星が呼ぶ</p>	<p>一 綾雲におう八重の峰 はゆる平和の朝日影 希望新たに仰ぎつつ 自主に燃えたつ学園に 高き理想の鐘は鳴る</p>	<p>郡山中学校校歌</p> <p>作詞 池上喜一 作曲 田中義人</p>
--	--	---	---

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
1	永尾 歳行	昭和 22.4.30～25.4.7	10	濱崎 盛男	昭和 55.10.6～58.3.31
2	加世田孝義	昭和 25.4.8～27.10.31	11	久保 功	昭和 58.4.1～61.3.31
3	重岡 昇	昭和 27.11.1～33.3.31	12	加治佐 初	昭和 61.4.1～平成 2.3.31
4	遠矢 幸六	昭和 33.4.1～36.3.31	13	東條 哲雄	平成 2.4.1～4.3.31
5	深野 敏乗	昭和 36.4.1～40.3.31	14	義山 宏文	平成 4.4.1～7.3.31
6	小野田実秋	昭和 40.4.1～45.3.31	15	鮫島 寛行	平成 7.4.1～10.3.31
7	福田 厚二	昭和 45.4.1～48.3.31	16	上川 勝則	平成 10.4.1～12.3.31
8	前田 清臣	昭和 48.4.1～52.3.31	17	内城 正治	平成 12.4.1～16.3.31
9	善福 肇	昭和 52.4.1～55.10.4	18	竹添 利行	平成 16.4.1～

(「郡山中学校要覧」より)



現在の郡山中学校

◇ 常盤小学校

常盤小学校校歌

作詞 不明  
作曲 不明

一 山紫に 水清き  
常盤の里の学び屋に  
真理と正義を求めつつ  
結ぶ友愛かたく組み  
集う我等ぞ幸多し

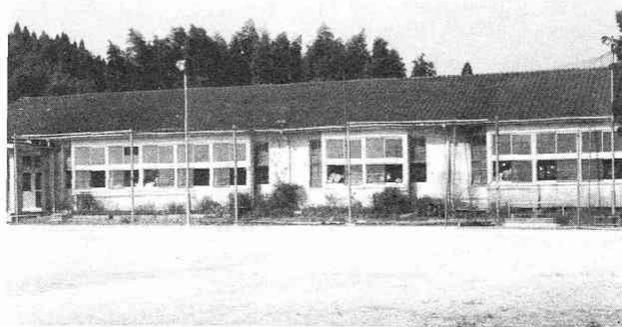
二 ゆるがぬ姿美しく  
聳えて立てり八重の嶽  
理想を高くかかげつつ  
祖国興すは我等ぞと  
集う我等の任重し

三 二百有余のはらからが  
学びの業にはげむとき  
常盤のみどり色映えて  
希望の光輝きて  
むらに平和の鐘が鳴る

〔(旧) 郷土史・下〕 昭和二十七年制定

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
授業生	田辺猪太郎	明治 25.10.1~27	3	竹下藤四郎	大正 10. 3.31~11.3.31
訓導 (兼)	長谷辰二	明治 27~ (郡山小訓導兼校長)	4	平田兵寿	大正 11.3.31~13.3
			5	植木勇熊	大正 13.3~昭和 5.3
准訓導	藤島良徳	明治 28.9~	6	竹之内令	昭和 5.4.1~10.3
訓導 (兼)	河野貞和	明治 29.10~ (郡山小訓導兼校長)	7	中村藤吉	昭和 10.4~14.3
			8	前田渡行	昭和 14.3.31~23.3
准訓導	郡山繁志	明治 29.10~31.9	9	清藤実行	昭和 23.3.31~28.3
准訓導	井尻新之助	明治 31.9~	10	相良隆重	昭和 28.3.31~32.3
訓導 1	郡山繁志	明治 34.5~大正 6.3.31 (明治 38 応召で休職)	11	池水喜一	昭和 32.3.31~37.3
			12	黒岩東三	昭和 37.3.31~46.3
2	黒木源左衛門	大正 6.3.31~10.3.31	昭和 46年 4月、郡山・大谷小と合併する		

(「常盤小学校沿革史」より)



常盤小学校跡

◇ 大谷小学校

三	二	一	大谷小学校校歌 作詞 浜田盛秀 作曲 米倉春美
松風歌う餅ヶ岡 雪降り山の夕もみじ ああ仲よしの肩組みて 夢うつくしくそだつとき 大谷校よ栄えあれ (旧) 郷土史・下 昭和三六年制定	とどろの滝ににじわいて さやかな流れ神の川 ああすごやかに身をきたえ 玉なす汗の光るとき 平和な庭よ風かおる	明けゆくみどり八重岳を 仰げば高いあかね雲 ああ花ひらくまなびやに 力あわせてはげむとき 希望の窓よ鳥がなく	

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
1	野崎 慶益	明治 34.5.18~43.3	8	中村 秀男	昭和 10.3.31~22.3.31
2	森 長 信	明治 43.4~大正 2.11	9	徳留 己徳	昭和 22.3.31~23.8.31
3	伊集院満助	大正 2.12~6.10.27	10	郡山 繁義	昭和 23.8.31~28.3.31
4	松元 八蔵	大正 6.10.27~10.3.31	11	梶原 影忠	昭和 28.4.1~31.3.31
5	野崎 三省	大正 10.3.31~	12	内匠屋一二	昭和 31.4.1~39.10.1
※	有馬 某	~大正 15.3.31	13	江夏 与一	昭和 39.10.10~44.3.31
6	奥 善 次	大正 15.3.31~昭和 8.3.31	14	福留 哲雄	昭和 44.4.1~46.3.31
7	阿 萬 保	昭和 8.3.31~10.3.31			昭和 46年 4月、郡山・大谷小と合併する

(「大谷尋常小学校学校沿革史」より)

※ 有馬校長の着任記録が無く、名前を掲載できなかった。また、沿革史では歴代に数えていない。



大谷小学校跡

◇ 大谷中学校

大谷中学校校歌	
作詞 不明	
作曲 不明	
一 緑の山に 夜は明けて 我を呼ぶような 八重の峰 今朝も仰ぎて <small>まなびや</small> 学舎に 希望は燃ゆる 若き我	(一・三番は不明)

※ 上記校歌は資料が見つからず、当校の卒業生、桑原ミヨ子から教示を得ることができた。

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
1	森 山 霞	昭和 22.5.1～24.3.31	3	梶 原 影 忠	昭和 29.4.1～31.3.31※
2	坂 元 良 雄	昭和 24.4.1～29.3.31	4	内 匠 屋 一 二	昭和 31.4.1～32.3.31※

(「郡山中学校創立十周年記念 沿革史」より)

※ 梶原・内匠屋校長の任期は、大谷小学校の任期と重なっているが、資料のまま掲載した。



大谷中学校 (32年 桑原ミヨ子所蔵)

第二節 戦没者一覽（西南戦争は第八編第一章に掲載）

『(旧)郷土史より』

(1) 日清戦争

谷山 喜之助 熊本陸軍病院

田島 喜一（以下三名とも）台湾澎湖島馬公城

柳元 八太郎

諏訪原 善四郎

園田 四郎助

『(旧)郷土史』下巻より

(2) 日露戦争

〔陸軍〕

藤崎 大蔵 清国大馬格山

谷口 助次郎 清国遼陽

上床 矢之助 清国沙河堡

田中 喜一郎 清国開原兵站病院

福元 善蔵 清国海域兵站病院

柳田 十助 熊本予備病院

小野 甚之助 清国永陵病院

米永 庄吉 大越予備病院

〔海軍〕

平野 源次郎

郡山 矢吉

(3) 日中戦争〜太平洋戦争

『(旧)郷土史・下』より転載し、菅原神社招魂碑銘で補足したが、戦没地の表記を現在の一般的な呼称に変えたところもある。

戦没者名 戦没年月日(昭和) 戦没場所 所属

油須木

柳田 善熊 一三・九・一九 華中 陸軍

竹下 定男 一五・五・一五 華中 陸軍

篠原 正春 一八・八・四 南方海方面 海軍

宮路 一夫 一八・一〇・八 フィリピン 陸軍

桑原 司 一九・二・六 南方諸島 海軍

稲森 義男 一九・六・二五 華北 軍属

徳田 盛吉 一九・九・一 フィリピン 航空

栗須 繁 二〇・一・七 東シナ海 軍属

久保利 之 二〇・一・二一 フィリピン 陸軍

桑原 自義 二〇・三・二三 ミヤンマー 陸軍

久保 馨 二〇・七・五 フィリピン 陸軍

米丸 兼高 二〇・七・二九 内地 海軍

篠原 正行 二〇・九・九 華中 陸軍

永田 一孝 二二・七・五 朝鮮 陸軍

賦合 郡山 良秀 一三・一〇・一〇 華中 陸軍

郡山良安	一三・二二・二四	華中	陸軍	白田秀彦	一六・三・一六	内地	陸軍
中馬良弘	一九・三・二七	フィリピン	陸軍	大内田清信	一六・二二・一〇	フィリピン	海軍
加藤武光	二〇・六・八	沖繩	軍属	大内田重利	一八・五・七	華中	陸軍
郡山良信	二〇・六・二六	フィリピン	陸軍	白田俊夫	一八・一〇・二	フィリピン	陸軍
折田秋夫	二〇・八・五	南西諸島	海軍	有馬三男	一八・一・二五	タラワ島	海軍
郡山孝熊	二〇・二・四	旧ソ連	陸軍	井尻正弘	一八・二二・二	ニューブリテン島	海軍
郡山麓				大内田一	一九・二・六	南洋群島	海軍
野村兼義	二二・八・一九	華中	陸軍	和田栄	一九・六・二〇	屋久島沖	陸軍
岩下〇	一五・四・二四	華中	陸軍	大内田藤一	一九・八・三	湖南省	陸軍
池田盛熊	一六・一・一七	台湾	陸軍	大迫勝	一九・一・二五	ボルネオ	海軍
中村齊	一八・二・二四	華中	陸軍	大迫雄二	二〇・二・二三	旧仏印	海軍
中村弘志	二〇・一・二八	華中	陸軍	大迫雄一	二〇・三・一六	ミヤンマー	陸軍
竹下義行	二〇・七・一	フィリピン	陸軍	有馬直教	二〇・三・二〇	フィリピン	陸軍
郡山清美	二〇・二〇・二二	華中	陸軍	大迫純夫	一九・三・二四	ブーゲンビル島	陸軍
石神貞	二〇・二〇・二二	フィリピン	軍属	地頭園中	二二・一・七	内地	陸軍
山下利貞	二〇・六・三	旧ソ連	陸軍	上園秋憲	一五・五・二一	台湾	陸軍
長道秀雄	二二・一・二五	延吉	陸軍	田中範	一六・一・一三	華中	陸軍
郡山国男	二二・一・二五	内地	陸軍	折田登	一八・四・三〇	中国湖北省	陸軍
鶴田一雄	二五・一・三	内地		有馬紀	一八・七・七	華中	陸軍
柿園				有馬		中国東北部	陸軍
木場尚志	一三・九・二九	華中	陸軍	内中	一九・三・一七	ブーゲンビル島	陸軍
時崎兼親	一四・二・二九	石家莊	陸軍	島中	一九・五・三〇	ブーゲンビル島	陸軍
大内田弘	一三・二・二〇	華北	陸軍	安樂濟	一九・六・二九	沖繩	海軍
大迫喜代二	一五・八・二五	内地	陸軍	有村優	一九・八・一〇	南洋群島	海軍

瀬戸口	小玉	八ヶ代	加治木	白坂	新原	園田	大重	諏訪原	益満	瀬戸口	河野	徳永	徳永	白坂	甲突	重久	森	畠中	田中	西園	西園	森園	折田
眞義	于治	優	亥郎	親男	實敏	政敏	重治	静馬	厚	純孝	愛蔵	操	正	秋	魁	則	香取	實	光三郎	繁行	利光	利光	
二〇・三・三〇	二〇・三・一七	二〇・三・一七	二〇・二・二三	二〇・一・二八	一九・七・三一	一九・六・九	一九・五・二七	一九・三・二四	一九・二・六	一九・一・二七	一八・九・一三	一七・二・五	一五・六・二五	二〇・八・六	二〇・七・二	二〇・六・一五	一九・一・一四	二〇・三・九	一九・二・三一	一九・九・二四	一九・八・三〇	一九・八・三〇	
フリリピン	内地	硫黄島	フリリピン	東シナ海	バジー海峡	ニューギニア	ニューギニア	華中	ブーゲンビル島	南洋群島	マライ沖	南洋群島	南洋群島	華中	フリリピン	フリリピン	沖繩	台湾	南方海上	南洋群島	ブーゲンビル島	華中	
陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍
和田	谷山	原園	岩崎	吉村	清水	豊村	福田	岩崎	和田	小倉	清水	小倉	清水	谷村	豊村	西俣	園田	宮園	加治木	益満	松永	諏訪原	瀬戸口
秋實	清徳	省三	景清	三高	国義	實	勝美	景男	繁利	秋広	国雄	美利	利行	久雄	光雄	政夫	薩雄	清信	清信	實之	深	信雄	スミエ
一九・一一・二三	一九・一一・二〇	一九・一一・一五	一九・九・二一	一九・八・二一	一九・八・二〇	一九・七・八	一九・五・二八	一九・五・一九	一九・一・二〇	一九・一・三	一八・一・〇・八	一八・三・三一	一三・七・二七	一三・五・三	一二・一・〇・三	一二・七・一七	一一・一・二〇	二〇・八・二五	二〇・八・二五	二〇・八・二五	二〇・七・二三	二〇・四・二四	二〇・四・八
華中	旧ソ連	マニラ	内地	華中	南洋群島	サイパン島	華中	サイパン島	内地	ニューギニア	フリリピン	南太平洋	華中	中国安徽省	華中	内地	華中	中国東北部	中国東北部	フリリピン	ボルネオ島	フリリピン	内地
陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍	軍属

満園實義	北正夫	徳永正俊	宮田利行	松田敏之	北清	有屋田	谷山清利	原園サチ子	豊村忠雄	末原亀郎	伊知地巖	吉留次郎助	上水流武義	吉留茂	堀之内愛秀	満園愛秀	原園喜一	川畑馨	堀之内重雄	谷山義輝	原園繁利	吉村義清	吉村忍
二〇・一・二五	一九・一二・一九	一九・一二・一九	一九・九・二四	一八・二〇・八	一八・六・二六		二八・三・一	二〇・九・一四	二〇・八・二〇	二〇・七・二七	二〇・六・三〇	二〇・六・一四	二〇・六・四	二〇・四・二四	二〇・四・七	二〇・四・七	二〇・四・六	二〇・四・六	二〇・三・一七	二〇・二・六	二〇・一・二〇	一九・一二・二	一九・一一・二五
シベリヤ	マレー沖	台湾	ミャンマー	ルソン島	華北		旧ソ連	中国東北部	ミャンマー	華中	フリリピン	沖繩	沖繩	フリリピン	南西諸島	フリリピン	沖繩	スندگان列島	レイテ島	フリリピン	内地	内地	華中
陸軍	海軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍		陸軍	軍属	陸軍	陸軍	軍属	海軍	陸軍	海軍	海軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍
柳元初	柳元吉	柳元哉	福元良男	福元秀	柳元久男	前田清利	永田操	白石栄	小城重二	八木秀雄	上原定行	小城茂	札元清三	徳留長吉	東俣	白井三千夫	吉村末吉	徳永文蔵	徳永政雄	山下磯一	池田利美	山田盛義	池田輝彦
一九・二・五	一九・一・一四	一八・八・一八	一八・七・一六	一四・一一・二四	一二・一・四	二〇・九・	二〇・四・一四	一九・一二・一八	一九・九・二四	一九・八・一八	一九・八・二	一九・七・八	一九・六・一八	一三・八・九		二一・八・九	二一・四・八	二一・三・二四	二〇・七・一七	二〇・五・一四	二〇・三・二八	二〇・三・一七	二〇・三・五
ニューギニア	南方海面	台湾	華中	内地	華中	中国東北部	ミャンマー	華中	フリリピン	サイパン島	テニヤン島	サイパン島	ニューギニア	華北		内地	内地	ニューギニア	ミャンマー	内地	内地	硫黄島	華北
海軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	軍属	陸軍	海軍	海軍	海軍	陸軍		陸軍	海軍	陸軍	陸軍	航空	海軍	陸軍	陸軍

柳元	井上	島田	西村	柳元	柳元	柳元	柳元	宮下	吉村	柳元	堀之内	地福	福山	福山	谷口	堀之内	島田	永田	田	福山	島田	淵脇	
榮	登	弘	義彦	末吉	美佐雄	庄助	正行	榮	秀則	初	吉	榮	俊雄	二雄	正一	盛次	盛	利夫	一	喜義	義則	静男	
一九・二・六	一九・四・二二	一九・六・三〇	一九・七・三	一九・一〇・二二	二〇・一・八	二〇・六・二	一三・七・四	一三・一〇・二一	一七・六・五	一八・三・一八	一八・一・二一	二〇・二・一五	二〇・四・九	二〇・四・九	二〇・四・二三	二〇・四・二五	二〇・四・二六	二〇・五・四	二〇・六・一二	二〇・七・一五	二〇・七・一六	二〇・八・九	
ニューギニア	ニューギニア	内地	ブーゲンビル島	台湾	台湾	フィリピン	華中	華中	華中	ミッドウエー	南シナ海	東シナ海	フィリピン	東シナ海	セブ島	フィリピン	フィリピン	ネグロス島	沖繩	フィリピン	ミンダナオ島	華中	内地
海軍	海軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍	陸軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	航空	海軍	陸軍	陸軍	陸軍
福田茂	馬場邦好	東秀	岩元武夫	田知行	田知行	田知行	田中清定	山元茂	岩元信夫	田知行秀光	坂元秀昇	宇都秀雄	宇都鉄雄	稲富榮	諏訪田榮吉	末永静男	大宮司實	池上栄吉	有村喜一	笹川辰義	鶴村政雄	請園喜一	札元省三
二〇・一二・二三	二三・八・二三	一一・一一・一八	一五・一一・一六	一八・五・八	一九・一二・三〇	二〇・一・三〇	二〇・六・五	二〇・七・一五	二三・一・二五	二八・三・三一	一六・四・一八	一七・六・五	一九・六・二九	一九・八・二	一九・一〇・二六	一九・一二・二七	一九・一二・三〇	一九・一二・三〇	二〇・三・一七	二〇・四・四	二〇・六・一四		
中国東北部	華中	華中	中国東北部	中国東北部	中国東北部	フィリピン	ルソン島	フィリピン	フィリピン	内地	旧ソ連	華中	ミッドウエー島	徳之島沖	テニアン島沖	ブーゲンビル島	華中	フィリピン	硫黄島	沖繩	沖繩		
陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍

川田	内村不二夫	一四・五・四	華中	陸軍	茄子田美義	二一・三・五	上海	陸軍
百石	肇	一五・六・三	華中	陸軍	岩戸文吉	一三・七・二一	華中	陸軍
坂口	勇雄	一七・六・三〇	華中	陸軍	末吉豊志	一三・八・二六	中国湖北省	陸軍
山田	栄蔵	一八・一・一八	西太平洋上	海軍	原口高良	一五・一・一一	華中	陸軍
中園	利雄	一九・一・一九	ラバウル	陸軍	石谷義秋	一九・二・一八	南洋諸島	海軍
有馬	清二	一九・三・一	フィリピン	陸軍	岩戸松男	一九・三・九	ブーゲンビル島	陸軍
東	国雄	一九・五・一	ブーゲンビル島	陸軍	竹下清治	一九・八・一六	ニューギニア	陸軍
龜田	俊夫	一九・六・二九	徳之島沖	陸軍	末吉兼充	二〇・一・八	内地	陸軍
中園	仁之助	一九・八・一〇	ニューギニア	海軍	末吉政夫	二〇・二・一〇	フィリピン	陸軍
福田	實	一九・八・一九	台湾	陸軍	石谷義光	二〇・三・二七	フィリピン	陸軍
片平	三次	一九・一一・二一	南方諸島	海軍	岩戸藤吉	二〇・三・二八	朝鮮	陸軍
成尾	芳春	二〇・一・二六	フィリピン	海軍	竹下栄行	二〇・八・二八	朝鮮	陸軍
片平	春孝	二〇・三・二三	東シナ海	海軍	岩戸高則	二一・九・一三	ミャンマー	陸軍
安部松	国彦	二〇・三・二七	硫黄島	陸軍	花尾			
古江	光善	二〇・六・二五	沖繩	海軍	谷口清盛	一五・五・一三	華中	陸軍
堂園	栄吉	二〇・八・二〇	華中	陸軍	中原栄二	一九・三・二四	ブーゲンビル島	陸軍
山田	佐一	二〇・八・二〇	フィリピン	陸軍	松下誠造	一九・四・五	宮古島	海軍
厚地					谷口堅蔵	一九・九・八	ブーゲンビル島	陸軍
久保山	繁盛	一九・六・二三	ニューギニア	陸軍	今村文三	一九・一一・二五	マニラ沖	軍属
茄子田	勲	二〇・一・二八	黄海	海軍	今村末吉	二〇・一・二〇	フィリピン	陸軍
吉永	義光	二〇・四・七	西部太平洋	海軍	坂口直助	二〇・二・二二	ルソン島	陸軍
吉永	喜代美	二〇・六・二〇	フィリピン	海軍	松下栄蔵	二〇・二・二七	フィリピン	陸軍
吉永	砂夫	二〇・七・八	サイパン島	海軍	寺光	二〇・四・二八	フィリピン	陸軍
					松下義男	二〇・八・九	内地	軍属

脇大	柳田	蘭田	久保山	坂口	狩集	吉永	永田	小原	吉永	柳田	小原	小原	岡崎	原口	久保山	盛満	谷口	狩集	名越	中間	松下	今村
宮	トシ子	重則	文吉	清次	長助	清貢	清次	清次	秋男	周一	重雄	砂夫	清憲	忠志	静雄	工盛	清盛	佐一	良則	親矢	勇吉	誠造
行哉	二〇・	二二・	二二・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	一九・	一九・	一八・	一八・	一七・	一五・	一三・	一三・	一三・	二二・	二〇・
一三・	四・	五・	三・	七・	七・	六・	四・	三・	三・	二・	一・	八・	六・	一〇・	九・	五・	五・	一・	一〇・	四・	四・	八・
八・	一九	一八	一五	二二	一	八	二四	一七	九	一六	一四	一〇	二九	八	一〇	八	一七	一三	二	二八	二二	一〇
三〇																						
華中	内地	中国東北部	中国東北部	フィリピン	レイテ島	旧仏印沖 <small>ベトナム、ラオス、カンボジア</small>	フィリピン	硫黄島	中国東北部	ルンバ <small>ブーゲンビル島</small>	ルンバ <small>ブーゲンビル島</small>	ルンバ <small>ブーゲンビル島</small>	東シナ海	西太平洋	東部ニューギニア	ホーチミン	華中	華中	日中戦争	日中戦争	華中	華中
陸軍	軍属	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍
満枝	永田	田中	田中	小原	上床	丸山	丸山	丸山	丸山	丸山	野下	前田	脇政	前田	野下	大平	岡崎	岡崎	米満	橋本	野下	大平
勇吉	重高	春嘉	智也	三暎	山忠	山光	山次	山勝	山一	山繁	展雄	敏夫	政男	清志	繁志	西雄	義則	教則	仲左エ門	本勲	兼雄	勇
一九・	一九・	一九・	一七・	一五・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	二〇・	一九・	一九・	一九・	一八・	一八・	一七・
二・	二・	三・	五・	四・	七・	七・	五・	五・	五・	五・	七・	六・	六・	六・	四・	四・	七・	五・	三・	一〇・	三・	六・
二九	二五	二二	一〇	二四	二七	二二	二〇	二一	二一	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	一八	二五	二九	一九	〇・	二四	五
小笠原方面	内地	タロキナ <small>ブーゲンビル島</small>	華中	華中	華中	中国東北部	マレー方面	フィリピン	華中	華中	レイテ島	マレーシア	フィリピン	フィリピン	沖繩	フィリピン	華中	南太平洋	フィリピン	フィリピン	タロキナ <small>ブーゲンビル島</small>	南太平洋
海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍

宮口有吉	有川縣一	宮口藤吉	田沢市利一	田沢利義一	桑原清光一	高橋一男一	河野秀吉一	八重	貴島吉太郎二	竹内三郎二	林三郎二	貴島良成二	佐々木繁信二	米満俊一	石谷明二	田中藤一	石谷則春二	藺田魁一	加藤信一	永田美義一	石谷源一	佐々木道雄一	安部松喜次郎一
一九・七・三一	一九・三・一四	一八・一一・三〇	一八・一一・一七	一八・八・一五	一八・一・二〇	一七・八・二三	一二・一〇・一六	二〇・一二・一七	二〇・八・四	二〇・七・三一	二〇・五・四	二〇・四・二五	二〇・四・一八	二〇・四・一五	二〇・三・一七	二〇・二・二四	一九・一二・一三	一九・九	一九・七・一七	一九・七・一八	一九・七・九	一九・五・八	
西南太平洋	ブリテンビル島 タロキナ	華中	上海	太平洋	西南太平洋	内地	華中	硫黃島	フィリピン	フィリピン	南西諸島	フィリピン	フィリピン	フィリピン	硫黃島	フィリピン	沖繩	サイパン島	華南	華北	華中	華中	
陸軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍
森山要	常盤	上野繁利	坂元忠男	西園勝吉	田島文昇	安藤三利	福永時義	福永清孝	上野義治	角地昭一	坂元教男	嶽貞光	木場貞光	倉平清治	雪平誠司	宮口誠司	白坂兼夫	高橋矢七	河野親男	桑原十一男	高橋國弘	桑原直高	
一二・九・一九	一二・四・一二	二〇・七・二	二〇・六・二〇	二〇・六・一九	二〇・五・七	二〇・四・二〇	二〇・二・二二	二〇・二・一八	一九・一二・一九	一九・四・三〇	一九・三・二六	二〇・一・四	一九・三・二二	二〇・一・二一	二〇・一・二一	二〇・五・二六	二〇・四・三二	二〇・三・一七	二〇・三・一七	二〇・二・一五	一九・一〇・一〇		
上海	旧ソ連	ボルネオ島沖	沖繩	レイテ島	南西諸島	フィリピン	フィリピン	フィリピン	北方海方面	南洋群島方面	レイテ島	南方	フィリピン	内地	内地	マレー半島沖	フィリピン	硫黃島	内地	内地	フィリピン	南西方面	
陸軍	陸軍	航空軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	

小桜管郎	小倉一雄	米永侃	白坂誠示	井上九州男	井上忠	小原静雄	飯田富次	米永魁	大浦	夜花徳三	鮫島昭美	谷山実義	井手口強	前園静夫	多丸選	河野力	前園三高	前園三照	飯福涼	有馬誠造	森山操	前園繁	森山薫
一九・一一・二七	一九・一一・二五	一九・九・二六	一九・六・二九	一八・一一・二〇	一八・五・四	一七・八・一三	一六・八・二四	一三・二・六		二〇・八・一八	二〇・七・二九	二〇・二・二九	一九・一〇・一八	一九・一〇・七	一九・八・一八	一九・七・二五	一九・八・二二	一九・五・一三	一九・三・一七	一九・一・三一	一八・三・三	一六・九・一七	一五・一〇・五
ボルネオ島	フィリピン	華中	マレー諸島	華中	ソロモン群島沖	上海	華中	華中		沖繩	内地	西南太平洋	フィリピン	西南太平洋	石垣島	ニューブリテン島陸	沖繩	フィリピン	タロキナ <small>ブーゲンビル島</small>	西南太平洋	フィリピン	華中	山東省
海軍	海軍	海軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍		陸軍	海軍	海軍	陸軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍
宮田道俊	宮田熊	米倉重夫	南重志	宮田愛吉	内政之	宮田道義	福留義孝	鈴木明	稲森時雄	福元善四郎	吉村盈	福留軍二	宮田三壽	福留勲	里岳	前田論	井上とめ	久保兼丸	藤崎美佐男	藤崎十郎	井上静雄	前田盛秀	白坂兼夫
二〇・六・四	二〇・三・二七	一九・一一・二八	一九・八・一〇	一九・八・一〇	一九・七・一七	一九・四・二六	一九・三・二七	一九・三・二二	一八・一一・二五	一八・六・一六	一七・一〇・二六	一四・七・二二	一四・三・二一	一四・一・一四		二三・五・二九	二一・二・七	二〇・八・七	二〇・八・七	二〇・七・一七	二〇・六・一七	二〇・六・七	二〇・五・一六
沖繩	沖繩	沖繩	南方	南方	華中	南方	南方	花中 <small>ブーゲンビル島</small>	タロキナ	ニューギニア	北太平洋	湖南省	華中	内地		旧ソ連	中国東北部	内地	南洋群島	フィリピン	台湾	フィリピン	フィリピン
海軍	陸軍	海軍	海軍	海軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍		陸軍	軍属	軍属	海軍	海軍	海軍	海軍	海軍

鶴田利男	前田弘道	前田光男	鈴木政男	明日山矢吉	加治木一夫	鈴木利夫	荻野益雄	加治木盛吉	横山義盛	加治木武義	川野益男	永尾忠明	崎山三郎	大重秀夫	崎山利夫	本岳	井之上 撈夫	永井 進	吉村 廣海	井上 時義	吉村 節	福永 時夫	内 義孝
一九・一〇・二	一九・九・三	一九・五・五	一七・一〇・一三	二〇・六・一九	二〇・六・一九	二〇・一・一〇	一八・八・三〇	一三・一〇・九	二〇・一・一二	二〇・六・一四	二〇・四・一	二〇・二・五	一九・一・一九	一九・一〇・一八	一九・七・五		二〇・七・二五	二〇・三・一七	一九・二・一七	二〇・八・一四	二〇・六・一五	二〇・六・一〇	二〇・六・一〇
ブーゲンビル島	華中	台湾沖	中国東北部	フィリピン	沖繩	内地	内地	華中	タイ	沖繩	沖繩	湖南省	南太平洋方面	フィリピン	西太平洋沖		フィリピン	硫黄島	華中	沖繩	沖繩	ルソン島	沖繩
陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍	海軍	陸軍	陸軍		海軍	陸軍	陸軍	海軍	海軍	陸軍	海軍

町田 暎則	東野 一二三	大迫 一三	西園 景男	今村 重盛	鈴木 英男
二〇・二・一八	二〇・一・九	二〇・六・二	二〇・四・一〇	二〇・三・三〇	二〇・一・九
フィリピン	内地	フィリピン	トラック諸島	華中	海口
陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	陸軍	海軍

# 第四章 ふるさと の記録



第一節 字・小字一覧表

〈川 田〉

番号		字名	備考
1	井手下	イデシタ	
2	溝下	ミゾシタ	
3	黒瀬戸	クロセト	
4	大坪	オオツボ	
5	川原田	カワハラダ	
6	白水川	シラミズガワ	川田城 シトミツゴ
7	片平田	カタヒラダ	南方神社
8	天神田	テンジンダ	川田城、南方神社
9	横瀬	ヨコセ	川田城
10	前田	マエダ	川田城
11	平原	ヒラバル	ヒラバイ
12	小原	コバル	ユバイ
13	向ヶ迫	ムコウガサコ	ムケガサコ
14	中原	ナカハラ	
15	陣ノ平	ジンノヒラ	「陣ノ原」？川田城攻めの際に布陣したところか
16	塔ノ迫	トウノサコ	川田城 ドンザコ
17	伏野	フセノ	川田城
18	鳥居ヶ原	トリイガハラ	川田城
19	川畑迫	カワバタザコ	
20	迫田	サコダ	
21	諏訪原	スワバル	川田城 スワバイ 諏訪神社跡地
22	城	ジョウ	川田城の名残多し
23	宮田	ミヤタ	川田城、南方神社
24	宇都	ウト	
25	溝上	ミゾウエ	
26	井手上	イデウエ	石井堰
27	上ノ山	ウエノヤマ	
28	潤脇田	フチワキダ	一之宮神社
29	下川原田	シモカワハラダ	
30	辺保木	ヘボキ	
31	大谷口	オオタニグチ	
32	元山王	モトサンノウ	毘沙門城
33	山伏田	ヤマブシダ	ヤンプイタ
34	柿元	カキモト	
35	栗木ヶ宇都	クリキガウト	
36	岩元	イワモト	
37	倉谷	クラタニ	クラタイ
38	小山尻	コヤマノシリ	
39	木場田	コバダ	
40	太ラヶ宇都	フトラガウト	南方神社
41	森山	モリヤマ	南方神社
42	百石	モモイシ	
43	山田	ヤマダ	
44	涼松	スズミマツ	スズンマツ
45	小坂ノ上	コサカノウエ	
46	野首	ノクビ	川田城に近い。南方神社 ノクツ
47	落平	オチヒラ	オトヒラ
48	鷹尾	タカオ	
49	大谷	オオタニ	

〈東 俣〉

番号	字名	備考
1	下川原田 シモカワハラダ	一之宮神社
2	川原崎 カワハラザキ	一之宮神社
3	柳田 ヤナギタ	
4	坂元 サカモト	
5	鏡 アブミ	坂道で馬を駆け上らせる。山城・早馬の近く、毘沙門城 アブシ
6	柳ヶ丸 ヤナギガマル	
7	湯屋原 ユヤバル	
8	中玉 ナカダマ	
9	口ノ坪 クチノツボ	陣ノ城
10	餅ヶ丸モチガマル	陣ノ城
11	橋元 クスモト	
12	前田 マエダ	陣ノ城
13	山下 ヤマシタ	陣ノ城
14	宇都頭 ウトガシラ	陣ノ城
15	原田 ハラダ	
16	上川原田 カミカワハラダ	一之宮神社
17	砂走 スナバシリ	
18	小宮司免 コグシメン	一之宮神社対岸の字、小宮司の土地か、税免除の土地？
19	畠田 ハタケダ	
20	古川 フルカワ	
21	淵脇迫 フチワキザコ	川田城
22	鳥居ヶ原トリイガハラ	川田城
23	前迫 マエザコ	
24	弓場ヶ原 ユミバガハラ	川田城 イバガハイ
25	榎木迫 イチノキザコ	
26	梨木迫 ナシキザコ	
27	右近ヶ迫 ウコンガサコ	
28	内待畑 ウチマチバタ	
29	大迫 オオサコ	
30	狩俣 カリマタ	
31	打添 ウチゾエ	
32	瀬越 セゴシ	
33	門松 カドマツ	
34	三蔵塚 サンゾウヅカ	サンヅッカ
35	小松ヶ迫 コマツガサコ	
36	鎌ヶ迫 カマガサコ	
37	馬場ヶ原 ババガハラ	ババガハイ
38	後ヶ迫 ウシロガサコ	ウシトザコ
39	坪迫 ツボザコ	
40	光り迫 ヒカリザコ	
41	奈良木 ナラキ	
42	久保迫 クボザコ	
43	鬼ヶ迫 オニガサコ	鬼の住みそうな所
44	山田 ヤマダ	
45	向ヶ原 ムカイガハラ	
46	百田 ヒヤクタ	
47	横海道 ヨコカイドウ	
48	四ツ合 ヨツアイ	
49	塔迫 トウサコ	トンザコ
50	鷹巢 タカノス	タカンス
51	丸岡 マルオカ	
52	仮屋浦田 カリヤウラダ	
53	長迫 ナガサコ	
54	牛ヶ丸 ウシガマル	
55	水ヶ迫 ミズガサコ	ミツガサコ
56	矢櫃 ヤビツ	戦に関係？陣所近く、あるいは地形？陣ノ城
57	堂田原 ドウタバル	
58	楮ヶ迫 カクガサコ	
59	秋吉 アキヨシ	厚地境
60	宮田 ミヤタ	陣ノ城
61	樋渡 ヒワタシ	石井堰
62	土塔 トトウ	
63	小原 コバル	コバイ
64	御供田 ゴクデン	花尾神社
65	平石原 ヒライシバル	
66	永山 ナガヤマ	
67	永山島廻 ナガヤマシママワリ	三重岳周辺の意味？
68	餅ヶ尾モチガオ	
69	芝ヶ迫 シバガサコ	
70	猿内サルウチ	
71	黒仁田クロニタ	
72	段ノ岡ダンノオカ	

番号	字名	備考
73	山屋敷 ヤマヤシキ	谷口に城、屋敷があった？
74	高尾 タカオ	毘沙門城
75	谷口 タニグチ	城があったか。毘沙門城
76	有島 アリシマ	毘沙門城 アイシマ
77	立平 タチヒラ	毘沙門城
78	井穴ヶ宇都 イアナガウト	
79	桃木迫 モモキザコ	
80	赤仁ヶ谷 アカニガタニ	
81	妙見ヶ宇都 ミョウケンガウト	毘沙門城 ミケンガクト
82	柿木迫 カキノキザコ	
83	雑津ヶ山 ザッツガヤマ	

〈厚 地〉

番号	字名	備考
1	桑原田 クワハラダ	
2	秋吉 アキヨシ	
3	南迫 ミナミサコ	
4	宇都久木田 ウトクキタ	
5	久木田 クキタ	
6	柳ヶ丸 ヤナギガマル	
7	瀬戸口 セトグチ	
8	向原 ムカエバル	
9	戸ヶ山 ハゼガヤマ	
10	永迫 ナガサコ	
11	扇ヶ平 オオギガヒラ	
12	松尾迫 マツオザコ	
13	松ヶ迫 マツガサコ	
14	出水田 イズミダ	
15	登り尾 ノボリオ	
16	北俣 キタマタ	
17	松尾田 マツオダ	
18	柳田 ヤナギダ	
19	野中田 ノナカダ	
20	中島 ナカシマ	
21	見上り ミアガリ	
22	樋掛 テカケ	
23	牛ヶ丸 ウシガマル	
24	麻ヶ迫 アサガサコ	
25	大迫 オオサコ	
26	前田 マエダ	
27	通山 トオリヤマ	
28	道ヶ迫 ミチガサコ	
29	九日田 クニチデン	
30	上岩戸 カミイワド	
31	穴釜 アナガマ	穴釜の地形、または洞窟などがあったか
32	松原 マツバラ	
33	柳迫 ヤナギサコ	
34	中津川 ナカツガワ	
35	権現山 ゴンゲンヤマ	厚地城
36	田吹野 タブキノ	
37	大開 オオヒラキ	
38	戸ヶ切口 ハゼガキリグチ	
39	池ノ迫 イケノサコ	イケンサコ
40	曲段 マガリダン	マガイダン
41	吹ヶ迫 フキガサコ	
42	一里山 イチリヤマ	
43	下石坂 シモイシザカ	
44	東迫頭 ヒガシザコガシラ	
45	東迫 ヒガシザコ	
46	中尾 ナカオ	
47	横道 ヨコミチ	
48	間ノ牽礼 マノムレ	
49	塔ノ迫 トウノサコ	
50	柚木ヶ谷 ユノキガダニ	
51	彼岸田 ヒガンデン	ヒガンダ
52	蟻ノ元 アリノモト	
53	西迫 ニシザコ	
54	払木場 ハライコバ	
55	間伏谷 マブシダニ	
56	前坂 マエザカ	マエンサカ
57	山ノ神坂 ヤマノカミザカ	花尾山守護神の山神石塔。山祇神社 ヤマンカンザカ
58	長野 ナガノ	
59	山ノ内頭 ヤマノウチガシラ	

番号	字名	備考
60	山ノ内尻 ヤマノウチジリ	
61	臼田 ウスダ	
62	塔ノ峯 トウノミネ	
63	横山 ヨコヤマ	
64	田代 タシロ	厚地城
65	三反ヶ丸 サンタンガマル	
66	棚田 タナダ	
67	見上坂 ミアガリザカ	
68	山ノ口 ヤマノクチ	
69	道添 ミチゾエ	
70	国蔵田 コクゾウデン	虚空蔵か花尾神かに供える田？
71	松下 マツシタ	
72	川添 カワゾエ	
73	宮田 ミヤタ	花尾神社
74	宮迫 ミヤサコ	花尾神社
75	宮脇 ミヤワキ	花尾神社
76	大野 オオノ	
77	川平 カワヒラ	
78	大登ラ オオドラ	大(うど)？宇都(うと)＝谷間、ら＝平らの意味か
79	岩下 イワシタ	
80	岩崎 イワサキ	
81	米ノ山 コメノヤマ	
82	米ノ山頭 コメノヤマガシラ	
83	南平 ミナミヒラ	
84	前迫 マエザコ	
85	持立ヶ尾モチタチガオ	
86	中村頭 ナカムラガシラ	
87	郷戸 ゴト	
88	中村 ナカムラ	
89	中迫尻 ナカザコジリ	
90	笹尾 ササオ	
91	桑木田 クワキタ	
92	久保山 クボヤマ	
93	中ノ原 ナカノハラ	
94	前原 マエバル	
95	柏木ヶ谷 カシワギガタニ	
96	赤畑 アカハタ	
97	松崎 マツザキ	
98	日之丸 ヒノマル	日の当たる場所か、厚地城
99	ナメリ ナメリ	滑りやすい所。苔むしたところ、厚地城
100	長畑 ナガハタ	厚地城
101	竹下 タケシタ	「竹」城との関連、岩戸の城
102	風呂ノ神 フロノカミ	古老「神様が祀られていた」。石風呂状の地形で山神が風呂にした
103	北村 キタムラ	
104	柚迫 ユザコ	
105	瀬越 セゴシ	
106	白山迫 シロヤマザコ	
107	塩田原 シオタバル	
108	宮切ヶ迫 ミヤキリガサコ	風呂ノ神の神様にちなんで？
109	須田ノ木 スダノキ	
110	蔵ノ久保 ワラビノクボ	
111	馬渡 マワタリ	
112	前見 ゼミ	
113	百ヶ木場 ヒヤクカコバ	
114	夏木 ナツキ	
115	堂床 ドウトコ	
116	番田 バンダ	
117	横瀬 ヨコセ	
118	花尾 ハナオ	「大乗院先住覚慧花尾権現縁起」に「尾つづき野ツツジなど千種多きゆえ…」
119	砂田 スナダ	花尾神社
120	岩瀬戸 イワセト	
121	マナ板 マナイタ	板のような平地か、マナ＝「眼」の意味か
122	鼻面 ハナスラ	大師山や土塔に囲まれた地形、碎石場
123	馬屋尻 ウマヤシリ	
124	坪木ノ元 ツボキノモト	
125	大迫 オオサコ	
126	白石原 シライシバル	
127	池ノ元 イケノモト	
128	丸山 マルヤマ	
129	丸山原 マルヤマバル	
130	小丸山 コマルヤマ	
131	平石原 ヒライシバル	
132	池田 イケダ	

番号	字名	備考
133	大師山 ダイシヤマ	花尾神社
134	土塔 ドトウ	
135	上床 ウワトコ	

### 〈油須木〉

番号	字名	備考
1	前田 マエダ	
2	竹下 タケシタ	「竹」城との関連性あり、油須木城の存在、近都宮神社
3	山下 ヤマシタ	上原城、近都宮神社
4	柳ヶ丸 ヤナギガマル	油須木城、上原城関連
5	高桁 コゲタ	高い桁状の地形か
6	久保迫 クボザコ	
7	地浦 チウラ	
8	寺田 テラダ	
9	門松 カドマツ	東俣門松と隣合わせ
10	安美世 アミゼ	アメゼ
11	賦合 ツモリアイ	難読語 ツモイヤ
12	乙ヶ山 オトガヤマ	
13	沖宮田 オキミヤタ	
14	熊ヶ尾 クマガオ	
15	立迫 タテザコ	
16	佃 ツクダ	近都宮神社
17	中方限 ナカホウギ	近都宮神社
18	山後 ヤマウシロ	
19	藪田 ミノダ	
20	白薄 シラスキ	
21	大丸 ダイマル	
22	柚木ヶ谷 ユノキガタニ	
23	山ノ口 ヤマノクチ	
24	宇都 ウト	
25	樋渡 ヒワタシ	油須木城・上原城、近都宮神社
26	桑ノ迫 クワノサコ	
27	堀切 ホリキリ	
28	松尾 マツオ	
29	牧ノ口 マキノクチ	
30	地藏免 ジゾウメン	近都宮神社
31	東谷 ヒガシタニ	上原城
32	上ノ原 ウエノハラ	上原城、近都宮神社

### 〈郡 山〉

番号	字名	備考
1	前田 マエダ	松尾城、菅原神社
2	小水取 コミズトリ	松尾城、菅原神社
3	岩崎 イワサキ	松尾城
4	茶田 チャエン	
5	賦合 ツモリアイ	賦＝財物の集まる場所
6	井手迫 イデザコ	
7	大丸 ダイマル	丸＝城に関連性。松尾城、菅原神社
8	桑原田 クワハラダ	
9	辻ノ堂 ツジノドウ	菅原神社
10	樋ノ迫 ヒノサコ	
11	神舞哥 ジムカ	近くの秋葉神社、菅原神社、辻の堂との関連性
12	図師 ズシ	
13	市来 イチキ	
14	貫ノ鼻 ヌキノハナ	
15	轟木 トドロキ	小山田との境に滝あり
16	鳥越 トリゴエ	
17	井手元 イデモト	
18	池田 イケダ	小山田境 井堰
19	満迫 ミツザコ	
20	小坂元 コサカモト	
21	青木ヶ丸 アオキガマル	
22	篠浦 シノウラ	
23	篠浦頭 シノウラガシラ	
24	小長田 コナガタ	
25	柿木平 カキノキビラ	カッノピラ
26	地頭江 ジトウエ	
27	仁連木 ニレギ	
28	三反田 サンタンダ	
29	月方 ツキガタ	
30	権ヶ迫 サイガサコ	
31	鴻ノ巣 コウノス	
32	永山 ナガヤマ	

番号	字名	備考
33	大中尾	オオナカオ
34	永田	ナガタ
35	永田頭	ナガタガシラ
36	小中尾	コナカオ
37	ホキケ山	ホキケヤマ
38	小俣	コマタ
39	鏡	アブミ
40	上園	ウエゾノ
41	永江	ナガエ
42	桑北	クワキタ
43	辻ノ下	ツジノシタ
44	栗下	クリシタ
45	久保田	クボタ
46	笛ヶ迫	フエガサコ
47	鳥居ヶ迫	トリイガサコ
48	永井原	ナガイバル
49	藤ヶ山	フジガヤマ
50	橋ヶ山	ウルシガヤマ
51	地藏免	ジゾウメン
52	鷹ノ巣	タカノス
53	百田	ヒヤクタ
54	中牟田	ナカムタ
55	北ノ口	キタノクチ
56	櫻木	サクラギ
57	勝目玉	カツメダマ
58	小牟田	コムタ
59	炬ヶ丸	ハゼガマル
60	諏訪宇都	スワウト
61	大貝	オオガイ
62	西ノ瀬戸	ニシノセト
63	肱金	ヒジガネ
64	熊ヶ瀬戸	クマガセト
65	近江ヶ宇都	オオミガウト
66	中福良	ナカフクラ
67	村下	ムラシタ
68	宮山	ミヤヤマ
69	今田ヶ原	イマダガハラ
70	上今田	カミイマダ
71	常盤原	トキワバル
72	道下	ミチシタ
73	井手下	イデシタ
74	新川	シンカワ
75	兎田	ウサギダ
76	柚木水流	ユノキツル
77	大園	オオゾノ
78	早馬	ハヤマ
79	岩間ヶ迫	イワマガサコ
80	蟻ノ迫	アリノサコ
81	瀬戸	セト
82	常盤山	トキワヤマ
83	北原	キタハラ
84	梅木田	ウメキダ
85	橋ヶ迫	ウルシガサコ
86	門貫	カドヌキ
87	平田	ヒラタ
88	吉牟田	ヨシムタ
89	川平	カワヒラ
90	野登呂	ノトロ
91	二重瀧	ニジュウダキ
92	二ツ石	フタツイシ
93	菅牟田	スガムタ
94	野坂	ノサカ
95	柴立	シバタテ
96	土手頭	ドテガシラ
97	瀧ノ上	タキノウエ
98	水ノ手	ミズノテ
99	竹山	タケヤマ
100	坪久田	ツボクダ
101	中山	ナカヤマ
102	外戸ノ口	ケドノクチ
103	梅木ヶ丸	ウメキガマル
104	長迫	ナガサコ
105	巢山	スヤマ
106	瀬戸谷	セトタニ

番号	字名	備考
107	戸良ヶ迫	ハゼラガサコ
108	桐木口	キリキグチ
109	井川迫	イガワザコ
110	仁田牟礼	ニタムレ
111	仁田原	ニタバル
112	城ノ迫	ジョウノサコ
113	中原	ナカハラ
114	井ノ尻	イノシリ
115	久保原	クボバル
116	後平	ウシロヒラ
117	大谷尻	オオタニジリ
118	大谷山	オオタニヤマ
119	大谷平	オオタニヒラ
120	登り尾	ノボリオ
121	深谷	フカタニ
122	的場	マトバ
123	瀧ノ宇都	タキノウト
124	立山	タテヤマ
125	立迫	タテザコ
126	小浦原	コウラバル
127	屋鋪川内	ヤシキカワウチ
128	伊良ヶ谷	イラガタニ
129	小松ヶ尾	コマツガオ
130	大池	オオイケ
131	野下原	ノシタバル
132	志梨	シナシ
133	横畑	ヨコハタ
134	抜水	ヌキミズ
135	案ノ山	アンノヤマ
136	高井野	タカイノ
137	屋形尾	ヤガタオ
138	追呂ノ段	オロノダン
139	浄土平	ジョウドヒラ
140	海江田鼻	カイエダバナ
141	下小野	シモコノ
142	黒岩	クロイワ
143	上ノ丸	カミノマル
144	中原山	ナカハラヤマ
145	笹ノ段	ササノダン
146	古野平	フルノヒラ
147	池ノ平	イケノヒラ
148	笛吹	フエフキ
149	藤ヶ尾	フジガオ
150	鳥毛野	トリゲノ
151	大浦原	オオウラバル
152	堂ノ迫	ドウノサコ
153	中ノ迫	ナカノサコ
154	鉢チャ迫	ネチガサコ
155	毛ナシ尾	ケナシオ
156	赤崩	アカズレ
157	水堀	ミズボリ
158	露ヶ山	ツユガヤマ
159	内無シ	ウチナシ
160	雑田	ゾウダ
161	天神平	テンジンビラ
162	川山	カワヤマ
163	竹迫	タケザコ
164	松尾	マツオ
		(松尾)城のあった土地。菅原神社

〈西 俣〉

番号	字名	備考
1	牟田	ムタ
2	谷口田	タニグチダ
3	志賀ノ元	シガノモト
4	平田	ヒラタ
5	山口田	ヤマグチダ
6	二反田	ニタンダ
7	笹原田	ササハラダ
8	大平	オオヒラ
9	小倉	オグラ
10	小倉頭	オグラガシラ
11	柳ヶ迫	ヤナギガサコ
12	松葉迫	マツバザコ
13	崩ヶ迫	クズレガサコ

番号	字名	備考
14	高尾	タカオ
15	平泊	ヒラサコ
16	神楽泊	カグラザコ 聖城 //
17	堂ヶ原	ドウガハラ 聖城 //
18	和田	ワダ 聖城 //
19	草原	クサバル
20	池ノ泊	イケノサコ 聖城 //
21	寺田	テラダ 聖城 //
22	満家原	ミツガバル 「みつえばい」満家院との関連。霧島神社
23	岩崎	イワサキ 聖城
24	石ノ元	イシノモト 宮ノ城、霧島神社
25	北ノ園	キタノソノ 宮ノ城、霧島神社
26	寺ノ平	テラノヒラ 宮ノ城、霧島神社
27	辺保木	ヘボキ 平城
28	平城	ヒラノジョウ 川田氏同族の辺牟木氏の城跡か
29	宮ノ泊	ミヤノサコ 平城
30	堂ノ上	ドウノウエ
31	野中田	ノナカダ
32	門貫	カドヌキ
33	大迫	オオサコ
34	岩竹	イワタケ
35	平原	ヒラバル
36	東平	ヒガシビラ
37	鷹ヶ岡	トビガオカ
38	白水谷	シラミスダニ
39	柳ヶ丸	ヤナギガマル
40	賀クナキ	ガクナキ
41	辰バミ	タツバミ 上宮岳の辰巳（東南）の方角にある
42	雪元	ユキモト ユツモト
43	小早稲田	コワセダ
44	水口	ミズグチ
45	宮田	ミヤタ 熊野神社関連か
46	村前	ムラマエ
47	坂口	サカグチ
48	木場田	コバダ
49	山下	ヤマシタ
50	鯖ヶ平	サバガヒラ
51	開キ	ヒラキ 開鯉地、仕明地、眺望良好、平城関連性
52	前田	マエダ
53	竹下	タケシタ

〈有屋田〉

番号	字名	備考
1	川添	カワゾエ
2	宮田	ミヤタ 有屋田城、南方神社
3	一町田	イチチョウデン 有屋田城、南方神社
4	仮屋園	カリヤソノ
5	六角田	ロッカクデン
6	山道	ヤマミチ
7	別府原	ベップバル 有屋田城、南方神社
8	寺田	テラダ 有屋田城、南方神社
9	諏訪脇	スワウキ 南方神社
10	堀ノ内	ホリノウチ
11	二本松	ニホンマツ
12	石ヶ丸	イシガマル
13	平田	ヒラタ
14	城ノ下	ジョウノシタ
15	松元	マツモト
16	高付	タカツキ
17	黒田	クロダ
18	尾崎	オザキ
19	小長田	コナガタ
20	雲雀田	ヒバリデン
21	北俣	キタマタ
22	鎌迫	カマザコ
23	下牧原	シモマキバル 牧場跡か
24	上牧原	カミマキバル
25	鶴丸	ツルマル
26	柳ヶ迫	ヤナギガサコ 有屋田城
27	井料	イリョウ 有屋田城
28	柴立	シバタテ 峠の台地小松山に自然石の石塔あり。柴神か
29	根ノ角	ネノスミ
30	中原	ナカハラ
31	牛ヶ迫	ウシガサコ

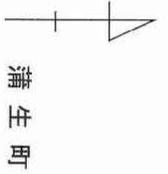
番号	字名	備考
32	前原	マエバラ
33	鬼山	ウサギヤマ

< 嶽 >

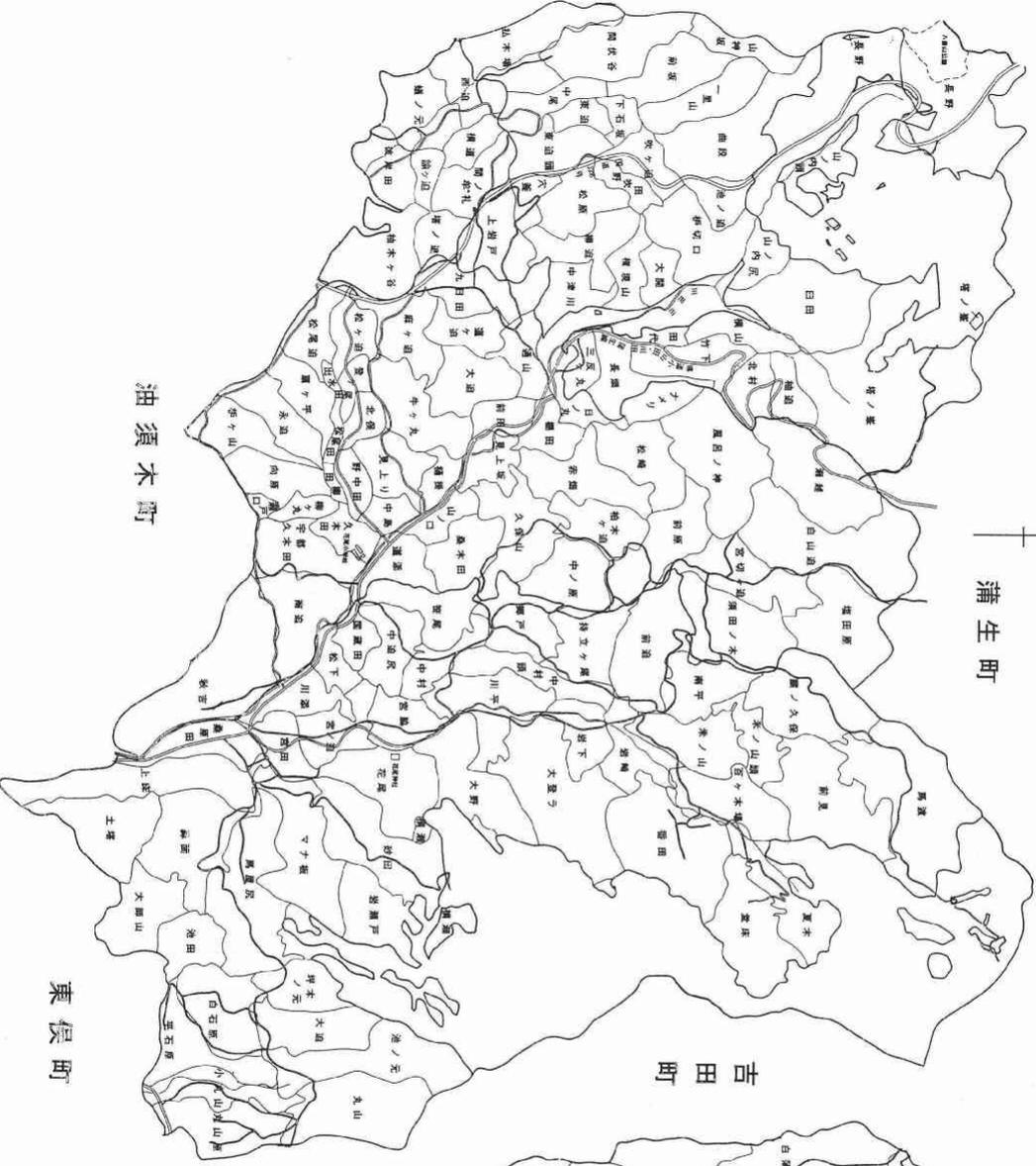
番号	字名	備考
1	下宮田	シモミヤタ 智賀尾神社
2	柿ヶ丸	カキガマル
3	前田	マエダ 智賀尾神社
4	上宮田	カミミヤタ 智賀尾神社
5	大園	オオソノ
6	小山下	コヤマシタ
7	一町田	イチチョウデン
8	平	デラ
9	内木場	ウチコバ ウッコバ
10	瀧ノ下	タキノシタ タツノシタ
11	後ヶ迫	ウシロガサコ
12	瀧ノ上	タキノウエ
13	大杉	オオスギ
14	山ノ口	ヤマノクチ
15	餅川	モチカワ
16	宇都原	ウトバル
17	大鹿	オオシカ
18	柴立	シバタテ 山頂の分岐点に祠を建て、往来の安全を祈願する
19	八反田	ハッタнда
20	東原	ヒガシバル ヒガシバイ
21	柳ヶ迫	ヤナギガサコ
22	大谷	オオタニ 熊野神社
23	谷	タニ 熊野神社
24	前畑	マエバタ 熊野神社
25	大久保	オオクボ 熊野神社
26	中木場	ナカコバ ナカンコバ
27	平木場	ヒラコバ ヒランコバ
28	雪元	ユキモト ユツモト
29	炭ヶキ	スミケキ 「タンケキ」上宮岳
30	上宮	ジョウグウ 智賀尾神社 熊野神
31	柳ノ下	ヤナギノシタ
32	梨木野	ナシキノ
33	悪谷	アクタニ 急峻な谷間、もしくは崩れやすい地帯か 仕明
34	大浦	オオウラ //
35	前石坂	マエイシザカ //
36	雪降り	ユキフリ //



花尾町字図

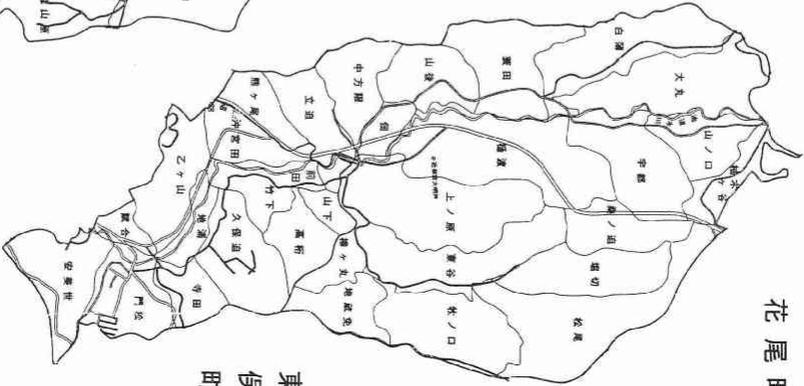
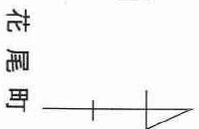


油須木町



郡山

油須木町字図

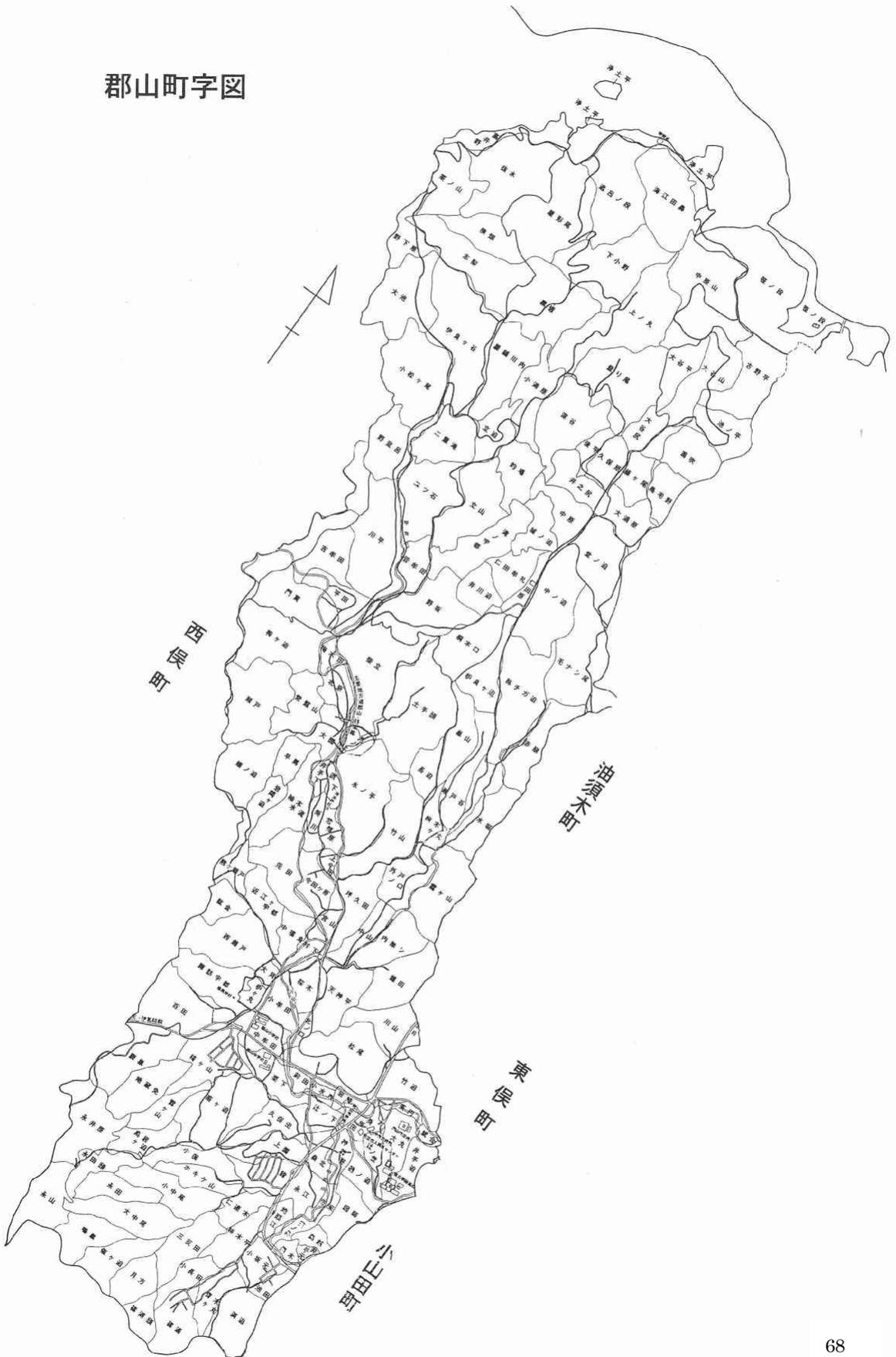


東俣町

東俣町

吉田町

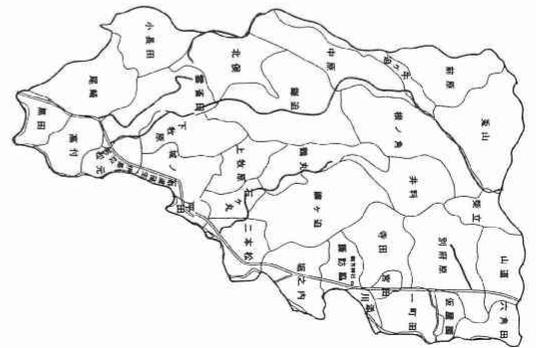
# 郡山町字図







有屋田字図



## 第二節 石碑・記念碑・歌碑

石碑や記念碑等を調べることは、わたしどもの先祖の業績や当時の歴史や文化を知るうえで大切な仕事である。常盤の井手上の小さな滝壺の前に、石工桑原泉寿院の業績を偲ぶことのできる自然石に刻銘された石碑がある。その碑文を読むことで泉壽院の辛苦の偉業を理解できるのである。

### 《川田地区》

川田城跡を前に見て、石造りの眼鏡橋が架かっている。この橋のたもとに川田橋改修工事記念碑が建立されている。

#### 碑文

凡富家者在開四通八達道也当地南距国道里許北通入來宮之城 地勢多崎嶇磽○不便貨物運輸以是明治三十年改修里道避臂坂峻嶮為使車馬交通示來經二年亦石橋遭破壞焉嗚呼既設石橋二十有七年一期而罹此禍於是當字人民以同心協力投多額工費起再一大工事于茲竣成功是為永遠之記念矣 庄之丞 真義 謹書

明治三十四年丑一月十三日設立

とあり、成尾庄之丞を建設委員長に、加世田助次郎委員外三名、田上暎次郎外三名の請負人、外に寄附者名が刻まれている。地勢がはなはだ悪く、車馬の交通に不便を来し、度々の改修に字の人民が多額の工事費負担を余儀なくされたことがわかる。

### 川田橋架換記念碑

この橋の碑文から、せつかく前年度改修した橋や堰・堤防等がその年の六月廿九日の洪水に遭遇破壊、再び県の補助や村民負担により、再度架け替えが、明治三五年七月に行われている。工事頭は有馬吉次郎・宅満矢之助、当時の村長は有馬純幸と彫つてある。

これらの記念碑の横に明治七年建立の猿田彦大神の石碑があり、道行く人々の安全を祈る民間信仰を知ることができる。また、道路改修の工事記念碑も川田には多い。

### 道路改修記念碑

明治三十年九月一日 川田字森山、碑文に

東俣字上川原ヨリ小山田字下木場国道二通ズル里道改修此改修費負担額 一金 四百貳拾七円 川田全部百壹戸

一金 三百七拾七円 東俣西組七拾壹戸

一金 貳百円 寄附 鹿兒島市住吉町 稲松熊吉

と彫られ、外に道路工事主任や川田東俣委員二五名の名と、全戸の氏名が刻まれている。両村をまたいで工事であったことがわかる。



川田橋架換記念碑と猿田彦大神碑

## 郡山・伊敷耕地整理記念碑

隣村との合意による工事として、この石碑は川田の森山の県道沿いに建立されている。大正五年五月十二日のことである。

碑文の中に、明治三十七年企業のことあらんとするに、ある事情に妨げられ、有志の先祖の必須の訴えをようやく実らせることが出来たことが読み取れる。この工事により、旧反別十一町四反三畝歩余が、竣成反別十二町三反四畝歩余に及び、九畝歩余の増歩を得たことが記されている。総工費一万百二十三円七十八銭を要したとある。

このほかに川田比志島道路開鑿記念碑、昭和二十七年一〇月、三重岳林道開設記念碑、昭和四七年三月もある。川田比志島道路開設の総工費は五万四千五百円、内地元負担は一三万八九五〇円、三重岳林道が総工費二一七六万四千円で、地元負担は、一六五万六千円であった。

## 井手元堤塘改築記念碑

昭和九年四月一日建立 川田井手下



井手元堤塘改築記念碑(川田)

碑文には次のように彫つてある。

旧堤塘ハ明治三十四年  
未曾有ノ洪水ノ為メ破壊  
流失シ関係地主ハ爾来用  
水困難ナリシモ修築工事  
費多額ノ負担ニ堪エサル  
ヲ以テ今日マデ永年ノ間

改築シ能ハザリシニ今般農事匡救土木補助ノ恩典ニ浴スルヲ得テ水門工事ト共ニ修築サレ遂ニ永年ノ希望ヲ達スルヲ得タルハ関係地主ハ勿論川田部落民ノ歎喜スル所ナリ・・・

夫役日数壹千弍百五拾日、加勢夫日数百六日、代表者加世田真美會計係山田新太郎、工事係成尾庄七郎、委員西甚助外、石工山内の水神碑があり、宝暦の水神の碑文には、外園門名子長助謹〇とあり、大きな負担を背負つて建てるという奇特さに殿様からの褒賞を受けている。

水神碑の多くは、井堰の完成やその流失の改修、旱魃や洪水等自然災害の跡などに建立されている。村人の祈りを込めてのものである。この水神の横に、井堰建設の記念碑があり、石垣東西五十間石橋二渡り築造などの記録と、下に彫られた名主の中に百左衛門とあり、白石の墓地にある東門の百左衛門ではと言われている。

## 御料筍栽培地記念碑

昭和十年十一月十五日建立、川田の孟宗竹林、栽培奉公者白石三畝 明治二三年七月生、栽培主任 村の林業技手玉利 これについては、本書第八編 第六章経済 第二節産業の発展参照

## 《東俣地区》

### 東俣小山田里道改修記念碑

大正八年五月起工、大正九年三月竣工 東俣西下(小山田境)  
総工事費 一金七千二百六拾五円二拾一銭

内訳 伊敷村支出額 一金八百拾八円二十六銭

小山田地区負担額 一金千百拾四円七十四銭

東俣負担額 一金五千三百三十二円二十一銭

工事関係戸数 郡山村東俣 二百二十一戸、伊敷村小山田五七戸伊敷村長 川路与熊、工事設計者 三島藤輔、村会議員有村次郎世話人 夏迫三左衛門、外に委員・寄附者名等が刻まれている。

### 床次橋及び堰堤新設架換記念碑

明治三十五年八月建立 東俣字下川原田  
碑文

本村床次橋及び堰堤防明治三十四年六月九日為洪水遭遇破壊依之以県補助費及村民負担翌年四月起工、樋渡及床次石堰新設架換八月于茲成功故為永遠之記念矣

一金 五拾円 右花尾神社・一之宮神社道筋

川田東俣石橋工事費内 磯島津家下賜 謹書

村長 有馬純幸、監督 松田武五郎、工事主任 三島藤輔

委員 太夫仲太郎・有川作次郎・増満助右衛門・地福畷次郎

永田次右衛門・福田伊助・鶴村仁左衛門・諏訪田次郎

この石碑の横に、昭和元年三月の記念碑も建立されている。

### 一之宮橋架橋記念碑

昭和九年三月建立 東俣字下川原田

この記念碑の碑文には、明治廿二年石橋を架橋したが、同三四年大洪水に流失し、さらに三五年架橋したが、同四三年大洪水に再度

流失し、以後土橋を架設したが小さな洪水にも押し流され、多額の経費を失い、不便を感じているとき、県の匡救農業土木工事業を得て、狭隘な東西数町の道路も改修できたことを記念して建立したものである。明治三四年・四三年と大洪水に遭いながら、土地の人々は立ち上がったのである。昭和九年は大旱魃に苦しんだ年でもあった。

当時の村長は国分友睦、勸業係は諏訪田畷吉であった。総工事業は、壹千七百拾四円、補助額は六百六十円、代表者として活躍した人々は、盛田俊行、委員は野間助五郎・諏訪田渡右衛門・田知行義彦・大淵脇新助・福田清・白石三畷等であった。

昭和九年の県の匡救農業土木費補助は、次の前田橋の架橋にも利用され助かったのである。

### 前田橋架橋記念碑

昭和九年十二月建立 東俣餅ヶ丸  
碑文



前田橋架橋記念碑(東俣)

本道路ハ主要ナルモ橋梁ハ明治二十二年、明治三十九年ノ二回ニ亘リ多大ノ工費ヲ投ジ石橋ヲ架設セルモ、明治三十四年・大正元年ノ大洪水ニ流失サレ其ノ後土橋ヲ架設シ相当ノ維持ニ努メツツアルモ・・・匡救農

業土木費補助ヲ仰ギ架橋・道路ノ改修ヲナシ・・・。

総工事費 四千壹百円、工事費補助 壹千七百円

代表者は、宇都甚次郎外であつた。

この石碑の横に、餅ヶ丸農道改修工事記念碑や、明治三十九年四月吉日建立の猿田彦之命の石碑が並立して建っている。猿田彦之命は天孫降臨の折、その道案内を務めた神と言われている。人々の交通安全を祈る心がここに祀られることになったのであろう。

### 樋渡井堰改修工事記念碑

建立年月日は不詳 東俣字樋渡

この井堰は、両岸に取水口があり、広域にわたって用水が利用されている。



樋渡井堰改修工事記念碑(東俣)

#### 碑文

本井堰八十五町六反十七  
歩ニ灌漑スベキ井堰ニシテ、  
明治三十四年多額ノ費用ヲ  
投シ石井堰ヲナシタルモ、  
翌三十五年洪水ノ為押流サ  
レ、更ニ翌三十六年石井堰  
復旧工事ヲナセシモ明治四

十三年大洪水ニ再度流失シ、其後毎年約二百円ノ費用ヲ以テ竹井堰ヲナシ灌水ニ努メシモ漏水大ニシテ充分ニ灌水ナシ得ス。特ニ昭和九年未曾有ノ大旱魃ニ際シテハ、地区内ノ大部分ノ耕地ハ殆ト收穫皆無ノ悲惨ナル状態ニ陥リ之ガ改修ノ要ヲ熱望シ、旱害応急施設耕

地事業費補助ヲ仰キ、従来ノ粗朶堰ヲ完全ナル混凝土堰ニ改修シ以テ灌漑用水不足ノ安全ヲ期シ農業経営ノ充実ヲ計ラントセルモノナリ。

関係地主氏名 畠田仲畷外七十九名 氏名は略す。

延べ日数 参千六十日

砂利採取人 上床万之助、大工 米永庄市・田中純義

石工 横山勇一

### 永山・丸山地区水田農業確立規模排水対策特別事業記念碑

県道伊集院・蒲生線丸山入り口の永山島廻、川沿いの一角

工事着工 昭和六十一年、工事竣工 昭和六十二年

地区面積 九町三反

総事業費 一億三千九百三十八万円、事業主体 郡山町

施工者 県土木改良連、石碑施工者 (株) 寿福石材工

委員長 山元俊清、副委員長 丸山大安、書記会計 田知行哲彦

監事 谷崎 亨・坂元十郎・丸山輝男、地権者安部松忠義外

当地区の歩み 昭和二十一年島廻地区石井堰及び用水路新設

昭和三十二年県道伊集院蒲生線開通、昭和三十三年農道丸山線

新設、昭和四十七年島廻農道及び用水路新設の委員長坂元繁教

### 県営中山間地域総合基盤整備事業記念碑

場所 東俣字餅ヶ丸

碑文

東俣と花尾の境界に在る樋渡堰、この地点より南側に存在する

圃場（樋渡・楠元・宮田・前田・山下・柳ヶ丸・鑑・湯屋原・餅ヶ丸・口ノ坪・中玉・柳田の十二字）と、一之宮神社正面から南方小学校付近まで



備整備基合地域間山記念碑  
事業記

広がる字下川原田、合わせて十三字の地権者（延べ二百十六名）より、事業推進のための同意が得られ推定農地面積三十八町歩を対象として、旧郡山町内で最も広くまとまった「東部地区圃場」の基盤整備を展開した。工事に当たって幹線道路を車の離合に支障のない幅員に設定し、個々の圃場には用排水溝を備え、水稻栽培に不可欠な誘水の源となる湯屋川・土塔川・浦田川の要所に簡易転倒堰を設置した。既設の前田橋は老朽化で、中玉橋は幹線農道の位置変更で更新、なお柳田橋を新設し、県道への通り抜けが可能になった。

付記

樋渡堰は「災害復旧事業」で、九千二百八十万円を投入し、転倒ゲート式堰として、平成十二年度に完成した。

この石碑から読み取れることは、三十八町歩にわたる広域の基盤整備であったこと、また各河川の要所に簡易転倒式の堰が築かれたこと、樋渡堰が転倒ゲート式堰として有効利用されるようになったことなど、この石碑の碑文でしか知ることのできない貴重な存在に

なっていることである。機械化・合理化の視点から、みんなの同意を得ての画期的な事業への取り組みの様子を理解できる。

《花尾地区》

農業構造改善事業記念碑

場所 花尾町字大平集落入り口  
碑文

この記念碑は基盤整備事業の完成を記念して建てたものです。これまでは農耕をするにも牛馬が通れて、収穫時は人が担いで家まで持ち込んでいたが、昭和四十年代になり農業も曲がり角になり此のころから現金収入の道を考え専業農業は少なくなり日曜農業と変わり、牛馬も徐々に飼育を諦めて機械化の時代となつて、圃場に耕運機を入れるにも棚田の為に道路もなく、農耕や収穫時には危険や労苦の連続であったが故に、基盤整備事業を行政の勧めもあり、大平地区でもこの事業を取り入れて、昭和六十三年九月より事業名農業構造改善事業大平地区として圃場整備されました。

地区面積	九・〇八ha、基盤整備面積	七・二ha
事業費	一面工事	昭和六十三年 九七、一五八、〇〇〇円
	暗渠排水工事	平成元年度 一二、二四〇、〇〇〇円
小計		一〇九、三九八、〇〇〇円
換地費		四、三二二、〇〇〇円
確定測量費		一、五四五、〇〇〇円

小計 五、八六七、〇〇〇円  
 合計 一一五、二六五、〇〇〇円

地元負担金 面工事業 一四、九一七、〇〇〇円  
 暗渠排水工事費 二、三七二、〇〇〇円

返済 平成元年十月二十日～平成十八年十月二十日  
 委員長 野下喜一、副委員長 石谷 栄、その他一七名

### 岩戸地区圃場整備事業記念碑

場所 花尾町岩戸入り口  
 碑文



岩戸地区圃場整備記念碑

農村の高齢化・過疎化の深刻さに思いをはせ、農村の活性化・近代化のため、農業の機械化・効率化による生産性の向上を図るため、補助事業を利用することにした……。

#### 事業実績

事業名 岩戸団体営圃場整備事業

工事期間 昭和五十六年度～昭和六十一年度（換地まで）

面積 従前 一九、六二ヘクタール

換地 一五、八二ヘクタール

事業費 総額 二億二〇一八万円

地元負担金 三三〇二・七万円

負担率 国四五%、県一〇%、町三〇%、地元一五%

地元返済方法 農協借入れによる一時払いとし、借入金は十八年度賦償還として、平成十二年度に完済予定、なお利率は五・五%

#### 換地委員（評価委員・清算委員兼務）

委員長 岩戸良治、副委員長 末吉貞雄、委員 末吉 忠

竹下 実・小原純矢・谷口正市（松下 繁）

盛満正市（福永芳英）（ ）内は交替委員

#### 農業基盤整備資金融資 日置中部農協より借入れ

#### 小規模排水対策特別事業

大宮地区にも水田農業確立小規模排水対策特別事業を利用して、約十町二反歩を一億六〇〇万円で、昭和六十三年に竣工している。暗渠排水工事の竣工は平成元年であった。農家約七十戸は美田と化した圃場に喜びもひとしおであった。

#### 皇紀二千六百年記念碑

花尾神社の参道、花尾神社墓石塔群の下にこの記念碑は建立されている。昭和十五年は第二次世界大戦勃発の前の年である。国民の意気の興隆を図るこの記念碑は、油須木町のコミュニティセンターや清和の潜木神社等にも建立されている。

#### 丹後局御憩石（御腰掛石）花尾神社の項参照

ここでは、島津忠重閣下篆額について記録する。

## 碑文

嘉禄三年（一二二七）丁亥十二月十二日丹後局御腰掛ニシテ掩粧ナル御局ハ我ガ三州ノ始祖島津忠久公ノ生母ニシテ、源頼朝公ノ乳母比企尼ノ娘ナリ、幼ニシテ宮中ニ入り、二条・高倉ノ両天皇ニ近侍シ、和歌ヲヨクシ秀作○ニ名ヲ輝カサレシ才媛ナリ、建久七年六月朔日忠久公御年齢十八歳ニシテ三州守護職ニ封セラルルヤ御局ヲモ御迎へ給ヒ厚地邑東俣邑ヲ湯沐ノ邑ト定メ給フニ依リテ東俣村ヨリ厚地邑へ赴カルル途中、コノ石ニ憩カケ給ヒシモノナリ。然ルニ明治三十四年洪水ニ不幸ニ埋没サレテ、今日ニ至リシヲ遺憾トシテ今回皇太子殿下御降誕ヲ  
 ・・・・欠損・・・

花尾神社掌 山田兼義 之撰

花尾敬神会長 石田正志 ○○（敬白）

昭和九年七月 建之

花尾氏子総代 前田郷助・茄子田三五郎・脇 栄吉

小原仙太郎・福元新次郎・大平喜作

末吉勇吉・末吉元右衛門

この石碑は、花尾神社社殿から、約六町の所に建立されていたが道路や公民館の改修等で現在地に移設されている。石碑の横に六町石がある。欠損により文字の不鮮明な所もあったが、昭和九年皇太子殿下のご降誕を機に建立されたことがわかる。場所は大下公民館近く三差路である。

## 行幸記念桜樹栽植之碑

茄子田公民館内

## 碑文

茄子田青年会  
 昭和十年十一月鹿兒宮両県ニ涉リ、陸軍特別大演習ヲ行ハセラレ御統監ノタメ聖駕ヲ迎へ併セテ地方行幸ノ聖恩ニ浴シ、之ヲ記念スベク桜樹五十本ヲ栽植シタルモノナリ

指導員 吉永繁盛

石塔の下部に、吉永純外九名の名が刻まれている。この時、川田にて、天皇への献上品として、早掘り筒を栽培、その記念碑が現地に建立されている。

## 入来峠大観峰碑

昭和三十五年二月二十三日 皇孫お誕生日

場所 入来峠近くの停留所

碑文

「ここに国鉄バスを止めて、旅行く人の旅情を慰めるために、この峠一帯に桜樹を植え、これを記念する。」



この峠を愛する人々にて、当時は、現在のような道路ではなく、舗装もなく、バスもあえぎあえぎ登り、ここで一休みするのが、客にもバスにもひとときの憩いであり、休息でもあったのであろう。

## 花尾神社の梵字碑

花尾神社参道、墓石塔群近く

建立 嘉永四年九月吉祥日

この石碑は、「正徳二年九月十八日の厚地村之事被対」の事項についての確認のための彫り物で、福昌寺の寺社領としての宇宿村同然の約束事を再確認の意味で建立されたものである。

花尾神社の項参照

このほか、花尾地区には経済道路岩戸道路記念碑が岩戸公民館敷地内に、また、久保山上へ通ずる道路の入り口に、大正三年四月十日建立の橋梁記念碑がある。

久保山上農道竣工記念碑

久保山上道路改修記念碑

など、道路建設は、住民の生活にとって大切な事業で、本町がまず道路建設に優先的に取り組んできた様子が理解できる。

山階宮大妃殿下・久邇宮大妃殿下御参拝記念碑

花尾神社参道沿い 社殿より約三百メートル

建立 昭和九年九月

《郡山地区》

百歳碑

郡山町の高齢化率はいよいよ高まり、町では百歳を祝って石碑に名を刻むことになった。

場所 郡山町福祉センター敷地内



百歳碑（社会福祉センター）

碑文

あなた百まで わしや九十  
九まで共に白髪の オハラ  
ハー 生ゆるまでこれは小  
原節の一節で、人生最高の  
幸福は夫婦揃って元気で百  
歳まで長生きするものだ  
と  
教えたものであり、百歳までもの夫婦の幸せの願いとも聞こえま  
す。最近人類は適切な医療食事及び健康管理により、百歳を越え  
ることが可能となり、平成五年には本町一名を含み、全国で四八  
〇〇名が百歳を越えられました。日本は今や世界一の長寿国で、  
男七六・〇八才、女八二・二二才の平均寿命を迎えるに至りまし  
た。百歳の壁はとても厚いことは事実であります。しかし、自ら  
の努力と信念に加え、適切な現代的健康管理により、これを突破  
する人、これに挑戦する町民が年々増加し、山美しく水清い郡山  
が「長寿の町」として、百歳碑に名を連ねる人の多からんことを  
祈念して、ここに百歳碑を建立するものであります。

平成十五年九月十三日 郡山町長 岩戸 良治

石碑裏面 東 俣 白石三畷 郡山 鬼塚武二

有屋田 池田ナル 川田 黒木テル

川田 山下ヨシ 川田 宮下ヨ子

川田 福島スエギク 東 俣 田中サエ

平成十六年三月現在

## 殉職の碑

場所 上園の早馬公園、建立年月日 昭和四十五年七月五日  
碑文



殉職の碑（早馬公園）

昭和四十五年七月五日、郡山町は一時間百ミリを越す未曾有の集中豪雨に襲われ、随所に大災害が続出した。折柄この高台に緊急出動防災作業中の消防団員上園吉清（二十六歳）・白坂ふかし（二十五歳）の両君は、午後一時突然起こった崖崩れで一瞬のうちに生き埋めとなった。急を聞き駆けつけた消防団員・町民五百有余人の必死の救出作業も空しく、午後三時十三分両君はスコップを握り締めたまま遺体となって発見されたのである。町民等しく両君の殉職を悼み、その功績を永久に顕彰するためにここに碑を建てる。昭和四十五年七月五日

この碑の前に立つと、この恐ろしい災害を忘れまいぞという思いが募る。平成五年の八・六災害とその後も集中豪雨の恐ろしさを幾度も体験し、今こそ災害の起こらない町づくりに衆知を集める必要を感じる。

## 道路改修記念碑

昭和九年五月完成 上園早馬公園入り口  
隣の緑地内には、鹿兒島市の指定民俗文化財の「田の神」がある。

元文元年（1736）十月吉日建立、台石に門の講中の人々の名が刻まれている

## 長谷辰二先生頌徳碑

場所 郡山町郡山麓 仮屋地頭跡

碑文

先生は小根占の人、本村文化の父にして、我らの恩師なり。明治二十六年から、郡山小学校等の教師として勤務、子弟の教育に専念した。旧郷土史 学校教育の欄参照

## 堰堤改修記念碑

場所 郡山常盤字井手元

建立 昭和十年五月二十五日 代表者 白坂金之丞

碑文

本井堰ハ切石積ニテ漏水大ニシテ 用水上不便少ナカラサルタメ地主一同常ニ之ガ改修ヲ企画セシ 折柄偶昭和九年度旱害ニ遭遇シ県下ハ勿論全国的ニ被害著シク政府ハ補助金ヲ交付シテ応急施設ノ対策ヲ講セラレントス 此時ニ当リ補助申請ノ手續ヲナセシニ国分村長ト諏訪田勸業主任等ノ尽力ニ依リ愈々認可ヲ受ケ三月八日起工シ五月五日竣工ス

## 堤堰災害復旧記念碑

場所 前記と同じ井手元  
建立 昭和二十五年三月八日

着 工 昭和二十四年十二月九日 竣工 昭和二十五年三月八日  
総工事費 金 九十八万五千円

内訳 国庫補助金 六十三万五百円

地元負担 三十四万四千五百円

土木工事主任 宇都 魁 以下略

昭和二十四年七月のフエイ台風は、前記井手元井堰を再び破壊したことが、此の石碑からわかる。この石碑の近くに、寛政十三年辛酉二月吉日建立の記念碑が建っている。石工は桑原泉壽院で、この時の井堰が切石積といわれ、改修を加えながら、昭和十年まで持ちこたえてきたものと思われる。昭和九年の大旱魃は、県下は勿論全国的に大きな被害をもたらしたのである。石碑はこうして現代の我々に事実を如実に教えてくれる貴重な記録なのである。

### 桜島爆発記念碑

建 立 大正五年十月十二日 文化財の項参照

### 常盤産業組合設立記念碑

建 立 大正十二年四月二日

場 所 郡山町常盤柴立

常盤産業組合が甲突川の水利権を得て、水車を実現したが、組合が廃業、水車は現在の下茂氏に引き継がれたのである。現在水路は部分的に残り、水車の面影はない。

### 水道改設記念碑

建 立 昭和三十三年六月八日郡山麓地区 光明寺奥山手

着 工 昭和三十二年四月一日

竣工 昭和三十二年六月二十日

総工事費 百四万六千円

委員長 末吉時義外



水道改設記念碑

郡山に簡易水道設置が叫ばれて、郡山麓・大浦地区等まず取り組み、やがて町内全域にこの設置が進められていった。

### しばたてばし記念

建 立 大正八年九月建設

場 所 常盤柴立橋たもと

碑文

大正八年七月八日ノ豪雨に河水氾濫シ 橋梁流失シタリ常盤部  
落ハ直ニ之ガ架橋ヲ議決シ 工費百八十円 諸費三百八十円  
合計五百六十円 各戸六日 下部落四日 延べ日数四百五十日  
ニテ竣工シタリ

大正八年九月建設

台石と基石に、寄進者名 横・裏面に刻銘がある。しかし、こうした石橋も下流の常盤橋同様、平成五年の八・六災害に遭い、もろくも崩壊流失したのである。現在はコンクリート橋になり、川幅も広く、川の側壁もほとんど改修されている。

### 国分友睦頌徳碑

場所 旧郡山町役場（現在の郡山支所）敷地内に移設

建立 昭和四十七年七月十六日

碑文

国分友睦翁は明治二十八年十月三重岳山麓、東俣の地に生まれ昭和四十二年七月十六日七十三歳をもって、多彩な生涯を終えられました。翁の半生は郡山の首長として、産業・教育の振興に尽力され、またその間県議会議員等幾多の要職につかれ、始終一貫つねに郡山を愛され、郷土のために尽くされ、偉大な功績を残されました。翁の徳を後世に伝えるため、広く浄財を募り、頌徳碑を建立しました。

昭和四十七年七月十六日

建設委員長 郡山町長 中村 正

### 記念碑 皇紀二千六百年

場所 油須木コミュニティセンター敷地内

建立 昭和十五年五月五日

碑文

松元千代助氏ハ我  
ガ近都宮神社ヲ氏神  
ト仰ギ 尊祖最モ深  
キ人ナリ 資性温厚  
徳高ク人格崇高ニシ  
テ愛国ノ念篤ク 透  
達セル卓見ハ真ニ敬



記念碑（皇紀二千六百年）

服ノ外ナシ国家隆昌ノ基礎ハ青年教育ニアリト其必要ト急務ナルヲ強調シ本青年舎ヲ建築寄付サレタリ 氏ハ全ク我が部落発展ノ大恩人ナリ 依テ此処ニ碑文ヲ記シテ其高德ヲ永久ニ傳フ

一 総工費 一千八百三十円七十九銭

二 労力奉仕延日数 二百十五日

建築委員 篠原善右衛門・池田市二・竹下三之助

八木郁太・宮路元熊・桑原豊助・竹下清盛

有屋田俊良

大工棟梁 鬼丸 裕

石塔の裏面に銃痕があり、戦時中の空襲を思い出す。正面にも痕跡の一つがある。建築された油須木の青年舎は、前は川向かいの山手にあつたが、この記念碑も現在センターの敷地内に移設されている。

### 県営農業振興総合整備事業記念碑

場所 郡山町常盤 常盤五輪塔群前

建立 平成十五年三月吉日

碑文 県営農業振興総合整備事業

工期 平成四年度～平成十四年度

総事業費 四億一千七百万円

事業内容 圃場整備 六・五四ha 五千七百万円

一号集落道 一億八千二百万円

コミュニティセンター 一億一千六百万円



備整備総合興業記念碑

親水公園 二千九百万円  
 多目的広場 三千三百万円  
 役員 委員長 常盤一治  
 委員 吉満兼夫・常盤三男  
 振興 森山藤男・柳元敏夫  
 業記 公民館長 吉満秋人  
 営事 常盤公民館の敷地には、次の石碑も建立されている。

大浦構造改善センター建設記念碑

場 所 郡山字大浦  
 建設 昭和六十二年十二月十九日竣工  
 碑 文

昭和六十二年度農村地域農業構造改善事業施設  
 施工業者 敷地造成 (有) 大井建設  
 建築工事 (株) 石 嶽

建設事業費 一七三〇四千元

建設資金調達 国庫補助 七八二四千元

町補助金 一〇〇〇千元

地元負担金 八四八〇千元

建設委員会 委員長 藤崎一夫 会計 小原達雄

委員 米永勝征外八名

平成三年度営農環境整備事業記念碑

公民館の総工費は、一四、八八七千元

内訳 財団法人全国競馬畜産振興会補助金 五、五〇〇千元

地元負担金 九、三八七千元

県営農免農道整備事業記念碑

場 所 柴立の大浦入り口

碑 文

小浦地区 平成四年〜十二年

総事業費 六億五一五万円

総延長 二、〇三〇メートル

建立 平成十五年三月吉日 公民館長 吉満秋人

委員長 白坂道男、

委員 森山金近・河野石松・上原 勉・吉満秋人・上原閑昭

飯福富男・白坂六夫・白坂秋夫

大浦郷土霊苑

場 所 郡山字大浦

建立 平成十二年十一月吉日

碑 文

この墓地の最も古い墓標の年号は、今から約三百年前の寛文六年であり、大浦開拓の歴史もこの年代に始まったものと推定される。累代祖先の霊地として今日に至ったものである。

時代の変移に伴い、埋葬の方法が土葬から火葬となったため、関係者十八名全員の協議の一致をみて、墓地造成工事施工のうえ納骨堂の建設を完成したものである。願わくば御霊よ安らか

にお眠りください。納骨堂完成を期に墓地の名称を大浦郷土霊苑と名す。

総墓数 十六基

着工 昭和五十二年十二月二十日

完成 昭和五十三年六月三十日

総工事費 六百四十三万五千元

建設委員 委員長 桑原隼人、副委員長 井上美利

井上 積・白坂健太郎・桑原史郎

施工者 納骨堂 末久石材点、造成工事 大井建設

この十六基以外に、本霊苑には江戸時代と思われる僧侶墓やその他十数基の古い墓石塔があり、中でも五輪塔の造形美はすばらしい。

### 経済道路記念碑

建立 昭和十五年四月完成 油須木町

油須木く茄子田間の道路で、町内には数カ所この経済道路が建設されている。

### 《西有里地区》

### 仕明橋架橋記念碑

場所 仕明集落入り口 共同墓地敷地横

建立 昭和三年三月十日

石造りの太鼓橋、八・六災害時郡山町の石橋はほとんどが崩壊流失してしまつたが、この石橋は、上部をコンクリートで覆い、災害を免れた。記念碑の横に、川内の平佐方面から江戸時代の末期、園

田永井両家が、開拓のため入植したことが彫られた石碑がある。

### 梨木野橋架橋記念碑

場所 梨木野公民館近く

建立 大正十一年・昭和十七年十一月十一日の二基

現在は、災害で流失コンクリート橋に架け替えられた。

### 道路改修記念碑

場所 本岳元の大谷小学校下

建立 昭和十七年五月二日

本線 昭和十四年三月二十日、支線 昭和十五年四月一日完成

道路延長 本線 七、八四四m、支線 一八〇〇m

総工事費 五三、〇八六円、内大字負担 二一、九七三円

昭和十五年ころから、郡山村をはじめ道路の改修・整備があちこちで進められた。

### 里道開鑿記念碑

場所 郡山岳 県道36号線(郡山・樋脇線)沿い

建立 大正八年九月十五日

この記念碑の近く、雪元入り口の所に、庚申供養の道路標識が建てられて、東入来街道・西樋脇街道と刻まれていて、古道の面影が少しだけ残っている。

### 経済道路建設記念碑



霧島神社鳥居横  
経済道路建設記念碑

場所 西俣字北ノ園  
建立 昭和十五年四月完成  
幅員 三m六〇cm  
延長 二、六五〇m  
総工事費 一万二七〇円

宮田暎助翁頌徳碑

場所 郡山岳 自然学園敷地内に移設  
碑文

長崎医専を卒業し、郷里里岳にて開業、医療に励むかたわら村  
会議員・郡会議員・県会議員・県議会参事会員となり、さらに  
下伊集院村農業組合長や日置郡畜産組合長など、村・郡・県の  
行政・教育・経済・交通・牧畜・産業その他全面的にその要職  
に当たり、その功績顕著にして嶽住民は翁の徳を敬慕すること  
慈父の如くで、永久に翁の徳を讃えるため、頌徳碑を建立した。

昭和二十二年二月二十五日死去 六十五歳  
追記 翁は国有林大字嶽共有林二五〇町歩を払い下げ、嶽地  
区の共有財産とし、現在の嶽生産組合の基盤を作った。

井堰改修記念碑

場所 神之川の轟瀧より約百メートル下流  
建立 昭和九年六月十日

碑文

此堰ハ從來芝(柴)堰ニテ 降雨ノ為屢流失シ 施主ノ不便甚  
シク改修ノ議度々起リ 時幸ニテ早害対策補助ノ恩典ニ浴シ  
昭和九年二月十一日工事着手 六月十日竣工セリ  
総工費 千百円、延べ人数 五百二十人

この井堰の約二百メートル下流に、次の井堰があり、水神が建立  
されている。元文五年(一七四〇) 庚申二月十八日の銘と、石切り  
等に活躍した人々の名が刻まれている。

河川改修工事土地基盤整備完成記念碑

場所 郡山町西俣・里岳 神之川沿い  
建立 昭和五十九年二月二十五日



西有里の圃場整備記念碑  
この西有里圃場整備  
事業は、郡山町で最  
も早く取り組まれた  
事業である。この石  
碑の碑文に事業への  
取り組みの趣旨がよ  
く表れている。

碑文

古くから、神之川のこの地区の河川は蛇行がひどく、人々は大  
水のために被害を受け難渋していた。昭和四十四年と四十六年  
に大水害を蒙り、その解決方法として河川改修が強く要望され、  
昭和五十年に採択され、現在地が河川災害復旧関連事業として、

河川改修工事が昭和五十二年度に完成、此の事業で廃河川敷となった土地の利用と住民の切なる願いである土地基盤整備事業への取り組みと熱意により関係機関の理解と尽力で、新農業改善事業が昭和五十三年度は総事業費二億六千四百五十四万八千円で認可され、事業に着手した。この土地基盤整備事業は面積が、十七・七ヘクタール、事業費一億一千四百七十二万二千円、ないようは区画整理・用排水路・農道・井堰修理・暗渠排水等の工事であり、大字西俣字開キ、大字嶽字一町田・内木場・瀧ノ下で、関係者は西俣四十五人、里岳五十六人、計百一人であった。また関連事業として、西有里研修館も昭和五十五年度に、事業費五千四百九十一万六千円と、中部農協製茶工場が事業費五千七百四十一万円、関連農道・用水路など三千七百四十九万円で、昭和五十六年三月完成した。

昭和五十九年二月二十五日

郡山町長 中村 正 委員長 原田政利

経済課長 西 道雄 副委員長 宮田清二

経済課長補佐 米永誓哉 委員 田中 魁外二十七名

碑施工 原田良三郎

郡山町では、このあと多くの地域でこの基盤整備事業が取り入れられ、平成十五年の東俣字樋渡から南方小学校付近一帯にかけて中山間総合整備事業「東部地区圃場基盤整備」までで鹿児島市への合併となった。

西有里地区では、このほか平原一帯の基盤整備・河川改修の記念碑（昭和五十九年三月竣工）や有屋田の神之川河川敷の河川改修記

念碑（昭和三十三年建立）、有屋田の上城農機商会前の小規模排水対策特別事業（平成四年五月建立）等がある。

#### 青ヶ淵橋記念碑

場所 西俣の平原と岳の平地区を結ぶ橋のたもと

建立 大正八年九月十五日

岳側の山陰に建てられたこの記念碑が、今はすっかり河川も田園も改修整備され、その変容を静かに見守っているようだ。橋の近くに前記の基盤整備・河川改修の石碑と田の神が並んで建てられている。

整備事業により、湿地で裏作も容易にできず、雨季には大雨の度に川は氾濫し冠水流失の被害が少なくなかった。我々の祖先は永年にわたって苦勞してきたと碑文に書いてある。暗渠排水も完備、乾田化した田圃は過去にない収益も上げられるようになったという。

#### 和田用水路改修記念碑

場所 西俣下字和田付近

建立 平成七年十月

平成五年八月六日大洪水により被害、県単事業で改修工事を実施し、記念碑の塔身や台石には、横手の切石を利用するとある。

工事費 五百万円。県補助に百二十五万円・町補助金は二百万円

地元負担金 七十五万円

委員 久保田待定・堀之内孜匡（西俣側）、東 新助（中川代表）この地区は、郡山町と伊集院町両方にかかる井堰や用水路となつ



水神(弘化二年西俣下和田井堰) ている。そのため休耕措置も交互に行うといった方策をとっている。

伊集院を経て東シナ海に注ぐ神之川の流水を利用している。この井堰の近くに、水神碑が二基(弘化二年二月吉日建立と明治二十六年四月建立)があり、また昭和十年の堰水路改修記念碑と、昭和廿八年三月建立の水路側溝工事記念碑も建立されている。

完成した用水路は総延長は、二・二キロメートル、用水路の幅は約一メートル、深さは約九十センチで、面積約八町歩の水田の灌漑用水となっている。

和田用水路の関係記録によると、関係住民の苦勞の姿が如実に記載されている。明治二十六年建立の水神に寄進者名があり、五円から一円五十銭など地権者だけでなく、多くの方々からの篤志が寄せられている。

**明日農夢県営圃場整備事業麦生田第三換地地区完成記念碑**

場所 郡山町西俣下  
建立 平成十一年三月吉日  
地区概要 伊集院町中川(面積五一・一アール)



明日農夢(西俣下)

事業期間 平成元年～平成九年度  
委員長 東 善一  
副委員長 久保田待定  
委員 堀之内孜匡・比良利広・宇都清照・岩崎三郎・上良雄・川畑 境

**伊集院町土地改良区理事長**

宮路高光 伊集院町長

概算事業費 二億九一〇〇万円

**農村地域農業構造改善事業記念碑**

場所 有屋田小字松元 有屋田～県道山田・湯之元線まで

建立 平成元年二月十日

工事着工 昭和六十二年七月三日

総事業費 三一、九五二、〇〇〇円

区画整理 二五、四四〇、〇〇〇円

暗渠排水 四、六八八、〇〇〇円

換地費 一、六〇四、〇〇〇円

確定測量費 二二〇、〇〇〇円

地区面積 三・〇四ヘクタール 耕地面積 二・七四ヘクタール  
委員長 徳永 忠、副委員長 梶 政治、書記会計 吉留修一郎  
外委員 一六名  
郡山町長 中村 正、経済課長 白坂健太郎、係長 谷口純春

農免道路は、農林漁業揮発油税財源身替わり農道整備事業により造られた農畜産物の輸送に供する基幹産業道路として、昭和四十年に創設されたものである。

郡山町では、この農免農道里岳一期（有屋田・里岳線）はすでに町道（市道）に編入されている。その後の実施分について、農道整備区間里岳二期線一、八七三メートル、小浦線二、〇二〇メートル、厚地線二、二〇〇メートル、合計六、〇九三メートルが整備され、その受益面積は、合計一九〇ヘクタールとなっている。

県営のシラス対策事業による農地他保全面積は、一六八ヘクタールで、昭和五十九年から平成九年にかけて実施された。

### 「千年の森」記念碑

場所 西俣字平原

建立 平成四年三月吉日

碑文

この山林は、本町出身の農学博士三原義秋氏（東京都在住）が、平成三年（一九九二）三月、町民に親しんでもらおうと、七二、五三四平方メートルを寄附されたものです。

三原氏はこよなく山を愛され、昭和二十四年（一九四九）から育林を続けて来られました。現在ではクスなどの原生樹一三〇種、これにカリンなどの国内からの導入樹五四種、アメリカカ楓などの国外樹四八種を加えると二三〇余種にも及び、この樹種の多さは国内でもめずらしく、学術的にも価値の高い山林を形成しています。



千年の森記念碑

ここに博士の意思を継いで、この山を「千年の森」と名付けるとともに、自然のままを後世に遺し、活用を図るために記念碑を建立するものです。

平成四年三月吉日

郡山町長 岩戸良治

千年の森入り口の説明板には、次のように書いてある。

ここ「千年の森」は、郡山町出身で東京都在住の農学博士三原義秋氏が郡山町平原に所有されていた七二五三四平方メートルの貴重な森林を永久に倒伐しないで、自然の形で後世に残し、自然の大切と多くの人々の学習の場として生かしてほしいという事で、平成三年三月に郡山町に寄贈していただいたものがあります。

このようなことから、この森林を町では、三原氏の意思を汲んで、悠久の森林に育ってほしいとの願いを込めて、樹木園「千年の森」と名付けました。

この森林の中には、「『育て千年の森』一九八〇 三原義秋」の石碑、「奉馬頭観音供養 弘化四年未四月十九日 敬白」の石碑各樹木の標札など、設置されている。

町内には、まだまだたくさんの方の記念碑や石塔がある。こうしたものに記録された歴史的事実に目を向け、郡山の成長の姿を見つめていきたいものである。

## 郡山の歌碑

甲突の水せせらぎて八重嶽は

開聞金峰をかすみにおけり

鬼塚正憲 平成四年建立

ふるさとづくり特別対策事業に

より建設された八重山公園に建立

されている歌碑で、眺望絶佳の地、

ふるさとの懐かしい山より眺めた

桜島の雄姿、また遠く開聞岳や金

峰山の美しい姿を、こよなく愛さ

れたふるさとの歌人の思いである。

幽玄の地の底から湧き流れ出た水は甲突川となり、川沿いの地を潤

して余りあるのである。



八重山公園

はるか雲間に錦江湾のひろごるを

バスもとまりてひと休みする

重信国安 昭和三五年建立

国道三二八号線入来峠の大観峰

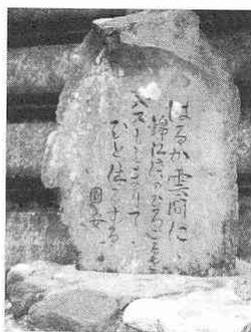
の石碑下に、この歌碑は建立され

ていたものを、近年国道沿いに移

設されている。建立当時は桜島の

頂上や錦江湾が遠望でき、木炭車

であえぎあえぎ登って来たバスは



入来峠

ここでエンジンを冷やしていた。乗客も一緒に一休みして、入来峠を下って行ったのである。戦後の省営バスから国鉄バスに変わったころの様子が思い出される。

幌馬車に送られし人送りし人

ともに老いつついずかたに住む

鬼塚正憲 昭和五七年建立

柿木平の郡山町と小山田町

の境、甲突の湯への入り口に

建てられている歌碑で、現在

のような車社会以前の懐かし

い情景が感じとれる。

三月は別れのときである。先

生と児童生徒、出征軍人と家族、親・兄弟友人たちが、別れがたい

気持ちで、村境まで送ってきたのである。そして、時が経ち、今

お互いどうしているだろうかと思ひあう。今はあつと言う間に見え

なくなってしまう。此の寂しさとはいかにも対象的である。



柿木平池田鼻

七百年今は局のみ命の

春は花咲き秋はもみじ葉

安田尚義 昭和二七年建立

県指定文化財の花尾神社社殿階段下に建立されている歌碑である

この歌は安田が昭和二七年一月二三日の一門の短歌会が花尾神社

開催された日に献歌として作り、神社に納めたものである。安田が

六八歳の時の歌である。かねて、献歌の歌碑を神社内に建立しよう  
と、今は亡き花尾の吉永繁氏が提唱、そのあと地元の氏子総代や町  
内の有志が発起人となり、町内外から広く浄財を仰ぎ、建立するこ  
とになった。

歌碑に使った石は、花尾石で石に刻まれた文字は、安田先生の直  
筆である。人の命と自然の悠久さをしみじみと歌い上げている。

八重山はわれらのふる里甲突の

せせらぎ落つる水上にして

鬼塚正憲 昭和五四年建立

上園の早馬公園に建つ歌碑である。春は桜の満開の下で花見も盛  
んである。八重山を常に心の支えふるさととして活躍された人であ  
る。八重山から湧き出す水は、鹿児島市の水源として、市民の喉を  
潤している。鬼塚氏は山茶花・潮音同人として活躍、短歌集に「一  
茎の葦」「峠路」「白衣終葛」などがある。

朱の扉厚く閉ざせる三柱の

美麗屋守る魁偉なる面

古陽

花鳥神社の拝殿の柱に掲げられている歌で、丹後局・源頼朝・僧  
永金の三柱を指すのであろう。美麗屋は、この花尾神社の社殿の日  
光東照宮に似て、極彩色の誠に美しい様、さつま日光とまで言われ  
ていることを言ったのであろう。これを護っている向拝の獅子や象  
また本殿入り口の阿吽の面や右大臣左大臣など、守護の姿を歌い上

げているようだ。

花尾神社の安田の歌碑



花尾神社境内

早馬公園の鬼塚の歌碑



早馬公園

### 第三節 ふるさとの唄・町歌・音頭・イメージソング

郡山町では、昭和四一年（一九六六）町制一〇周年記念事業として、式典を初め、郷土史編纂・「町制一〇周年の歩み」編集、併せて町章や町歌の制定などが行われた。また、平成九年（一九九三）四月一二日の町制四〇周年記念事業においては、郡山のイメージソングを広く呼びかけ、多数の応募の中から二曲が入選、式典当日披露された。これらの中には夏祭りやイベントなどで今も歌い継がれているものがたくさんある。

#### 郡山町歌

作詞 榎園徳蔵・学校教育振興会 作曲 麓 茂三郎

①みどりに映ゆる八重岳が 夢をよぶよぶ希望の町

みんな仲よく肩くんで 伸びよ伸びるよこのこだま

わが郡山 幸みてり

②甲突川の水上の 清い流れにみのる町

みんな元気に今日もまた はげむこの手にこの体

わが郡山 豊かなり

③自然のめぐみ人の和が 歴史を築きのびる町

みんな明るく語りつぎ 拓け拓けよこの力

わが郡山栄えあれ

#### 町 歌

みどりに はゆる やえだけが  
 ゆめをよぶよぶきぼのまち  
 みんななかよくかたくんでのび  
 よのびるよこのこだまわ  
 がこおりやまさちみてり

郡山音頭

作詞 徳永日出男 作曲 麓 茂三郎

①昔語りは今では夢よ 今じゃ団地を月照らす

愛の灯のつく窓々に 洩れる平和の笑い声

ガッツイ ヨカトコ郡山 ホンニ ヨカヨカ郡山

②往こか参るか花尾の宮へ かけた願いも今日解ける

踊り踊るならよく踊れ 昔の若衆の棒踊り

ガッツイ ヨカトコ郡山 ホンニ ヨカヨカ郡山

③甲突が流れて田圃は黄金 利鎌持つ手も心は軽い

明日も晴れかよ八重岳仰ぎよ みんな励めと夕日が笑う

ガッツイ ヨカトコ郡山 ホンニ ヨカヨカ郡山

郡山小唄

作詞 榎園徳蔵 作曲 麓 茂三郎

①雲があかねに朝日が昇りや 今日もやるぞと夜が明ける

胸を広げて青空望み 力いっぱい立ち上がる

サアサやるぞよ郡山 ホンニやるぞよ郡山

②澄んで流れる甲突川の 水の心で心を結ぶ

人は一万手と手を握り 元氣いっぱい汗流す

サアサやるぞよ郡山 ホンニやるぞよ郡山

③むらに平和の灯がつけば 感謝感謝の夕闇迫る

家族揃って夕餉につけば 明日の希望に花が咲く

サアサやるぞよ郡山 ホンニやるぞよ郡山

郡山さのさくずし

作詞 鬼塚正憲 作曲 土肥寛展

①ハアー 八重岳の 岩に湧く水 金の水

落ちて流れて 甲突の

水じゃ 黄金の穂が実る

水も豊かな郡山 サノサ

②ハアー 鈴の音に シャンシャン馬の 三味太鼓

今を昔に 咲く桜

早馬様には 村衆の

宴の酒に 花が舞う サノサ

③ハアー ゆらゆらと のぼる湯煙 湯の香り

川田温泉 赤い灯が

ともりや一夜の 甘い夢

お湯も豊かな郡山 サノサ

町商工会中心で、村おこしの歌もできた。昭和六三年（一九八八）八月の甲突池の水神祭で披露された。

郡山はなしぐれ

作詞 鬼塚正憲 作曲 土肥寛展

①ハアーエー 北に聳えるヨー

八重岳の 岩間真清水甲突の

池は見晴らす 大薩摩

②ハアーエー 稲の穂波にヨー

わく歌は 今年や豊年満作で  
香る湯煙 お湯の里

③ハアーエー 明日は働くヨー

旅の空 都通りに 甲突の

赤い灯影も 袖濡らす

④ハアーエー 昔鎌倉ヨー

丹後様 花尾の山に 恋の夢

しぐれの墓に 苔がむす

⑤ハアーエー いく世流れてヨー

甲突の あかね映して 桜島

心燃やして 心燃やして 山が鳴る

### 甲突池ガラツパどん

作詞 鬼塚正憲 作曲 土肥寛展

①八重岳の 岩間真清水 甲突の 池に穰むらかな水の音

水神様のお供して はねて踊ろうガラツパどん

②ヒーヒヨロロ 水を吸い吸い 杉桧 天に届いて山の月

今年や豊年満作だ お湯の里にも 金のお湯

③ヒーヒヨロロ 雨が続いて川下り ガラツパどんのお嫁入り

願かけたか 願かけろ 甲突池の水神様

④八重岳をせせらぎ流れ 鹿児島の 五つ大橋石の橋

夜は映えます赤い灯に 手拍子そろえて踊ろうよ

平成九年（一九九七）には、町制四〇周年記念として、町のイメー

ジソングがつくられ、記念祝賀会の場で披露された。

### 青と緑の宝箱

作詞 大迫真須美 作曲 村上芳樹 歌 R I S

①きらめく南の風を誘って 青と緑の 宝箱へようこそ

ごらん 緑揺らして風が吹く聞いて 竹が奏でるメロディーを

ふれて この水 青い恵みを

ここがふるさと この町で 楽しい事いっぱい作ってみようよ

きつと 心の宝箱 誰でも そつと開いてくれる

水が湧くよ 愛が湧くよ 流れ変えずに

青く 澄み切る この町だから

いつも あなたが そばにいるから く 繰り返し

②遠いあの日の夢をたどって 青と緑の 宝箱へようこそ

ごらん 昔遊んだ君がいる 聞いて 遙か緑の明日の歌

ふれて 笑顔で包む優しさ

ここがふるさと この町で 嬉しい事いっぱい作ってみようよ

きつと心の宝箱 誰でも そつと開いてくれる

夢が湧くよ 愛が湧くよ 熱いエールを

送りつづける この町だから

いつも あなたが そばにいるから く 繰り返し

### ふるさとの風

作詞 小川道雄 作曲 村上芳樹 編曲 岡崎勝美

①ふるさとの風が ほら呼んでいるよ

実りの丘も あのせせらぎも

ああ清らかな 水の流れよ

小鳥のさえずり いきいきと 見上げる山並み 空高く  
緑あふれる この町の 思い出いっばい 好きだから

②ふるさとの花が ほら咲いてるよ

歴史の里に 今ほのぼのと

ああ やすらぎに つつまれて

いで湯の香りの 温もりに 明るいロマンが きらきらと  
希望あふれる この町の みんなの笑顔が 好きだから

③ふるさとの夢が ほら広がるよ

恵みの里に いついつまでも

ああ ふれあいの ころろ優しく

しあわせ築いて 美しく 明日の木立よ すすくと  
大きく伸びゆく この町の 未来の 鼓動が 好きだから

### 郡山慕情

作詞 鬼塚あさ子 作曲 松山芳野里

①ゆらゆらと たなびく煙は 炭焼く煙

山にや ウグイス ソラ ホホホ ホ ケーキョウ

ソラ、ソラ、オジャハンカ ソラ 郡山

②さらさらと 清水流るる 甲突川の

奥じゃ 河鹿が ソレ のど自慢

ソラ、ソラ、オジャハンカ ソラ 郡山

③しらじらと 月が寒けりや 八重岳紅葉

妻が恋しの ソレ 男鹿啼く

④あかあかと 桜島から 朝日が昇りや  
村の文化が ソレ 動き出す

ソラ、ソラ、オジャハンカ ソラ 郡山



第五章  
年  
表



出典一覧

第五章  
年表

略称	史料名・書名・論文	編著者	発行	収載・所蔵
宇都	「宇都原遺跡」		郡山町	郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書 1
県遺	鹿児島県の遺跡分布地図及び遺跡地名表		鹿児島県教育委員会	平成14年県CD-ROM版(改訂)
湯屋	「湯屋原遺跡」	有川孝行 上杉彰紀	郡山町	郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書 2
常盤	「常盤原遺跡」	有川孝行	郡山町	郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書 3
書紀	日本書紀		吉川弘文館	国史大系
統紀	続日本紀		吉川弘文館	国史大系
寧楽	寧楽遺文		東京堂出版	
類聚	類聚国史		吉川弘文館	国史大系
後紀	日本後紀		吉川弘文館	国史大系
紀略	日本紀略		吉川弘文館	国史大系
京田	「京田遺跡」		鹿児島県立埋蔵文化財センター	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書81
文徳	日本文徳天皇実録		吉川弘文館	国史大系
三代	日本三代実録		吉川弘文館	国史大系
旧前	旧記雑録前編	伊地知季安・季通 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』
古城	薩隅日三州他家古城主来由記			鹿児島県立図書館蔵
季安	旧記雑録拾遺	伊地知季安	鹿児島県	『鹿児島県史料』
島津	伊地知季安著作史料集一～島津家文書			『大日本古文書』家わけ16
社伝	花尾社伝記			玉里文庫、鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集「伊地知季安と『秘伝島津譜図』『花尾社伝記』『花尾祭神輯』島津氏祖廟成立の経緯」五味克夫
国史	島津国史	山本正誼	鹿児島県地方史学会	
家三	旧記雑録拾遺家わけ三	伊地知季安・季通 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』
三国	薩隅日三国名勝図会	五代秀堯・橋口兼柄 編	新潮社	
系三	旧記雑録拾遺諸氏系譜三	伊地知季安・季通 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』
南北	南北朝遺文		東京堂出版	
家六	旧記雑録拾遺家わけ六	伊地知季安・季通 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』
伊由	伊集院由緒記		鹿児島県史料拾遺刊行会	『鹿児島県史料拾遺』15
花由	花尾山御由緒書			鹿児島県大学「玉里文庫」
埋文	埋蔵文化財発掘調査事業報告	有川孝行	郡山町教育委員会	
郡山	郡山郷土史 上下		郡山町	
人物	人物傳備考		歴史図書社	『新薩藩叢書』三
旧後	旧記雑録後編	伊地知季安・季通 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』
覚兼	上井覚兼日記			『大日本古記録』
家一	旧記雑録拾遺家わけ一	伊地知季安・季通 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』
高岡	慶長五年庚子冬高岡外城御取建之節伊集院より被召移候人数帳			高岡町史 上巻
木場	木場氏系図			有馬俊郎写(伊集院町立図書館所蔵)
旧追	旧記雑録追録	伊地知季安・季通 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』

出典一覧

高尾	高尾野町郷土史		高尾野町	
権現	花尾大権現宮御記録写			貴島家所蔵
藩法	藩法集 8 鹿児島藩			
要用	要用集(下)		鹿児島県立図書館	『鹿児島県史料集29』
朋党	文化朋党実録		鹿児島県	『鹿児島県史料 斉宣・斉興公史料』
斉彬	斉彬公史料	市来四郎 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』
画人	薩藩画人傳備考	井上良吉		
郷教	郷土史資料No. 12教育関係			郡山町教育委員会
忠義	忠義公史料	市来四郎 編	鹿児島県	『鹿児島県史料』
有馬	有馬源市手紙草稿(仮)	有馬源市		有馬俊雄所蔵(伊集院町立図書館写蔵)
道中	道中日記	上村得三		川島一蔵書(伊集院町立図書館写蔵)
廃寺	廃寺之節花尾山江仰渡之写			黎明館所蔵
学校	各学校沿革史			郡山小「郡山尋常高等小学校沿革史」明治36年 「創立80周年記念誌」昭和33年 南方小「創立百周年記念 三重岳」平成4年 常盤小「創立60周年記念誌」昭和27年
県史	鹿児島県史一～五巻		鹿児島県	
系代	木場氏系代図			木場聖子所蔵
近代	わが国における近代小学校の成立過程	井原政純		(副題)鹿児島県の郷校・小学校の研究
伊町	伊集院町誌		伊集院町	
入来	入来定穀日誌		串木野古文書研究会	串木野郷土資料集2
要覧	郡山小学校学校要覧			
日置	日置郡誌	鹿児島県日置郡役所	名著出版	復刻版
鹿新	鹿児島新聞		鹿児島新聞社	鹿児島県立図書館マイクロフィルム
鹿朝	鹿児島朝日新聞			鹿児島県立図書館マイクロフィルム
神社	鹿児島県神社誌	本田親盈 編		鹿児島県立図書館所蔵
報効	報効農事小組合概況	鹿児島県内務部	鹿児島県内務部	大正6年3月発行(中野哲二所蔵)
日報	鹿児島日報			鹿児島県立図書館蔵(マイクロ)
南日	南日本新聞		南日本新聞社	
広報	広報こおりやま(「町報」含む)		郡山村・郡山町	役場企画振興課
下伊	下伊集院村村会議録	下伊集院村議会事務局		伊集院町役場議会事務局
伊北	伊集院北地区郷土誌		伊集院北地区公民館	
記念	町制20周年記念誌「こおりやま」		郡山町	
文化	郡山町の文化財		郡山町教育委員会	
条例	郡山町条例		郡山町	
関東	関東郡山会関係資料	丸野充郎		
農林	日置地域農林業の動向		日置地域農政企画推進会議他	
森林	ひおき森林組合パンフレット		ひおき森林組合	
新報	鹿児島新報		鹿児島新報社	
教行	教育行政要覧		郡山町教育委員会	
吹上	吹上郷土誌		吹上町	

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			約520万年～164万年前 郡山でもっとも古い地層、仕明層ができる。重平フローラ(植物化石)を含む	
			約275万年前 郡山でもっとも古い火山岩、清浦安山岩ができる	
			約250万年前 宮脇火砕流が堆積される	
			約200万年前 湖成層の郡山層(植物化石・珪藻化石を含む)ができる。このころから寒冷化する	
			八重山地域で大きな傾動運動があり、運動の最中から後にかけて八重山・花尾山・三重岳が形づくられる	
			約100万年前 花野火砕流Ⅰが噴火堆積する。このころマツヤマ逆磁極期にあたる	
			約30万年前 加久藤火砕流が噴出堆積する。この溶結凝灰岩は郡山石となる	
			約10万年前 阿多火砕流が噴出堆積する。この堆積物は石塔や墓石に多用される	
旧石器時代			約2万5000年前 入戸火砕流の噴出による始良カルデラの出現。シラス台地ができる	
縄文早期			約6300年前 鬼界カルデラで大噴火が起こり、火砕流が襲う	
縄文早期～古代			里岳の「宇都原遺跡」:平碇式土器などの縄文早期から晩期の土器	宇都 県遺
			八重の「笹ノ段遺跡」:押型文土器と炉跡	
			東俣の「湯屋原遺跡」:石坂式土器など縄文早期の遺物多数。弥生時代から古代、中世までの遺物・遺構	湯屋
			常盤の「常盤原遺跡」:縄文早期の土器・石器、晩期の遺構、弥生から古代までの土器	常盤
646	大化2	丙午	大化の改新の詔を発す	
677	天武6	丁丑	2月 多禰島人等を飛鳥寺の西で饗する	書紀
682	天武11	壬午	7月3日 大隅・阿多隼人が朝貢し、朝廷で相撲をとり、大隅隼人が勝つ	書紀
692	持統6	壬辰	筑紫大宰に詔して僧侶を大隅・阿多に遣わし、仏教を伝える	書紀
694	持統8	甲午	藤原泉に遷都する	
698	文武2	戊戌	4月13日 質国使を南島に派遣する	続紀
701	大宝1	辛丑	8月 大宝律令が完成する	
702	大宝2	壬寅	「阿多隼人」に代わって「薩摩隼人」として文献に現れる	続紀
			8月 命令に逆らう薩摩と多禰に派兵して征討し、戸口を調べ役人(国司)を配置する。このころ、日向国から薩摩国が分かれる	続紀
			10月 唱更国(薩摩国の前身)の国司が国内の要害の地に柵を建てて兵と武器を置くことを申し出たので許可する	続紀
710	和銅3	庚戌	1月 隼人・蝦夷が正月の朝賀の式に参列する	続紀
			3月 平城京に遷都する	続紀
713	和銅6	癸丑	4月 日向国の肝環・贈於・大隅・始羅の四郡を割いて大隅国を設置する	続紀
714	和銅7	甲寅	豊前国の民200戸を移住させて隼人を導かせる	続紀
720	養老4	庚申	2月 隼人が大隅国守陽侯史麻呂を殺害する	続紀
			2月 大伴旅人を征隼人持節大將軍に任命する	続紀
723	養老7	癸亥	大隅・薩摩二国隼人等624人朝貢	
730	天平2	庚午	3月 大隅・薩摩両国は未だ班田を行わず、旧来のままとする	続紀
736	天平8	丙子	この年の薩摩国収支決算報告書「薩摩国正税帳」の断簡あり	寧楽
740	天平12	庚辰	藤原広嗣の乱起こる。広嗣自ら隼人軍を率いるが、隼人軍に混乱が起こり、広嗣軍敗走する	続紀
天平期 (729～748)			天平期(推定)の木簡「多禰嶋考六卷状六卷」(平城宮跡)「伊藍嶋」「穠美嶋」「甕嶋六十四斗」「薩麻頰娃」「桑原郡」「大隅郡」(以上大宰府跡)出土	
753	天平勝宝5	癸巳	唐僧鑑真和上坊津の秋目に来航	
755	天平勝宝7	乙未	5月 大隅国菱刈村の浮浪930余人、郡家を建てることを許される(菱刈郡の新設)	続紀
757	天平宝字1	丁酉	5月 養老律令が施行される	
764	天平宝字8	甲辰	1月 大伴家持を薩摩守とする	続紀
			12月 大隅と薩摩の境に煙雲・雷電が続き、甕嶋信爾(しなに)村の海に沙石が集まり、三島となる。島に埋められたのは62区、80余人(文献に「甕嶋」初見)	続紀
769	神護景雲3	己酉	9月 和氣清麻呂を大隅に配流する	続紀
778	宝亀9	戊午	12月 神護年間に大隅国の海中に出現した神造島の名を大穴持神と名づけ、官社とする	続紀
784	延暦3	甲子	11月 長岡京に遷都する	
788	延暦7	戊辰	3月4日 大隅国贈於郡の曾乃峯(霧島山)の上に火炎が立ち上り、沙石を降らせる	続紀
794	延暦13	甲戌	10月 平安京に遷都する	
800	延暦19	庚辰	12月 大隅・薩摩両国の百姓の墾田を収公して口分田を授ける(班田制の採用)	類聚
801	延暦20	辛巳	6月 隼人の朝貢を停止する	類聚
804	延暦23	甲申	大隅国桑原郡蒲生駅と薩摩国薩摩郡田尻駅の間が遠いので、薩摩郡樺野村に新しく駅を設置する	後紀
815	弘仁6	乙未	薩摩国蝗害のため田租調庸を免除される	後紀
824	天長1	甲辰	10月 多禰嶋司をやめて大隅国に隷属させる(多禰嶋、大隅国に併合)	紀略
850	嘉祥3	庚午	この年の年紀表記の木簡が薩摩川内市京田遺跡より出土する	京田
851	仁寿1	辛未	6月 賀紫久利神、官社に列する	文徳

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
860	貞観 2	庚辰	3月 (薩摩国)開開神・志奈尾(毛)神・白羽火雷神・智賀尾神・賀紫久利神・鹿児島神・伊爾色神に神階奉授され、 <b>智賀尾神は従五位下から従五位上に昇叙される</b>	三代
865	貞観 7	乙酉	5月 賀紫久利神に神階奉授	三代
866	貞観 8	丙戌	閏3月 応天門の変起こる 4月7日 開開神・賀紫久利神・紫美神に各神階奉授	三代
873	貞観 15	癸巳	4月 多夫施神に神階奉授	三代
874	貞観 16	甲午	7月 開開山頂噴火(指宿橋牟礼川遺跡埋没)、開開神に封20戸奉る	三代
882	元慶 6	壬寅	10月 開開神に神階奉授(薩摩国最高神階の正四位下)	三代
894	寛平 6	甲寅	9月 遣唐使が廃止される	
902	延喜 2	壬戌	3月 荘園整理を初めて令する	
997	長徳 3	丁酉	10月 南蛮賊、大宰管内諸国乱入(薩摩・大隅両国でも前後に人・物を奪取した記事散見)	紀略
1172	承安 2	壬辰	12月8日 入道西念、大蔵義平に譲り所領の四至を明示する(「由須乃木」「千加尾峯」など)	旧前
1185	文治 1	乙巳	3月24日 平氏が滅亡する 鎌倉幕府の創設した地頭登場 8月17日 源頼朝、惟宗忠久を島津荘下司に補任する 11月18日 島津荘領家、惟宗忠久を島津荘下司に補任する	旧前 旧前
1186	文治 2	丙午	4月3日 惟宗忠久、島津荘の下司職を改め地頭職に認められる	島津
1192	建久 3	壬子	源頼朝が征夷大將軍に任じられる	
1195	建久 6	乙卯	6月23日 加治木八郎親平は源頼朝からの下文により満家院の領知を許される	古城
1197	建久 8	丁巳	院司満家郡司業平は満家院の寄郡百三十町を領有する 満家郡司、翌年3月までに上洛し、内裏大番を果たす。	島津
1198	建久 9	戊午	6月 薩摩・大隅の国衙が「建久凶田帳」を注進する 12月3日 惟宗忠久、薩摩・大隅両国守護に補任される	島津 旧前
1203	建仁 3	癸亥	2月22日 島津(惟宗)忠久、満家院郡司名田他の地頭職を任じられる	旧前
1205	元久 2	乙丑	9月 比企能員の縁により、島津忠久は薩摩・大隅・日向の守護職と島津荘惣地頭職を没収される	旧前
1213	建暦 3	癸酉	島津忠久が薩摩国守護に再任される	旧前
1218	建保 6	戊寅	7月10日 島津忠久が島津荘薩摩方惣地頭職に再任される	旧前
1221	承久 3	辛巳	この年花尾権現社創建される。また、傍らに花尾山平等王院が建立され別当寺となる。 9月、僧永金、厚地山権現(花尾社)に地頭惟宗忠久、満家院司大蔵幸満らの息災延命を祈願し、掛仏銘を寄進すると伝わる。	旧前
1227	安貞 1	丁亥	満家郡司大蔵幸光、承久の乱で上皇方に味方し行方不明となる 8月21日 新田宮御放生雑事に満家院から道六段・騎兵一人など勤仕を命じられる	季安 旧前
1228	安貞 2	戊子	12月12日 丹後局没し、花尾社に葬ると伝わる。	旧前
1232	貞永 1	壬辰	加治木良平、兄美平より郡山村を譲られ、建治元年(1275)まで用平・氏平と知行する	季安
1233	天福 1	癸巳	8月 御成敗式目を制定される	
1236	嘉禎 2	丙申	10月2日 満家院のうち比志島・西俣・城前田・上原菌・河田名が榮尊の母大御前(善薩房)に与えられる	旧前
1240	仁治 1	庚子	9月15日 前年に榮尊から訴えられた大輔房浄尊は、比志島・河田の日吉社上分稻五十束蒔田跡の農料について、反別三束を返すよう命じられる	旧前
1242	仁治 3	壬寅	8月22日 比丘尼善薩房・生阿弥陀仏は、出挙物の代として満家院西俣名内八世井浦田島を誓尾(智賀尾)六所権現に去り渡す	旧前
1244	寛元 2	甲辰	7月 中公書状(かつさのほげふの御房宛)※ 7月15日 重賢(榮尊)、満家院司税所義祐から比志島・西俣・河田・城前田・上原菌の知行を認められる	旧前
1245	寛元 3	乙巳	12月11日 重賢、幕府から比志島・西俣・河田・城前田・上原菌の知行を承認される	旧前
1247	宝治 1	丁未	12月23日 重賢、六波羅施行状により比志島など五箇所の知行を認められる 3月11日 重賢、母善薩房から比志島・河田・西俣・城前田・上原菌の五ヶ名の名主職を譲られる	旧前
			6月22・23日 重賢、起請文にて知行名田の配分を約す	旧前
			8月11日 重賢、比志島など五箇所の名主職相続を島津忠時に安堵される	旧前
			9月 重賢、惣地頭島津忠時に万雑公事地利物の賦課免除を訴え、認められる	旧前
			10月29日 重賢、関東御教書により比志島など五箇所の領知を認可される	旧前
			11月22日 島津忠時、重賢訴えの日吉上分稻について下文	旧前
			12月19日 税所義祐、満家院の郡司得米分50石を巡り島津忠時と争う	旧前
1250	建長 2	庚戌	12月 西俣名主重賢(榮尊)、母比丘尼らの孝養に辺牟木山の木を払い草堂を建立するため、万雑公事などの諸役の免除を願い出て認められる	旧前
1251	建長 3	辛亥	2月 重賢、辺牟木山の四至を明記して堂を建てる旨許可される	旧前
1253	建長 5	癸丑	5月 重賢、西俣の島地を巡り、中河名主兵衛丞時村の押領を守護に訴える 7月10日 重賢、比志島・河田・西俣・城前田・上原菌の満家惣地頭を嫡子太郎祐範に譲り渡す。西俣内八世井浦田島山野・平原居屋敷・河田内柿本一町・菌一ヶ所・小山田内上原菌一ヶ所の名主職を譲り渡す	旧前

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			7月10日 重賢、河田名代官を三男宮次郎に譲る。その内孫江田3反・元明居屋敷を四男乙二郎に領知させる 西侯名代官を弥三郎守忠に譲る。辺牟木木場山口田5反は乙万に領知すること	旧前
1254	建長 6	甲寅	閏5月4日 栄尊、藤原義弘(税所義祐)へ先の和談で確定した地の去文を渡す	旧前
1262	弘長 2	壬戌	8月11日 比志島太郎、京都大番役勤仕を命じられる	旧前
1264	文永 1	甲子	正月2日 比志島太郎、島津忠時より6ヶ月の京都大番役勤仕を命じられる 花尾神社の上宮・下宮を新しく建てると伝わる。	旧前 社伝
1267	文永 4	丁卯	12月19日 幕府が満家院など島津長久の領知を認める	旧前
1272	文永 9	壬申	6月24日 河田盛資、比志島祐範の代理として7月25日まで博多津で番役を勤める	系三
1274	文永 11	甲戌	10月 蒙古の襲来「文永の役」	
1277	建治 3	丁丑	正月27日 比志島太郎祐範、島津久時に比志島・西侯・河田・前田(城前田か)4ヶ名分の管崎役所築地5丈1尺4寸が完工した旨を知らせる 5月10日 満家院郡司税所義祐は東侯の田畠・在家・山野などについて満家院地頭島津忠時後家尼代子息長久と加治木郡司氏平を訴え、その件で御教書を受け取る 10月7日 中沼長久、税所との相論の件で関東御教書の内容に従い返済することを申し述べる	旧前 家三
1280	弘安 3	庚辰	4月1日 管崎の薩摩国の結番を終える(10月～)	家三 旧前
1281	弘安 4	辛巳	5月 蒙古の襲来「弘安の役」 5月1日 河田盛資、異国警固管崎番役を終える(2月2日～) 6月29日 比志島時範・河田盛資・辺牟木義隆ら老岐島において蒙古軍を討つ 閏7月7日 比志島時範ら、鷹島において奮戦する	旧前 旧前 旧前
1284	弘安 7	甲申	閏4月21日 比志島太郎、管崎石築地の勤仕を終える 8月 比志島重賢、満家郡郡司職に任じられる 11月19日 沙弥導願、孫の彦三郎丸(忠範)に比志島・河田・西侯・城前田・上原菌の名主職を譲渡する	旧前 旧前 旧前
1285	弘安 8	乙酉	1月1日～4月晦日 比志島入道祐範、代官を管崎の警備に遣す 10月25日 島津長久代沙弥静信、満家院郡司職と郡山以下の村々の領知を巡り税所篤秀の押妨を申し述べる	旧前 旧前
1288	正応 1	戊子	5月 川田忠利が管崎の石築地の「裏加佐」を終える 6月7日 税所篤秀は得分米50石・厚智寺巻誦用途3貫文他を地頭方(島津氏)に支払い、郡山中侯以下6か村下地について和与する	家六 旧前
1289	正応 2	己丑	12月15日 西侯又三郎、3ヶ月の要害警固役を終える	旧前
1290	正応 3	庚寅	12月15日 比志島忠範、要害警固番役を命じられる	旧前
1291	正応 4	辛卯	5月27日・6月24日 大隅国吉原又次郎俊平が比志島・西侯など知行をめぐり、忠範を訴える 12月23日 西侯六郎、要害警固役の勤仕終える	旧前 旧前
1293	永仁 1	癸巳	6月13日 比志島忠範、関東に遅参の旨申し述べる 12月晦日 比志島忠範、3ヶ月の警固番役を終える 島津忠宗により花尾神社の廟堂が修理されると伝わる 鎮西探題を置く	旧前 旧前 三国
1294	永仁 2	甲午	比志島太郎代河田盛資、6月から7月までの博多津番役を終える 西侯又七郎、5月から7月までの警固役を終える	旧前 旧前
1297	永仁 5	丁酉	川田盛資が父比志島重賢や祖父村上頼重の菩提を弔い川田に供養塔群を建立する(川田堂園の供養塔群)	
1298	永仁 6	戊戌	12月1日 比志島忠範の代官、警固番役を終える	旧前
1299	正安 1	己亥	8月 忠範、比志島・河田・西侯・城前田・上原菌の名主職を嫡子彦一丸に譲る	旧前
1306	徳治 1	丙午	正月27日 伊作宗久が忠範の領地に数百人を侵入させ、稻374束米134余石錢13貫文小袖18その他資財など略奪し、下人に暴行を加える。城前田の支配権で争論する	旧前
1310	延慶 3	庚戌	12月15日 忠範、警固番役の勤めを終える	旧前
1312	正和 1	壬子	6月10日 僧榮秀、前田名の守護の押領を鎮西探題に訴える	旧前
1313	正和 2	癸丑	7月・11月 城前田を巡り比志島忠範が守護の島津忠宗を訴え、鎮西探題は忠宗に出頭を度々求める 9月10日 上原三郎と中侯弥四郎の相論について守護代沙弥本性の裁許状※ 11月21日 比志島忠範と河田右衛門太郎妻女源氏女代義行は、河田名柿本の田・菌の相論について和与を交わす 12月 比志島忠範と西侯久盛、西侯名に課せられた石築地役などの相論について和与を交わす	旧前 旧前 旧前
1314	正和 3	甲寅	10・11月 城前田について忠範と島津忠宗相論のこと※	旧前
1315	正和 4	乙卯	4～5月 正八幡宮修理の費用として比志島・西侯・河田の分が番匠大工に1貫421文、檜皮大工に4貫903文納められる 5月12日 辺牟木房禪慶、延慶4年秋までの借米について比志島忠範から訴えられ、2倍の返済を命じられる	系三 旧前

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
1316	正和 5	丙辰	4月25日 正八幡宮造営に付、比志島・西俣・河田三ヶ名分の勤めの内容について申請※ 6月23日 比志島孫太郎と沙弥道助(国久)出挙・預米の訴訟に和与成立 6月23日 比志島忠範、嫡子義範に満家院のうち比志島ほかを譲る 7月 このころ、薩摩国御家人交名注文に満家院7人の記録 9月14日 比志島名分の宇佐弥勒寺用途と米が届けられる 9月19日 大隅大炊助三郎久国法師代忠幸と比志島忠範の相論	旧前 旧前 旧前 旧前 旧前
1317	文保 1	丁巳	4月23日 河田代教義、西俣代某、比志島代僧源口、正八満宮造営修理に携わる 6月23日 比志島忠範、伊集院忠親と出挙米、預米についての相論で、忠親の博多代官大隅忠幸と和与状を交わす	系三 旧前
1322	元亨 2	壬戌	5月3日 平田行秀(税所氏か)は上原基員より上原菌を安堵される 6月 和泉実忠、満家院惣地頭職に任じられ、津性を代官とする。比志島忠範との間の刈麦の論争で探題に訴える	旧前
1324	正中 1	甲子	2月22日 河田名地頭職在任中の島津(伊作)久長による損害を訴えていた源祐清は、金銭の受け取りで和解する 8月23日 比志島忠範、伊集院忠国に負物の件で訴えられる	旧前 旧前
1326	嘉暦 1	丙寅	7月21日 満家院雑掌による所務年貢訴状について鎮西御教書 9月4日 造勝長寿院・建長寺唐船勝載物を京都へ運送する兵士の用意をするようにとの鎮西御教書 10月 入来院地頭代貞雄と比志島孫太郎入道佛念代義範の相論	旧前 旧前 旧前
1327	嘉暦 2	丁卯	6月10日 比志島忠範、伊集院忠国から借用した50貫文を返済する 閏9月 満家院雑掌年貢の訴訟について重ねて陳情する※	旧前 旧前
1328	嘉暦 3	戊辰	7月 比志島彦太郎義範、河田道教の扶持人・領内百姓が負累米・銭を弁済しない事を川田氏側の守護(島津氏)を越え幕府に提訴する 12月20日 地頭代栄秀、比志島名地頭方水田目録を注進する	旧前 旧前
1329	元徳 1	己巳	8月 僧快善、逆修の月輪塔を建てる(花尾神社)	
1331	元弘 1	辛未	10月 比志島彦太郎義氏、召人姫太郎の男子を預かる 10月 比志島義範、京都騒乱(元弘の乱)に上京する	旧前 旧前
1333	正慶 2	癸酉	閏2月15日 比丘尼せうあん、油須木村の在家・田などを26貫・7年限りで上原房阿弥陀仏の息女に売却する 5月 鎌倉幕府が滅亡する。鎮西探題も廃止される 8月10日 比志島義範、文書目録を持参して上京する	旧前 旧前 旧前
1334	建武 1	甲戌	5月 比志島義範、相伝の所領の内山田一町竹内(中)屋敷一所を伊集院大隅助三郎忠国が返すよう「御牒」を求める申状を建武政府に送る	旧前
1335	建武 2	乙亥	3月1日 比志島彦太郎義範、内裏大番を勤める 3月27日 上原三郎久基・比志島彦太郎義範、満家院の小山田・油須木・東俣・比志島の年貢を佛身寺から請け負う 3月27日 建武元年分の佛身寺領の東俣・油須木・比志島の年貢合5貫文が納入される	旧前 旧前 旧前
1336	延元 1 建武 3	丙子	2月27日 建武2年分の佛身寺領満家院内の年貢合1貫文が納入される 3月 比志島義範・小山田景範、多々良浜合戦に出陣する 4月27日 比志島貞範、肝付兼重との戦いに参陣する 5月25日 郡山頼平ら大隅の加瀬田城攻めで、夜に水塞を破り、功をたてる。比志島義範は戦死する 9月 上原三郎久基、所領内で狼藉を働く猿渡新左衛門尉秀雄の子息犬丸について申し述べる 12月23日 比志島彦一(範平)に敦賀津凶徒討治に向かうよう足利直義の下文	旧前 旧前 旧前 旧前 旧前 旧前
1337	延元 2 建武 4	丁丑	3月22日 守護代酒匂左衛門尉久景、比志島において兵を徴し、翌23日、比志島彦一丸範平(忠経)は庶兄孫三郎範経を遣わし救援する 5月25日 比志島彦五郎義範、武家方に加わり兵庫で戦死する 7月28日 比志島孫三郎範経(忠経)、市来時家との戦いに臨む 8月10日 比志島少輔御房、島津貞久より吉野凶徒退治の出兵を要請される 9月2日 比志島彦一丸(範平)、軍忠の感状を足利尊氏から与えられる。また、父義範の討死など、忠節の恩賞として満家院の内当知行分の油須木4町を安堵される 9月晦日 比志島孫三郎範経、市来城の攻防にて戦死する 10月18日 夜寅刻に比志島城の範平、矢上左衛門五郎高澄から攻撃。翌19日に吉田清秋・向左右衛門三郎の救援により比志島城は堅守 12月12日 税所介教直代忠直より祖父正恵遺領として満家院郡司職と田畠山野以下安堵のところ、その真偽を確認する申請あり	旧前 旧前 旧前 旧前 旧前 旧前 旧前 旧前
1338	暦応 1	戊寅	8月 入来院重知は伊集院忠国から「伊集院之内西俣」を預かる	家三
1340	興国 1 暦応 3	庚辰	7月 比志島彦一丸代椎原次郎惟種、入来院淵上上原における合戦の軍忠状	旧前

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			12月18日 東福寺城攻防の際、帰郷した満家院の将兵に対し、貞久は比志島彦一に再出兵の書を送る	旧前
1341	興国 2 暦応 4	辛巳	7月7日 郡山弥五郎(頼平)ら、島津貞久より薩摩国凶徒退治の派兵要請を受ける	旧前
1342	興国 3 康永 1	壬午	5月 懐良親王が宮方の勢力増強に谷山へ入る。 10月16日 満家院一族(比志島氏※)、伊集院土橋城警固の日限に遅参する	南北 旧前
1343	興国 4 康永 2	癸未	9月12日 島津貞久率いる比志島範平・辺牟木又太郎入道頼秀ら備馬楽城を囲み、11月7日夜襲により陥落。矢上高澄は城を捨てる 辺牟木又太郎頼秀、備馬楽城攻めで戦死する	旧前 旧前
1346	正平 1 貞和 2	丙戌	2月12日 中院法印ら揖宿郡の要害に構え路次を防ぐ。島津貞久、比志島彦一に書を送り、救援の派兵を要請する 5月18日 南方凶徒、東福寺城に忍び入るとの情報に、貞久は比志島彦一に夜警のため軍勢3人差し向けるよう要請する 6月1日 島津貞久、川辺郡高城に凶徒聚集の情報を下人から得、満家院の人々に参陣するよう要請する 9月21日 島津貞久、郡山弥五郎頼平に郡山城を治めさせる	旧前 旧前 旧前 旧前
1347	正平 2 貞和 3	丁亥	1月7・20日 島津貞久、比志島彦一に書を送り、(谷山)隆信の城に入った南方の凶徒に対する救援を要請 2月1日 島津貞久、比志島彦太郎と同心の西俣弥平治に書を送る	旧前 旧前
1348	正平 3 貞和 4	戊子	2月30日 比志島名水田山野の3分の1を上原・義範後家両人が貞範に分け与える。彦一と同心を以て所領とする契約を交わす 11月16日 島津貞久より比志島孫太郎・西俣弥平三・河田助太郎に楡井四郎頼仲退治の出兵を要請する 11月21日 満家院一族へ、元弘以後新恩地以下年貢の奉書について、散状を提出するよう施行状が出される	旧前 旧前 旧前
1349	正平 4 貞和 5	己丑	1月26日 島津貞久、薩摩国合戦で比志島彦一(範平)に度々出兵を催促する 8月18日 島津貞久より比志島彦一(範平)へ、大隅の攻防での早い参陣を賞す	旧前 旧前
1350	正平 5 観応 1	庚寅	4月16日 畠山直頼より西俣弥平三へ、大隅国攻防での早い参陣を要請する 5月23日 比志島彦一、島津貞久より上山城攻めの早い参陣を要請。また、孫太郎にも参戦するよう書き送る 8月18日 伊集院道忍(大隅助三郎)ら、郡山頼平の守る郡山城を囲む。小山田景範・比志島貞範らの救援で道忍一時撤退後、再び攻める。頼平、城を捨て逃げる 8月21日 島津貞久、比志島彦一へ西俣・郡山の落城と今後の城の守りについて書状を送る 8月21日 大蔵頼平、軍忠状を貞久に送る 8月23日 島津貞久、伊集院忠国側に包囲された東俣城の比志島彦一に援軍の派遣を約し、城の堅守を命じる 9月 永金、毘沙門堂を巽の方角に建て、伽藍を護ると伝わる 12月27日 西俣氏、足利直冬より戦功について感状を受ける	旧前 家六 旧前 旧前 旧前 旧前 社伝 旧前
1351	正平 6 観応 2	辛卯	5月 比志島彦太郎範平、在府の文書奉行所に進上する 6月5日 足利直冬、比志島彦太郎範平の忠節に感状を出す	旧前 旧前
1352	正平 7 文和 1	壬辰	3月8日 一色道猷、西俣氏に足利直冬ら凶徒退治を要請する	旧前
1353	正平 8 文和 2	癸巳	5月18日 島津貞久、比志島範平に東福寺城の守りに軍勢3人を派遣するよう要請する 5月18日 比志島名地頭職の3年分地頭米他地頭得分以下検断万雑公事をとどめること	旧前 旧前
1355	正平10 文和 4	乙未	10月19日 比志島名地頭職の翌年より3年分の地頭米・細々地頭得分以下検断万雑公事をとどめること※	系三
1356	正平11 延文 1	丙申	10月25日 比志島範平、岩屋城攻めに参陣する	旧前
1357	正平12 延文 2	丁酉	1月21日 三条隆季より比志島範平の粉骨負傷の件について一見状を受ける※ 4月 比志島範平、昨年来の参戦と負傷を述べた軍忠状を出す 4月15日 西俣兵衛尉、島津氏久より大隅国へ出兵するよう命じられる 4月28日 島津氏久、比志島範平に大隅国肝属郡内木志良村地頭弁分と羽見村地頭職を兵粮料所所宛行し、一族に分配させる	系三 旧前 旧前 旧前
1360	正平15 延文 5	庚子	2月11日 五代久氏、満家院中俣名内すいてんしもしんかい7反・ゆの木のまろ3反、ほりのうちその一所を知行する	旧前
1361	正平16 延文 6	辛丑	氏久が花尾神社の廟堂を再興すると伝わる	三国

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
1363	正平18 貞治 2	癸卯	5月6日 伊集院忠国ら、満家院小山田名水田5町と菌ヶ所を永代で円勝寺に寄進する	旧前
1371	建徳 2 応安 4	辛亥	氏久が花尾神社の廟堂を修繕すると伝わる	三国
1374	文中 3 応安 7	甲寅	8月22日 比志島範平、嫡子久範に満家院の内比志島名・西俣・河田・城前田・上原菌の惣領職を譲る。また、比志島名の水田を犬一丸に譲る	旧前
			11月22日 伊集院久氏、満家院の内蒲原村(現小山田町)を犬太郎の母に一期譲る	旧前
1375	天授 1 永和 1	乙卯	3月14日 比志島久範、島津伊久の満家院内13町の名主職について、京都へ挙状を送る	旧前
			8月11日 善喜、猶子比志島久範に伊集院の内中河名・中山田1町居屋敷分、麦生田名内はいらく・前原、神殿内柳田1町を譲る	旧前
1376	天授 2 至徳 2	丙辰	春海上人、島津伊久の命により、大般若経十二部を花尾平等王院にて読み、誓願を立てる	社伝
1378	天授 4 永和 4	戊午	11月19日 比志島久範、伊集院久氏から比志島名地頭職給分を知行する事の確認※	旧前
1384	元中 1 至徳 1	甲子	3月25日 花尾神社の当山座主大禪師影相建(追)善の宝篋印塔が設置される	
1385	元中 2 至徳 2	乙丑	12月 比志島範平、嫡子久範に比志島名の内おきのくほ2反など譲る	旧前
1399	応永 6	己卯	7月12日 比志島義勝、比志島名の石原田など名田を徳雲寺に寄進する	旧前
1402	応永 9	壬午	冬 島津久豊の諸臣が一乗院の賢範上人に請い、平等王院にて灌頂を受ける	社伝
1404	応永11	甲申	8月22日 伊集院頼久・熙久、廣濟寺に満家院二町小山田他を寄進する	旧前
1406	応永13	丙戌	12月5日 島津頼久、川田義尹に満家院中のまたのうち、ふちの上の水田1町5反を永代に譲る	家六
1408	応永15	戊子	4月13日 伊集院頼久、伊集院持丸名辺牟木門水田他を廣濟寺に寄進する	旧前
			10月11日 比志島義勝、島津元久に従い平佐城攻めに参戦、落城を報告する	旧前
1411	応永18	辛卯	川田氏、島津久豊に従い平等寺に陣営を構え、比志島氏と共に島津久世・忠朝に対抗する	旧前
			11月27日 島津久豊は比志島・河田・西俣の三氏へ郡山の代として大隅国下大隅市成名を預け置く	旧前
1412	応永19	壬辰	2月15日 比志島久範、島津久豊より油須木村を料地として宛行われる	旧前
			8月 秩父季豊、比志島城・川田城・郡山城の緞初を行う	季安
1413	応永20	癸巳	11月12日 河田右衛門尉・小山田範清・前田範国ら、伊集院頼久と原良で交戦する	旧前
			12月7日 比志島久範、伊集院氏と交戦。8日 仁叟・郡山源左衛門尉・竹下範春・川田助四郎・小山田又九郎・前田源五郎が戦死する	旧前
			12月13日 川田義清、島津久豊に従い伊集院頼久の軍勢と四郎が坂で戦う	旧前
1414	応永21	甲午	1月2日 伊集院頼久、小山田範清の居る小山田城を攻撃。城側は大迫野首に出て応戦し、伊集院軍を退ける	旧前
			3月15日 島津久豊、比志島久範に書を遣わして、子孫に至るまで満家院との信頼関係を誓う	旧前
			3月23日 島津久豊、過去の伊集院方への知行分に関して変節しないことを比志島久範に誓う	旧前
			島津久豊、平等寺(麦生田)にて久世・忠朝・市来家親らと伊集院頼久を討つ約束をしたが、破約のため逃走。暮れに満家の民が頼久軍の馬・兵器を奪い取らんとしたので、頼久退く	旧前
1417	応永24	丁酉	9月20日 清色(入来院渋谷氏)、伊集院頼久より薩摩国満家院中俣・西俣など宛行われる	旧前
1419	応永26	己亥	久豊により花尾神社の廟堂が修理される	三国
1420	応永27	庚子	2月3日 伊集院頼久、満家院郡山名のうち常葉門の水田など計2町2反を圓通庵に永代寄進する	旧前
1422	応永29	壬寅	8月18日 伊集院頼久、満家院内寂照庵の遺跡田畠を廣濟寺の長老崇悟西堂に譲る	旧前
1423	応永30	癸卯	10月3日 嶽小山之下、田平熊野三所権現が修築される	伊由
1427	応永34	丁未	10月29日 比志島久範、嫡子義清に比志島・西俣・河田・城前田・上原菌と安堵御教書などの文書を譲る。但し比志島内水田菌を少しづつ兄弟に譲ること	旧前
1432	永享 4	壬子	5月15日 島津忠国、比志島義清に二心無しの起請文をおくる	旧前
			6月1日 比志島義清、嫡子犬丸丸に比志島・西俣・河田・城前田・上原菌の惣領職を安堵下文など添えて譲る	旧前
1434	永享 6	甲寅	6月26日 有屋田有久がかつて廣濟寺に寄進した薩摩国折原名内今寺・林菌・山内辻3ヶ所が欠所となり、伊集院為久(熙久?)より改めて廣濟寺に証文を送る	旧前
1435	永享 7	乙卯	川田三郎太郎義清、津奈木にて討死する	旧前

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
1438	永享10	戊午	福昌寺仏殿造営の勸進に比志島義清・小山田元平・河田紹顕は馬一匹の代銭に1貫文を贈る	旧前
1441	嘉吉1	辛酉	11月22日 藤原太郎兵衛ら、嶽の田平熊野三所権現を修築する	伊由
1446	文安3	丙寅	12月9日 比志島義清、孫立頼に比志島・河田・西俣・前田・上原菌の惣領職を調度、文書などと共に譲る この頃、平等王院の脇坊が12に減じる	旧前 花由
1459	長祿3	己卯	2月3日 島津立久、比志島義重に平山氏の謀反を取めるよう要請する。翌日刃牟木・東俣・前田などに告げる	旧前
1466	文正1	丙戌	6月5日 里岳に「妙徹」の刻を残す宝篋印塔(福留家)	
1467	応仁1	丁亥	1月 応仁の乱が起こる	
1474	文明6	甲午	8月 村田肥前守経安、郡山に一城を持ち、領主となる	旧前
1477	文明9	丁酉	閏1月 島津季久、比志島義重の居る比志島城を一軍で包囲、3月14日 村田・和泉らの救援で城を守る	旧前
1485	文明17	乙巳	2月2日 河田立昌は島津忠廉の攻撃から川田城を守る。11日 800余を率いて上之原に陣を張る村田経安は、200人の島津忠廉軍に撃破される	旧前 家六
1488	長享2	戊申	4月28日 土橋五郎九郎、比志島の門水田土橋門八反所當の請文	系三
1491	延徳3	辛亥	3月27日 村田経安、一之宮神社を再興する(棟札)	三国
1494	明応3	甲寅	忠昌は大檀主として花尾神社の社殿を新造する。この頃花尾社は三坊のみ有す	社伝
1495	明応4	乙卯	7月 村田経安、無礼を理由に島津忠昌に殺される 比志島美濃守義信、父義重より郡山の横瀬・宇都・坂口・満枝など20町を譲られる この頃、平等王院の脇坊が3に減じる	系三 花由
15世紀中			八重の「屋形遺跡」:青磁、滑石製石鍋、土師皿など中世の遺物	埋文
1504	永正1	甲子	2月14日 島津忠昌の初めての正八幡宮社参に侍した比志島源左衛門尉・川田十郎らの共と鑓・弓・太刀など道具類の内訳を記す 島津忠昌、平等王院の住職を快諭法印から俊誉に代える	旧前 社伝
1506	永正3	丙寅	4月 智賀尾神社の御神体にこの年の刻あり	三国
1508	永正5	戊辰	智賀尾神社、この年に現在の里嶽に遷宮か	三国
1513	永正10	癸酉	12月5日 大川寺の開山、大通徳光禪師(竜室)没す	三国
1514	永正11	甲戌	12月15日 郡山・有屋田名・西俣名・東俣名・河田が下谷口村諏訪明神(現伊集院町南方神社)の祭礼に奉仕していることが確認される	伊由
1519	永正16	己卯	2月21日 平山武紹ら、「智賀尾六所権現」の額を奉納する	伊由
1531	享祿4	辛卯	2月19日 島津勝久、平等王院に鹿児島郡築山を寄進する 3月8日 島津勝久、満家院東俣大平木場を今までと同じく平等王院に寄進する。平等王院の厚地の四至内の執務を快諭に認める	旧前
1535	天文4	乙未	10月3日 島津勝久、入来院重朝の功績に対し郡山・隈之城の所望の地を与える	旧前
1536	天文5	丙申	比志島義住、藤ヶ山(後、中福良に移す)に稻荷神社を創建する 3月7日 島津忠良と貴久、島津実久側の町田久用が守る伊集院城を攻略する 11月28日 有屋田氏ら、島津忠良側につき伊集院神殿屋を守る	郡山 旧前
1537	天文6	丁酉	3月14日 島津勝久、入来院重朝の軍忠を賞し、満家院のうち郡山城と30町の地を宛行う	旧前
1539	天文8	己亥	3月 比志島義弘、比志島村に日吉山王宮を創建し、宗廟として奉る	系三
1540	天文9	庚子	11月21・22日 島津貴久、伊集院にて犬追物を催す。比志島孫太郎(義弘)、二匹射る 11月23日 犬追物手組の中に河田飛驒守(1疋)、喚次比志島彦三郎の名あり	系三 旧前
1543	天文12	癸卯	8月25日 ポルトガル人により種子島に鉄砲がもたらされる この頃、有屋田久耕が有屋田の南方神社を創建する	伊由
1544	天文13	甲辰	渋谷党の入来院重朝、乱を企てた咎により、領知していた伊集院の郡山庄を削られる	旧前
1545	天文14	乙巳	4月16日 有屋田久親、有屋田名鎮守宝殿を造営する 8月8日 島津貴久、入来院重朝の郡山城を攻め落とす。野間貴庵は「太刀始」を務めた功により麦生田字下木原を賜る 11月16日 稻荷神社の御正体板面にこの日付と「地頭比志島美濃守源義住」とあり	伊由 旧前 伊由
1549	天文18	己酉	7月 ザビエルが鹿児島に上陸する	
1550	天文19	庚戌	12月19日 貴久、鹿児島内城に移り、島津氏が戦国大名となる	旧前
1553	天文22	癸丑	2月24日 伊集院地頭島津孝久、智賀尾六所権現に島津貴久の息災延命、武運安全などを祈願する 5月19日 島津貴久、花尾権現上宮社を新造し、この日落成する 11月1日 比志島義住、郡山城にて戦死する(72歳)	伊由 社伝 旧前
1554	天文23	甲寅	9月14日 入来院氏との岩剣城の戦、貴久側の郡山衆28名は蒲生郷新留にて敵8人を討ち取る 10月2日 比志島義弘、岩剣城にて参戦。家臣10人と共に戦死する。後に義弘の霊に奇瑞ありと比志島村に小鷹大明神という祠が建てられる このころ連歌師村上雲齋(比志島彦四郎義正)、「法橋」の位を賜い、紹巴と並び称される	旧前 旧前 系三 人物

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
1555	弘治1	乙卯	5月21日 郡山に(蒲生より?)落人ありとのこと 6月3日 東侯の足軽13人が入来のはるといふ村で敵8人を討ち取り、吉田へ参上する 8月12日 郡山衆入来へ山を越え、敵一人と持ち具足55を奪う※ 8月23日 郡山より入来へ入り、敵三人討ち取り、一人生け捕る 12月28日 郡山の足軽、入来塚で敵一人討ち取る 12月 島津貴久・義久が大檀主として花尾社の宝殿一字を造立する。村田経定を地頭とする	旧後 旧後 旧後 旧後 旧後 社伝
1556	弘治2	丙辰	3月 蒲生城攻めに比志島義鎮・河田義朗ら参戦する 11月6日 東侯・厚地に敵が来襲し、義久方の兵2人が討ち取られる 島津貴久、清水に大乘院を建て、厚地村を与える	旧後 旧後 三国
1557	弘治3	丁巳	4月17日 西侯出羽ら、蒲生氏より島津氏へ和議に遣わされる 比志島国真、蒲生地頭となる	旧後 旧後
1561	永祿4	辛酉	川田の諏訪神社が再興される(棟札)	
1563	永祿6	癸亥	川田の諏訪大明神社(南方神社)にこの年の棟札あり	三国
1570	元龜1	庚午	1月 島津義久、入来院・東郷氏を抑え、薩摩国を平定する	旧後
1572	元龜3	壬申	島津氏が木崎原の合戦で伊東氏を破る	旧後
1574	天正2	甲戌	11月 伊集院忠棟は郡山に代わり北村(現蒲生町)を与えられる	覚兼
1576	天正4	丙子	8月 島津軍の高原城攻めに郡山・東侯衆は義久軍、伊集院衆は忠長・家久軍で参加する	旧後
1577	天正5	丁丑	12月 島津氏が高原の合戦で伊東・大友氏を破る	旧後
1578	天正6	戊寅	11月 島津氏が高城耳川の合戦で大友氏を破る	旧後
1580	天正8	庚辰	8月19日 島津軍の水俣城攻めに川田義朗は御役者として参戦する	季安
1584	天正12	甲申	豊臣秀吉が関白となる	
1586	天正14	丙戌	7月 島津軍が大友氏の本城を攻め落とす	旧後
1587	天正15	丁亥	3月 豊臣秀吉が島津氏を攻める 4月 平田光宗(郡山地頭)、島津軍に加わり、根白坂の豊臣軍秀長の陣営を攻撃する 5月8日 島津軍、秀吉に降伏する 7月4日 村田経成、諏訪大明神社(潜木神社)を再興する 9月29日 義久、川田城・東侯城などの城持衆に対し、秀吉の上使衆へ城を明け渡すよう命じる 天正年間、義久は平田光宗に郡山村と西別府を与えた	旧後 旧後 三国 旧後
1592	文祿1	壬辰	3月 秀吉の朝鮮出兵(文祿の役)	旧後
1594	文祿3	甲午	9月 薩隅日の太閤検地が始まる。翌年2月で終了する 大川寺入口に釈迦三尊石塔が建立される(石祠碑文)	旧後
1595	文祿4	乙未	9月3日 彌寝七郎に西侯のうち高136石余他が与えられる	家一
1597	慶長2	丁酉	12月 秀吉の朝鮮再征(慶長の役)	
1599	慶長4	己亥	6月 翌年にかけて庄内の乱。平田増宗ら島津側に付き交戦する	旧後
1600	慶長5	庚子	9月15日 島津義弘軍、関ヶ原の戦いで敵中を抜けて帰国の途に就く。隊の殿(しんがり)を務めた後醍醐院宗重は、その功により常盤に50石を加増される 有屋田久逸、有屋田から高岡郷(現宮崎県)へ他の伊集院郷士とともに移封される	旧後 高岡
1603	慶長8	癸卯	2月 徳川家康、征夷大將軍に任じられる	
1605	慶長10	乙巳	12月26日 郡山地頭平田光宗没す。郡山「圓寺寺」「圓松寺」ともに葬られる	季安
1609	慶長14	己酉	2月 平田増宗、島津氏の琉球出兵の副将として軍役61人を率い大功をたてる	旧後
1610	慶長15	庚戌	6月19日 郡山地頭平田増宗、入来浦之名で暗殺され、以後郡山は藩直轄地となる	旧後
1611	慶長16	辛亥	薩摩藩領内で翌年にかけて総検地が行われる(「慶長の内検」)	
1613	慶長18	癸丑	12月1日 後醍醐院喜兵衛尉(宗重)、島津軍の一番備の備并普請奉行となる	季安
1615	元和1	乙卯	5月8日 大坂夏の陣で、豊臣氏が滅亡する 武家諸法度が制定される	
1621	元和7	辛酉	1月1日 法幢寺、火災に遭い旧記を失う	三国
1624	寛永1	甲子	4月16日 後醍醐院宗重、没す(74歳)。妻、同8年没す(墓碑)	
1626	寛永3	丙寅	2月12日 大旦那有川新左衛門尉らが山神三社御宝殿を造営する	伊由
1632	寛永9	壬申	6月 郡山地頭伊勢貞則、御手廻之御人衆として出陣の備えに当たる。8月19日伊勢貞則、乗馬式騎(1騎に12・8人)衆中主従4人の陣容で出陣に備える 薩摩藩領内で翌々年にかけて総検地が行われる(「寛永の内検」)	季安
1637	寛永14	丁丑	10月 島原の乱が起こる	
1638	寛永15	戊寅	1月6日 伊勢貞則、乗馬して35人の一番立郡山衆中を率い島原の陣に加わる 13日 貞則ら、米ノ津に到着する。34人と供夫16人とある 2月15日 藩主光久帰国に付、猪鹿を調達する場所として郡山が挙がる 1月11日から3月20日までの郡山衆中から天草立軍衆の分2532人を3期に分ける 1月14日から3月10日までの鹿兒島から天草立軍衆の伊勢貞則の分840人を3期に分ける 3月 島津久元室は休外院に東侯のうち高100石を茶湯料として寄進する	季安 季安
1640	寛永17	庚辰	7月9日 郡山衆中20人、島原の乱で加久藤口を固める	季安
1650	慶安3	庚寅	2月 有屋田の庚申供養三重塔が建立される(碑文)	

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
1652	承応1	壬辰	3月 地頭藤原信允ら、藩主光久の歳祝に諏訪大明神(潜木神社)を改修する(棟札)	
1653	承応2	癸巳	11月 松田重清、有屋田村の鎮守社に光久らの息災を祈願し、宮殿を再興する	伊由
1656	明暦2	丙申	藩主光久、花尾神社に鏡一面を廟内に奉納する	三国
1657	明暦3	丁酉	薩摩藩領内で翌々年にかけて総検地が行われる(「万治の内検」)	
1659	万治2	己亥	9月 大川寺住職天安、川田義朗の招魂碑?を建立する(川田神社) 川内平佐の北郷久精、日向国高岡郷鬼塚村等遠隔地の代替として嶽村のうち周圀3里18町を所領とする許可を受ける この頃、平等王院が一時廃絶する	郡山 伊由 花由
1668	寛文8	戊申	8月 霧島神社の薩摩焼の狛獅子(唐猫とも)二対はこの年月の銘を有する	
1669	寛文9	己酉	藩主光久、花尾神社の拝殿・舞殿・随神門などの修理を行う。随神門の額「花尾山」は光久の筆になる	三国
1672	寛文12	壬子	3月22日 大川寺に庚申供養石砌塔が建立される(碑文)	
1674	延宝2	甲寅	年に粟米4石を大乗院に給し、花尾神社の祭料とする	三国
1677	延宝5	丁巳	3月7日 平村の孫左衛門が嶽村小山之地下地蔵菩薩を奉納する	伊由
1680	延宝8	庚申	(この年～貞享3年)9月20日 伊集院地頭島津甲斐守が智賀尾六所権現に島津光久の息災延命・子孫繁昌などを祈願する	伊由
1688	元禄1	戊辰	7月 小倉峯助重興、嶽村神之園熊野三社権現に鯛口を奉納する	伊由
1689	元禄2	己巳	9月8日 円照寺五世聖嚴存廓和尚が没す(墓碑) 4月 郡山郷の横目・組頭を勤めた木場盛清(平角)が切腹する 藩主綱貴、花尾神社を修理する	木場 三国
1691	元禄4	辛未	地頭伊勢六左衛門ら、諏訪(潜木)神社を改修する(棟札)	
1692	元禄5	壬申	油須木の近都宮神社が再興される	三国
1694	元禄7	甲戌	西俣氏、藩の系図方へ由緒家伝など差し出す	季安
1698	元禄11	戊寅	有屋田の諏訪神社の庚申供養塔2基が建立される(碑文) 花尾権現にて頼朝の五百年忌法要を営む	旧追 三国
1704	宝永1	甲申	藩主綱貴、花尾神社に神鏡2面を奉納する。別当寺の再興を命ず	三国
1706	宝永3	丙戌	9月23日 西俣敷馬、記録所の再撰につき、庶流までの記録差し出しを比志島平右衛門に依頼する	季安
1708	宝永5	戊子	藩主吉貴、平等王院などを再興し、吉田郷佐多浦村権現領門高20石を施す。本府大乗院に兼帯させる。この年までに厚地村に円融院(後に曼陀羅寺)・本地院・普賢院を再興し、各20石ずつ所領を与える。十六尊の仏の姿を表す梵字を刻んだ町石が建てられる	三国
1709	宝永6	己丑	小山田村の喜左衛門、孝心に付き藩より褒賞を受ける 藩主吉貴、花尾神社の多門院を再興する	高尾 旧追
1711	正徳1	辛卯	正月 地頭島津助之丞ら、諏訪(潜木)神社の鳥居を改修する(棟札)	
1712	正徳2	壬辰	9月18日 厚地村は藩庁への租税・公役を免ぜられる	旧追
1713	正徳3	癸巳	2月11日 藩主吉貴、花尾神社に隨身門を建立し、隨身2体を安置する 12月11日 祈願のため、藩主吉貴の代理、島津久方が大般若経一部を花尾神社(平等王院)に寄付する	旧追
1714	正徳4	甲午	2月 里岳の庚申供養塔(福留家)が建立される(碑文) 8月21日 かつて平等王院に祀られた五指量愛染明王一体を大乗院で祀る覚書を家老連名で発する 油須木の近都宮神社が再興される	旧追 三国
1716	正徳6	丙申	茄子田の早馬宮が建立される(碑文)	
1718	享保3	戊戌	12月25日 本地院・普賢院・曼陀羅寺、各20石から5石ずつ加増される	旧追
1721	享保6	辛丑	12月13日 花尾神社、継豊の藩主襲封祝の幣使より、白銀百両を受ける	旧追
1722	享保7	壬寅	薩摩藩領内で同12年まで総検地が行われる(「享保の内検」)	
1723	享保8	癸卯	4月16日 花尾権現多門院の知行目録に宮之浦村・郡山村の25石が記される	旧追
1724	享保9	甲辰	諏訪(潜木)神社の鳥居が再改修される(棟札)	
1725	享保10	乙巳	3月 噺山口五兵衛ら、諏訪(潜木)神社の厨子拝殿敷石を新たに敷く(棟札)	
1726	享保11	丙午	10月 藩主継豊、一之宮神社を再興する	三国
1728	享保13	戊申	12月5日 毎年谷山・春山の関狩で、城下を6組に分け、外城と共に3年に一度使役あり。郡山は来年から	季安
1729	享保14	己酉	3月 嶽村庚申供養の人々が熊野神社宮殿修理に寄進する(棟札) 9月11日 藩主継豊、將軍家養女竹姫との婚礼に幣使を遣わし、花尾権現に白銀10枚を献じる	旧追 墓碑
1734	享保19	甲寅	2月3日 円照寺七世元亨義貞和尚、没す(墓碑)	墓碑
1736	享保21	丙辰	2月吉日 菅原神社境内の庚申供養塔が建立される(碑文) 10月 上園の田の神像が建立される(碑文)	碑文 碑文
1737	元文2	丁巳	4月 佐土原城主島津惟久、湯治に来鹿。3日に花尾山を参詣後、入来添田温泉へ逗留する 東俣村東門の百左衛門、橋・道路の改修に尽力した功績により藩から褒賞を受け、息子らとともに夫役を免除される	旧追 高尾
1739	元文4	己未	8月21日 東俣村内の門名頭が唐金(青銅)の御幣を一之宮神社に奉納する(箱書)	

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
1743	寛保3	癸亥	2月晦日 地頭島津弥一郎、有屋田の諏訪神社に勧請する	伊由
1744	延享1	甲子	厚地村の庄屋松山寛左衛門ら功才4名は、従来花尾神社労役奉仕により免除されていた夫役を以後も免除されるよう大乗院に願い出、許可を受ける	権現 高尾
1746	延享3	丙寅	8月14日 東門の百左衛門表彰さる	
1747	延享4	丁卯	東門の百左衛門が比志島川河畔に土木・治水のための供養塔を建立する(碑文)	
1748	寛延1	戊辰	8月2日 島津宗信の藩主襲封を賀し、島津久峰を幣使として白銀5枚を満家院花尾権現社に献じる	旧道
1752	宝暦2	壬申	8月 佐土原城主島津忠雅、島津継豊の見舞に来鹿、18日に花尾権現社を詣でる 3月 地頭川上式部ら、諏訪(潜木)神社の拜殿を新たに造る(棟札)	旧道
1753	宝暦3	癸酉	4月26日 茄子田の二十三夜待講中によって田の神像が建立される(碑文) 薩摩藩、幕府から木曾三川治水普請を命じられる 藩主重年、東門百左衛門の息子彦右衛門・三右衛門・助右衛門に土木改修の褒賞を与える	人物
1757	宝暦7	丁丑	3月 郡山地頭川上勘解由ら、諏訪神社(潜木神社)に唐猫を供える(棟札) 8月 郡山郷川田村農民長助、私財で石堰を設けた功を以て藩主重豪より賞される	旧道
1758	宝暦8	戊寅	7月12日 藩主重豪、花尾権現社に白銀1枚を献じる	旧道
1759	宝暦9	己卯	7月4日 重豪の藩主襲封を賀し、幣使として島津久敷が花尾権現社に白銀5枚を献じる	旧道
1760	宝暦10	庚辰	2月 白坂篤行、諏訪(潜木)神社に鰐口を奉納する(棟札)	
1761	宝暦11	辛巳	5月 郡山郷東俣村農夫幸兵衛、孝子として藩主重豪より賞される 11月5日 藩主重豪、初めての下国につき花尾山(白銀拾両献納、一之宮(青銅百疋同)へ参詣する	旧道
1764	明和1	甲申	1月13日 花尾山に藩主の代参がある 3月9日 重豪、花尾廟に参詣する 閏12月25日 重豪の官位昇進につき、島津久濃が花尾権現社に代参し、白銀1枚を献じる	旧道
1765	明和2	乙酉	2月 三重岳に石燈籠型の牧神が建立される(碑文) 常盤に庚申供養塔が建立される(碑文)	
1773	安永2	癸巳	11月 琉球国中山王世子・高官から花尾神社へ扁額2枚が贈られる	
1775	安永4	乙未	5月29日 宍邦院(島津継豊)菩提へ東俣村札之元門27石を寄付する 向江谷に馬頭観音が設置される(碑文)	旧道
1776	安永5	丙申	各郷に「勸農掛」を置く	藩法
1777	安永6	丁酉	7月9日 後醍醐院良頭、宗重夫妻の供養塔を建てる(碑文)	
1778	安永7	戊戌	大平に田の神・早馬神が設置される(碑文)	
1779	安永8	己亥	9月29日 桜島の大爆発、田畑に大被害	
1780	安永9	庚子	外城衆中を外城郷土もしくは郷土に改称する	藩法
1781	天明1	辛丑	閏5月19日 重豪、花尾社に参詣し、太刀馬代を献じる。帰路一之宮大明神に白銀1両を献じる 8月18日 小山田村の兄妹、孝行に付き、藩より兄太郎八に25俵、妹まん亀に銀5貫文の褒美を受ける 寺社領「厚地村」の境界石が各地に設置される(碑文)	旧道 高尾
1782	天明2	壬寅	噺を郷土年寄、与頭役を組頭、横目役を横目、その他の職名も改称する	藩法
1783	天明3	癸卯	10月10日 坂木弥九郎ら、嶽の熊野神社・若宮大明神に造営の寄進をする(棟札)	
1784	天明4	甲辰	外城を郷と改称する	藩法
1786	天明6	丙午	島津重豪、一之宮神社を再興する。狛犬もこの年に奉納される(台石)	三国
1787	天明7	丁未	3月27日 家老二階堂行且、銀1枚を花尾山、金200疋を一之宮に献じるため遣わされる 8月3日 重豪、花尾山に参詣し、愛染堂にも詣でる。帰路一之宮に参詣する 11月 琉球国按司・親方・親雲上から扁額が花尾神社に3枚、一之宮神社に2枚贈られる(扁額)	旧道 旧道
1788	天明8	戊申	島津重豪の意向により、井上右内を花尾権現の神主とする	三国
1789	寛政1	己酉	6月28日 花尾大権現の尊号を許される。 8月15日 花尾神社では卜部良俱の「花尾大権現」扁額を掲げ、近衛基熙の「花尾権現」は平等王院に納める 造士館教授山本正誼、重豪の命により「花尾大権現廟記」を著す この年以降、賦合集落の御天神講日記が残されている	旧道 三国 三国 記録綴
1792	寛政4	壬子	藩主の休憩・宿泊所として東俣御支度所が設置される	要用
1794	寛政6	甲寅	3月 大下に石祠型の馬神が建立される(碑文) 西俣上に馬頭観音が建立される(碑文)	
1797	寛政9	丁巳	12月16日 頼朝600年祭の法要を花尾山にて行う	
1801	享和1	辛酉	2月 井手上の石井堰が完成する(碑文) 8月 重久篤雄、諏訪(潜木)神社に金幣を奉納する(棟札)	
1804	文化1	甲子	12月20日 嶽村の熊野神社・若宮大明神が遷宮する(棟札)	

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
1806	文化3	丙寅	このころ木村金八郎が郡山に一刀流を伝える(桑原家文書)	郡山
1807	文化4	丁卯	1月6日 円照寺の玉盤玄峰和尚、没す(墓碑)	
1808	文化5	戊辰	1月 藩主斉宣、花尾鹿倉にて狩りをし、東俣御茶屋に逗留する	文化
1817	文化14	丁丑	3月10日 嶽の熊野神社当札を造り替えのため氏子が寄進する(棟札)	
1818	文化15	戊寅	油須木の上原橋が架設される(碑文)	
1819	文政2	己卯	円照寺の瑞典和尚、没す(墓碑)	
1821	文政4	辛巳	3月26日 藩主斉興、智賀尾六所権現に普門品一卷を寄付する 4月 秋葉神社の庚申供養塔が建立される(現潜木神社境内)(碑文) 4月 三重岳の牧神近くに手水鉢が寄進される(碑文) 8月 三重岳の牧神近くに手水鉢が寄進される(碑文)	伊由
1824	文政7	甲申		
1827	文政10	丁亥	調所広郷に藩の財政改革が命じられる	旧道
1828	文政11	戊子	花尾神社官司の井上祐清、勅許にて大官司職となり、さらに吉田家の推挙により総大官司の地位を得る	三国
1831	天保2	辛卯	5月13日 島津重豪の従三位昇進を祝し、家老二階堂行典を遣わし、花尾山権現社・一之宮大明神に銀1枚を献じる	旧道
1833	天保4	癸巳	6月 家老市田長門(義直)の知行地500石の内に郡山村福元門の内・大浦門の内が含まれる	旧道
1836	天保7	丙申	11月28日 家老調所笑左衛門広郷、これまでの業績を賞し、500石の知行を与え、その中に東俣村の内が含まれる	旧道
1839	天保10	己亥	郡山の池田鼻井堰が完成する(碑文)	
1841	天保12	辛丑	2月 茄子田に三界万靈碑が建立される(碑文)	
1843	天保14	癸卯	三国名勝図会なる	三国
1844	弘化1	甲辰	正月11日 坂木四郎兵衛ら、嶽の熊野権現・若宮大明神宝殿造営に寄進する(棟札)	
1845	弘化2	乙巳	2月 西俣下の和田石井堰の水神が建てられる(碑文) 10月22日 家老調所笑左衛門、財政再建の功績によって500石の知行を加増され、その中に東俣村官下門之内も含まれる	旧道
1846	弘化3	丙午	8月10日 鎌田出雲、11月の花尾神社頼朝公650年御法会の御用掛を命じられる	斉彬
1847	弘化4	丁未	1月 賦合の垂門石井堰の水神が建てられる(碑文) 9月28日 藩主斉興、花尾山平等王院に勢至菩薩像と安産・虫除けに効くという頼朝の笏を奉納する 11月11日 花尾山で頼朝公650年諱法事が行われる	斉彬 郷教
1849	嘉永2	己酉	1月 常盤に甲源舎が設立される	郷教
1850	嘉永3	庚戌	10月 柿木平に同心舎が設立される	郷教
1851	嘉永4	辛亥	9月3日 島津斉彬、藩主となり初めて花尾山と一之宮に参詣する。井上駿河守が一之宮神社を案内する	斉彬
1852	嘉永5	壬子	花尾神社の社殿を大修理。天井絵もこの頃能勢一清によって描かれたか	画人
1853	嘉永6	癸丑	2月 行司加治木利左衛門ら、嶽の熊野神社に戸札を造り替えのため寄進する(棟札) 3月 麓に松尾舎が設立される	郷教
1854	安政1	甲寅	6月 早馬に馬頭観音の碑が建立される(碑文) 4月22日 郡山士の岩崎俊齊、長州の青木周弼に4年間蘭学を学んだ後、大坂へ行き緒方洪庵の塾に入る	斉彬
1855	安政2	乙卯	3月 油須木の乙ヶ山石井堰の水神が建てられる(碑文) 「蘭学通司」(通訳)を学ぶべき者として、藩から承認された4名中に郡山郷士名島晋太郎(13才)・猪谷弥右衛門(17才)が挙がる	斉彬
1856	安政3	丙辰	同4年まで、郡山郷字松山谷ノ口の大山野約3反5畝歩を苗木御仕立場とする。 同7年まで、郡山郷字雪元笹之段の約25町歩に楠の苗約50万本を植付ける	斉彬
1862	文久2	壬戌	2月 寺田屋事件起こる 3月 南方小そば、川田川井堰の水神が建てられる(碑文) 8月 生麦事件起こる	
1863	文久3	癸亥	7月 薩英戦争を前に藩主の移動や藩主夫人らの避難経路を花尾山から蒲生・国分とする献策が出される 7月2日 物主北條織衛に率いられた郡山士一組は、伊集院・吉田・市来隊とともに城下において英軍の砲撃を受ける	忠義 有馬
1865	慶応1	乙丑	10月 第二次長州征伐。伊集院・郡山隊は京都警衛のため上京し、翌年12月に帰郷する 郷を外城、郷士を衆中、郷士年寄を暖に再び改称する	道中 藩法
1866	慶応2	丙寅	12月24日 千眼寺の島津重豪・斉興の肖像を花尾護国権現社へ遷座するという違が出される 開成所の教官生徒姓名書に郡山郷士「句読師 岩崎俊齊」「岩崎元朴」「成松八之丞」が記される	旧道 忠義 庵寺
1867	慶応3	丁卯	4月 藩庁より神仏分離の令が出され、花尾神社の平等王院など排除の対象になる 10月 將軍徳川慶喜が朝廷に「大政奉還」する	
1868	明治1	戊辰	1月 鳥羽・伏見の戦い	

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			1月18日 伊集院・郡山隊の肥後善右衛門ら30余名、大坂警衛のために出陣する 閏4月11日 嶽村熊野権現・若宮大明神宝殿の御正体を替えるよう仰せ渡される(棟札) この頃、河野憲章が円照寺で郷土の子弟を教育する。後に旧地頭仮屋へ移る	郡山 学校 県史
1869	明治2	己巳	藩政改革により常備隊を置く。郷三役を改めて小隊長以下を配する	郡山
1871	明治4	辛未	7月 廃藩置県詔書発布される	郡山
1872	明治5	壬申	郡制が敷かれ、郡山郷は伊集院郷とともに市来郡治所の管轄に入る 2月 常備隊が解散される。戸長・副戸長が置かれ、4月に木場平左衛門が郡山郷戸長となる この年か翌年、円照寺が焼失する 郡山郷に外城第七十四郷校が設立される	県史 系代 郡山 学校
1873	明治6	癸酉	1月 徴兵令が布告される 4月1日 伊集院郷麦生田に郵便局が開局し、郵便切手売捌所が東俣1,花尾2,大浦1ヶ所ずつ設置される	郡山
1876	明治9	丙子	1月1日 県を大小区に分け、郡山郷は第21大区、伊集院郷は第22大区となる 正則の郡山小学が発足する(正則は11年説もあり)	郡山 近代
1877	明治10	丁丑	2月 西南戦争が起こる。郡山郷、有屋田・嶽村から約170名が出陣し、40余名が戦死する。9月に終結し、従軍者は裁判を受け収監される 7月24日 河田村に河田警視分署が設置され、郡山郷6か村と小山田・比志島・川上村を管轄する。同じく伊集院警視分署では、伊集院・市来・日置・吉利・永吉・串木野を管轄する	郡山
1878	明治11	戊寅	2月 木場平左衛門、郡山の戸長を退き、後任には木場甚之丞が任命される 郡山小学が再開され、下等小学科のみ設置する	郡山 系代 郷教
1879	明治12	己卯	12月 戸長選挙が実施され、郡山、東俣、厚地、川田・油須木(合同)、西俣の5か所に戸長以下の役を置く 伊集院村下神殿に共進簡易科小学が設立される この頃、川田小学、東俣小学、厚地小学、西俣小学、大浦小学が設置されていた	郡山 伊町 郷教
1880	明治13	庚辰	2月 初の県会議員の選挙が行われ、日置・阿多・甌島三郡から4名が選ばれる 村ごとに衛生委員が設置される	郡山 県史
1881	明治14	辛巳	7月 郡役所の管轄の変更に伴い、市来郡役所は廃止され、日置郡は鹿児島郡役所の所管になる 8月 学務委員選挙規則により各学区に委員設置が定められる	郡山 県史
1882	明治15	壬午	6月 戸長役場管轄区域の改廃により、東俣・川田・厚地と郡山・油須木・西俣の2戸長役場となる	郡山
1883	明治16	癸未	9月 郡山小学に初等科・中等科・高等科を置く 10月6日 串木野の入来定穀宅に郡山の飯具売りが来て、小メシゲー貫文を15銭、釜メシゲを7銭余で売る	郡山 学校 入来
1884	明治17	甲申	5月 区町村会法の改正により、郡山ほか6か村で一つの戸長役場を置き、柴善次郎が初代戸長を勤め、まもなく重久厚右衛門に代わる	郡山
1885	明治18	乙酉	7月 大浦小学と西俣小学が郡山小学に、川田小学は東俣小学に合併される	郡山 郷教
1886	明治19	丙戌	12月 東俣村に簡易小学校が設立される 翌年まで県下一円で天然痘(痘瘡)が流行る	郡山 学校 郡山
1887	明治20	丁亥	1月1日 警察区制の改定により、市来警察署伊集院分署下に郡山と東俣の巡査駐在所を設置する 3月 県蚕糸業組合は伊集院組から郡山組を分割新設する 前年の小学校令により、郡山小学校は4年制の尋常小学校となり、他の小学校は3年制の簡易科小学校となる 嶽簡易科小学校が設立される	郡山 県史 郡山 要覧
1889	明治22	己丑	2月11日 大日本帝国憲法が発布される 4月17日 市制・町村制により、「郡山村」、有屋田・嶽村の加わる「下伊集院村」が誕生する。小字名誕生する。 6月 郡山村議会の議員12名が選出される。議会から村長が選出される(郡山村村長:白坂素一郎・下伊集院村村長:下泰治)	日置 郡山 伊町
1890	明治23	庚寅	改正小学校令の公布により、簡易科小学校が尋常小学校になる 夏から翌年にかけて、日置・薩摩・出水郡内でコレラが流行する	郡山 郡山
1891	明治24	辛卯	12月 郡山高等小学校を郡山尋常小学校の校舎内に設置する許可を県知事より受ける	郡山
1892	明治25	壬辰	1月 同志舎(油須木)が設立される 4月 有屋田は下神殿・桑畑・麦生田と合同で共進尋常小学校を麦生田に設置する 10月1日 常盤尋常小学校が設立される 10月 厚地と東俣の小学校が合併し、南方尋常小学校が発足する	郡山 郷教 要覧 郡山 郡山
1894	明治27	甲午	8月1日 日清戦争が勃発する。郡山からも歩兵・軍夫など従軍する	郡山
1895	明治28	乙未	この4月までに郡山農会が設置される	日置

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			9月30日 郡山村の門松に避病舎が建てられる	郡山
			前年から赤痢と天然痘、この年にはコレラも流行し、死者が多数に上る	郡山
			郡山と花尾、東俣に衛生組合が結成される	郡山
1896	明治29	丙申	2月8日 大浦中青年会が発足する	鹿朝
			8月1日 郡山村兵事会が発足する	郡山
1897	明治30	丁酉	東俣・厚地・川田で東衛生組合、郡山・油須木・西俣で西衛生組合が設立される	郡山
1898	明治31	戊戌	4月1日 新たな郡制により、日置郡が阿多郡を吸収合併する。郡役所は中伊集院村の下谷口に置く	日置
			5月21日 県は郡山村からの要請を受け、桑原登之丞を普通農事改良教授人に任命する	郡山
1900	明治33	庚子	4月 郡山村に農事小組合が設立される	郡山
1901	明治34	辛丑	4月1日 郡山尋常高等小学校が誕生する	学校
			6月 大雨による洪水で石橋が数カ所流失、河川の氾濫により村内の被害甚大	郡山
1904	明治37	甲辰	2月10日 日露戦争の勃発。郡山の歩兵は鹿児島島の四十五連隊として5月19日に動員される。早馬の馬頭観音建立(碑文)	郡山
			厚地山内に5町8反の開戦記念林の造林計画が立てられる	鹿新
1905	明治38	乙巳	4月1日 郡山村農会は「農事奨励規程」を発表し、改良増産を図る	郡山
			4月 出水郡より煙草耕作教師として野間口某を迎える	鹿新
			5月 郡山女子実業補習学校が郡山尋常高等小学校内に設立される	郡山
			9月 日露戦争終結のポーツマス条約締結	
1906	明治39	丙午	3月10日 毎年陸軍記念日に三蔵塚で6か村参加の相撲大会が開催され、太平洋戦争の激化まで続けられる	郡山
1907	明治40	丁未	日置郡で購入した郡有種馬「岩手号」が郡山村に配置される	郡山
			郡山村では葉煙草耕作教授人を招き、生産奨励を図る	鹿新
			10月 有屋田青年会が発足する	鹿朝
1908	明治41	戊申	1月 厚地青年会が発足する	郷教
1909	明治42	己酉	1月 常盤青年会が発足する	郷教
			2月11日 東俣西部実業青年会・東俣東秀青年会・東俣永山青年会・川田青年会・厚地西部実業青年会・厚地東部実業青年会が発足する	鹿朝
			3月 東秀舎、共進舎(川田)が発足する	郷教
			3月19日 郡山村報徳会の発会式が行われる	鹿新
			7月11日 郡山村婦人会の発会式が行われる。	鹿新
			8月 西部実業青年会(東俣)が発足する	郷教
			12月12日 川田の住吉神社と大王神社を合祀し、南方神社となる	
			馬場市はこの年の12月から陽暦の3月16日と12月16日に実施する	鹿新
			川田の諏訪神社は大王神社・住吉神社を合併して南方神社と改称する	神社
1910	明治43	庚戌	3月 大浦上之丸青年会が発足する	鹿朝
			4月 東陽小の開校に伴い共進小校舎を移転新築する(伊集院北郵便局東側)	鹿新
			10月 八重に上之丸夜学舎が設立される	郷教
			11月3日 帝国在郷軍人会郡山村分会(前身:在郷軍人団)が発会の式を挙げる	郡山
			12月 大浦下青年会が発足する	鹿朝
			有限責任郡山信用販売購買生産産業組合(「郡山産業組合」)が発立される	郡山
1911	明治44	辛亥	3月12日 油須木(同心舎)報徳会の発会式が行われる	鹿新
			4月 柿木平青年会が発足する	鹿朝
			6月 常盤に明治舎、大浦に学道舎が発足する	郷教
			7月10日 郡山村教育会発会式が開催され、会長副会長を選ぶ	鹿新
			7月11日 西俣に鎮座する三神社合祀祭(霧島・山祇・素盞)が催される	鹿新
			8月6日 郡山の秋葉神社と菅原神社を合祀する	鹿新
			9月21日 暴風雨による浸水被害で郡山村の損害額は1万7千円余に上る	鹿新
			10月8日 常盤青年会が発会する	鹿新
			有限責任東俣信用購買販売生産利用産業組合(「東俣産業組合」)が発立される	郡山
			この頃、麓から鹿児島市の千石馬場まで馬車一台が一往復する	郡山
1912	大正1	壬子	2月11日 西上報効農事小組合が県の表彰(丙・拾円)を受ける	報効
			3月21日 松尾青年会が発足する	鹿朝
			4月14日 嶽青年会が発足する	鹿朝
			郡山小の拡張に伴い郡山村役場が移転、改築される(地頭仮屋跡から賦合へ)	郡山
			洪水により前田橋が流失する(碑文)	
1913	大正2	癸丑	3月4日 大浦上報効農事小組合が県の表彰(乙・拾五円)を受ける	報効
			3月5日 西俣上青年会が発足する	鹿朝
			4月 嶽尋常小学校を大谷尋常小学校と改称する	要覧
			5月 西俣下青年会が発足する	鹿朝
			7月25日 菅原神社増築模様替落成式が行われる	鹿新
			10月2日 油須木実業青年会が発足する	鹿朝
			11月24日 郡山尋常高等小の増改築を終え、仮校舎から移転する	鹿新

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			12月 油須木実業青年会は萱葺家屋一棟を建て、一般の集会所・説教所などにも利用することになる	鹿新
1914	大正3	甲寅	1月12日 桜島大爆発により、農産物、特に養蚕は壊滅的狀態となる。桜島・鹿児島市からの避難民を受け入れ、郡山村では195人に上る(1月29日付) 3月30日 東俣西下報効農事小組合が県の表彰(丙・拾円)を受ける 有限責任常盤信用販売購買生産利用産業組合(「常盤産業組合」)が設立される 郡山村を総括する(私設)消防組が誕生する	日置 鹿朝 報効 郡山 郡山
1915	大正4	乙卯	8月23日 日本、第一次世界大戦に参戦する 3月24日 上園報効農事小組合が県の表彰(丙・拾円)を受ける 4月 上園青年会が発足する	報効 鹿朝
			9月15日 厚地・東俣・川田連合青年会が発足する	鹿朝
			9月21日 郡山麓に郵便局が開局する	郡山
1916	大正5	丙辰	1月14日 日置郡連合青年会が設立される	鹿朝
			1月30日 郡山村青年会の発会式が行われる	鹿新
			2月26日 常盤尋常小学校区内連合青年会の発会式が行われる	鹿新
			12月 南方小学校増築をめぐり、15集落が移転派・現地派・2校派に分裂する	鹿朝
1917	大正6	丁巳	2月5日 帝国在郷軍人会日置郡連合分会の発会式が行われる	鹿朝
			3月31日 馬場報効農事小組合が県の表彰(丙・拾円)を受ける 南方小学校で1校派と2校派が対立、父兄大会の投票では1校派、村会では2校派が多数を占める 東俣西部実業青年会日置郡長より表彰(碑文)	報効 鹿朝
1918	大正7	戊午	10月 スペイン風邪の大流行で大正9年の春までに県内でも多数の死者が出る	郡山
			11月 中福良の瀬戸山に国有種牡馬種付支所が設置される	郡山
1919	大正8	己未	1月 東俣地区の伊敷村編入運動に伴い、小山田地区と合同で東俣～小山田間道路工事に着工し、トンネル開通も合わせて翌9年3月に完成する	郡山
			6月9日 この日から南方小学校の児童のうち、1校派350名が学校設置と校舎移転問題のため同盟休校に及ぶ	鹿朝
			8月29日 学校新設問題に絡み、東俣・丸山・宮脇・大平集落では分村と伊敷村編入の認可を県・郡に申請する	鹿朝
			東俣産業組合が川田と花尾に支店を設置する	郡山
			柿木平・上園の道路沿いと賦合の役場に初めて電灯が点る	郡山
			大正7・8年は県内で天然痘が流行する	郡山
1920	大正9	庚申	4月 南方・常盤小学校に実業補習学校を併設する。郡山女子実業補習学校に男子部を置き、郡山実業補習学校と改称する。	郡山
			8月 花尾尋常小学校が南方尋常小から分立される	鹿新
			9月 南方尋常小学校が現在地(川田元王山)に移転する	鹿新
			郡山麓の有馬旅館から鹿児島市の千石馬場まで一日2往復の乗合自動車が開業する(片道40銭)	郡山
1921	大正10	辛酉	1月16日 花尾小学校区8青年団を統一した花尾青年団の発会式が行われる	鹿朝
			2月 日置郡青年団が設立され、同じころ郡山村青年団も発足する	郡山
			3月3日 花尾婦人会と花尾壮年団が発会式を行う	鹿朝
			東俣産業組合が茄子田支店を設置する	郡山
			郡山獵友会が発足する	鹿朝
1922	大正11	壬戌	2月12日 村内を1団にまとめた郡山村婦人会の発会式が行われる	鹿朝
			3月26日 瀬戸山グラウンドにて自転車競走「双輪会」が開催される	鹿新
			4月1日 南方・花尾は尋常高等小学校となる	郡山
			5月6日 修養団郡山村分団の発会式が行われる	鹿朝
			6月4日 宗教心を育てるため、尋常小3～6年生を対象にした日曜学校が開校する	鹿新
			7月22日 郡山仏教青年会の発会式が行われる	鹿新
			8月8日 厚地で四十五連隊の戦闘射撃が3日間行われ、青年団や在郷軍人は水汲みなどに協力する	鹿新
			郡山村と上・中・下伊集院が農会と共同で伊集院蚕糸組合を発足させる	伊町
1923	大正12	癸亥	3月30日 郡山女子実業補習学校が廃止される	学校
			4月1日 伊集院警察署竣工。この建設のために郡山村は380円を寄付する	郡山
			9月1日 関東大震災が起こる	
			麓に自転車店が開業、翌年開業の2店舗で自転車競走大会を開催する	郡山
1924	大正13	甲子	1月10日 郡山郵便局で電報の取り扱いを始める	郡山
			2月23日 智賀尾神社の遷宮落成式が行われる	鹿新
			6月 河鹿(かじか)の生息調査で上之丸の溪流にののがあるのがわかる	鹿新
			8月 郡山村東西二つの衛生組合を統合して「郡山衛生組合」が結成される	郡山
1925	大正14	乙丑	3月 治安維持法と普通選挙法が成立する	
			4月1日 郡制が廃止される	県史
			4月12日 郡山村輪友会主催の自転車競走大会が瀬戸山グラウンドで催され、村内外から各種目ごとに多数参加する	鹿朝

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			7月9日 常盤甲源舎の落成式が行われる	鹿朝
			8月1日 郡山郵便局にて電話事業が始まる	郡山
			東俣産業組合が製茶工場を開設する	郡山
			日置郡養蚕同業組合が設立される	伊町
1926	昭和1	丙寅	4月1日 共進尋常小学校に高等科が設置される	伊町
			6月 郡山青年訓練所が設置される	郡山
			10月9日 新設の郡山校グラウンドにて輪友会主催の第8回自転車競走大会が開催され、曲乗りなども披露される	鹿朝 県史
			7月1日 郡役所が廃止され、各業務が県と市町村に引き継がれる	郡山
			この頃、東俣産業組合による健康保険組合が発足する	郡山
1927	昭和2	丁卯	4月 大谷尋常小学校に高等科が設置される	郡山
			4月30日 共進尋常高等小学校校舎増築の落成式を開催する	鹿新
			7月 旱魃被害のため水田は植付不能、また水利確保の争論が起こる	鹿新
			9月3日 日置郡聯合処女会の発会式が行われる	鹿新
			10月30日 第一回郡山弓道会を開催する	鹿新
			共進・大谷の実業補習学校を廃止して東陽実業補習学校に併置する	鹿新
			役場と郡山・東俣駐在所に電話が架設される	郡山
			6人乗り自動車花尾～塚田(この年開通)から鹿兒島間を2往復する	郡山
1928	昭和3	戊辰	2月 第1回普通選挙が施行される	
			4月 郡山・南方・花尾・常盤の各実業補習学校は統一され、青年訓練所と一体になり、郡山中等公民学校となる	郡山
			4月20日 郡山村輪友会主催の春季自転車競走大会が開催される	鹿新
			5月20日 日置郡武道研究会の発会式が行われる	鹿新
			郡山で種卵と稚蚕飼育の事業が始まり、東俣では製糸工場が設立される	郡山
			6月27日～1日水害によって村内の県道の崩落など土木関係の被害多数	鹿新
			9月 下伊集院村木炭同業組合が創立される	鹿新
			11月14日 郡山尋常高等小校舎の増築、中等公民学校の補修改築、四校の奉安庫新築の落成式が行われる	鹿新
			11月 御大典記念として南方小に「南方少年赤十字団」が結成される	郡山
1929	昭和4	己巳	3月26日 郡山村竹林組合の創立総会が開催される	鹿新
			4月28日 郡山村村会議員選挙が行われ18名が当選する	鹿新
			4月 常盤尋常小学校に高等科(複式)が設置される	学校
			5月23日 在郷人分会主催で第一回郡山射撃会が開催される	鹿新
			5月25日 郡山村商工会の発会式を開催する	鹿新
			6月7日 厚地の郡山畜産運動場の落成式が行われる	鹿新
			10月20日 日置郡競馬で下伊集院村の各馬が健闘する	鹿新
			10月 常盤青年団員21名が禁酒を宣誓する	鹿新
			11月9日 郡山葉煙草取扱所が開設される	鹿新
			保証責任日置郡乾繭共同販売購買利用組合が伊集院町に設置され、主に伊集院町・郡山村・下伊集院村の繭を集荷する	伊町
			東俣でトラック運送業が始まる	郡山
1930	昭和5	庚午	1月6日 郡山煙草収納所の落成祝典が行われる	鹿新
			1月17日 郡山村の木場貞義村長が亡くなる。28日の臨時議会で多丸善太郎助役が村長、有馬栄一郎収入役が助役、中園金之助が収入役となる	鹿新
			4月8日 西俣中農事小組合倶楽部の落成式が行われる	鹿新
			5月19日 近都宮神社が社殿改築し、幣饌社の指定を受ける	鹿新
			7月6日 郡山村煙草婦人会の発会式が各校区にて行われる	鹿新
			9月 郡山常盤線(平原～鹿兒島)の定期乗合自動車連絡が認可される	鹿新
			9月 伊集院駅と小山田・郡山間に自動車連絡が通じる	鹿新
1931	昭和6	辛未	3月1日 多丸善太郎の依願退職による郡山村長選で国分友睦新村長が誕生する	鹿新
			4月 樋脇温泉と鹿兒島間に自動車連絡が通じる	鹿新
			7月 21日 有屋田の南方神社の改築落成遷宮鎮座祭が行われる	鹿新
			9月12日 下伊集院村共進校区の処女会発会式が開催される	鹿新
			9月18日 満州事変が起こる	
			この年に下伊集院村共進校の農繁託児所が始まるか	鹿新
1932	昭和7	壬申	4月3日 伊集院～樋脇間道路の起工式が大谷校で行われる	鹿新
			5月18日 花尾神社の屋根葺きによる遷座祭と奉告祭が行われる	鹿新
			5月22日 潛木神社の竣工奉告祭が行われる	鹿新
			6月1日 早馬岳に畜産運動場が落成する	鹿新
			日置地区機械製茶業者が製茶業者会を組織する	伊町
			東俣産業組合で診療所を設置し、医者を招聴する	郡山
1933	昭和8	癸酉	郡山村に6羽の鶴が飛来する	鹿新
			4月2日 下伊集院共栄産業組合の新築落成祝賀式が行われる	鹿新
			4月9日 下伊集院村村会議員選挙が行われる	鹿新

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			4月28日 郡山村村会議員選挙が行われる	鹿新
			8月 花尾山・三重嶽の麓で金・銀層の試掘が行われる	鹿新
			12月9日 南方尋常高等小学校校舎の落成式が行われる	鹿新
1934	昭和9	甲戌	2月 私設の麓・常盤消防組を郡山村公設の消防組とする	郡山
			4月29日 下伊集院村里嶽に畜産共同運動場設備が完成する	鹿新
			5月25日 共進校模範産業組合創立総会が開催される	鹿新
			5月 花尾敬神会が組織され、御苔石の発掘、参道の改修などあらゆる事業の助成を行うこととする	鹿新
			7月 南九州で大干魃。郡山村では川水を田地に吸い上げるモーターポンプの導入を検討する	鹿新
1935	昭和10	乙亥	2月14日 郡山村長選、国分友睦再選される	鹿新
			4月 青年学校令により、公民学校と青年訓練所が統合され郡山青年学校となる	郡山
			5月8日 日置郡農会役員選挙、兼煙草耕作組合員の選挙により国分友睦ら重任となる	鹿新
			5月19日 郡山村国防婦人会の発会式が開催される	鹿新
			5月26日 本年度の早害救済事業、常盤の井手下井堰が完成する	鹿新
			5月27日 日置郡中部乾藪倉庫が伊集院に完成し、郡山・下伊集院もそれを利用する(竣工式は12月)	鹿新
			6月9日 郡山青年学校の新築、郡山校・常盤校の裁縫室増築完了に付き、祝賀会が行われる	鹿新
			8月6日 郡山村の分家慣行の調査に戸田貞三博士ら来村し、油須木・郡山の年長者との座談会を持ち、各戸を調査する	鹿新
			9月 4月に着工した郡山郵便局が落成する	鹿新
			10月 東侯の宇都基四郎が、数千円を投じて名牝馬「種秀号」を繁殖用に購入する	鹿新
			11月15日 白石の筈が陸軍特別大演習で鹿児島に行幸された昭和天皇の御膳に上る。当林では7月上旬から整地、管理を行う。天皇行幸時智賀尾神社に神饌幣帛料供進する	郡山
			11人乗りのバスが鹿児島～郡山間を4往復走る	郡山
1936	昭和11	丙子	1月19日 下伊集院村共進校区の公設消防の発会式が行われる	鹿新
			2月27日 郡山村煙草婦人会の発会式が行われる	鹿新
			4月7日 川田の麦畑に三羽の真鶴が飛来、連日見物人で賑わう	鹿新
			5月15日 山階宮・久瀧宮両妃殿下が花尾神社へ御参詣される	鹿新
			7月 郡山産業組合の不正事件が発覚する	鹿新
			9月18日 郡山村軍友会の発会式が行われる	鹿新
			煙草耕作組合から葉煙草貯蔵倉庫を購入して郡山村有とする	郡山
			郡山村に部落自治振興会が発足する	郡山
1937	昭和12	丁丑	3月11日 郡山村立青年学校の奉安殿の落成式が開催される	鹿新
			7月 盧溝橋事件勃発、日中戦争始まる	
1938	昭和13	戊寅	4月9日 花尾小学校の校舎改築落成式が行われる	鹿新
			7月7日 「自治制発布50周年記念」及「支那事変1周年記念」式を郡山小で挙行する	郡山
			10月7日 島津忠重が花尾神社を参拝する	鹿新
			10月13日 郡山村愛国処女団の発団式が行われる	鹿新
1939	昭和14	己卯	川田上・川田下・丸山の負債農家では負債整理組合をつくる	郡山
			3月 郡山村は山村経済更正特別助成村の指定を受け、西侯と川田に農作道を作る	鹿新
			3月26日 日置郡連合婦人会・大日本国防婦人会日置支部の結成発会式が行われる	鹿新
			4月1日 郡山村警防団が発足し、消防組と防護団が発展的に解消する	郡山
			4月 青年学校が義務制になる	郡山
			7月1日 全国一斉に金の保有高調査が行われ、郡山村の調査員が村会議室に集合する	鹿新
			7月31日 郡山青年校の校旗新調の入魂式が行われる	鹿新
			9月 第二次世界大戦始まる	
			9月3日 郡山村警防団の団旗推戴式が行われる	
			10月10日 一之宮神社の参道竣工奉告祭が恒例の解願祭に合わせて開催される	鹿新
			経済更正特別助成により、郡山と東侯に木炭集荷倉庫を建てる	郡山
1940	昭和15	庚辰	2月14日 常盤校区に26～55才の壮年団が創立される	鹿新
			部落自治振興会が部落会、村自治振興会は村常会に移行する	郡山
			11月11日 日置郡豊工業組合が創立される	鹿新
1941	昭和16	辛巳	1月18日 郡山狩猟報国会が独立設置される	鹿新
			3月 国民学校令の公布に伴い各小学校の初等科を尋常小と同じ6年とする。4月から小学校を国民学校と改称する	郡山
			5月10日 鹿児島県青少年団発足にともない、郡山村青少年団が誕生する	郡山
			5月17日は山村経済更正特別助成を受けた油須木～茄子田、賦合～油須木、19日は上之丸～常盤校の農作道竣工式が行われる	鹿新

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			10月20日 郡山村民200名が鹿児島市護国神社に労役奉仕する	鹿新
			11月30日 郡山巡査部長派出所事務所とその住宅が完成する	郡山
			11月 この頃郡山村森林組合が設立されたか	郡山
			12月8日 太平洋戦争始まる	
			12月12日 伊集院署管内7か町村荷車組合が結成される	鹿新
			12月20日 日置郡女子勤労隊が初めて某方面に出発する	鹿新
			12月 常盤国民学校(小学校)が校庭の崩壊と教室の不足により大園に移転する	郡山
1942	昭和17	壬午	1月 郡山村翼賛壮年団が結成される。日置郡は2月5日(团长:国分友睦)、県は7日に発足する	郡山
			3月20日 県馬増産報国団日置分団の結成式が行われる	日報
			5月 日置郡統合製材株式会社の創立総会が開かれる	日報
			5月30日 郡山村議員選挙が行われ、18名が選ばれる	郡山
			7月1日 日置郡地方事務所の開所式が行われ、物資・労力調達、町内会の整備指導などの末端業務を行う	日報
			7月1日 東俣駐在所が現在の東俣郵便局近くに新築移転する	郡山
1943	昭和18	癸未	2月 白坂金の丞は航空思想普及のため、郡山青年学校にグライダー一機を贈る	日報
			8月20日と9月20日の台風で甚大な損害を受ける	郡山
			9月7日 日置郡中部の満州農民移住懇談会が開かれる	日報
			秋 日置郡内の国民学校学徒報国隊が鹿児島市に野菜を運搬し、食糧不足を助ける	郡山
			12月21日 農会・産業組合など諸団体を統合した鹿児島県農業会が発足する	郡山
1944	昭和19	甲申	1月1日 郡山村農会と産業組合が合併し、郡山村農業会が発足する	郡山
			郡山村農業会で常盤に診療所を増設する	郡山
1945	昭和20	乙酉	6月 本土空襲が激しく、役場は移転先の賦合の倶楽部から小山迫へ再移転する	郡山
			8月5日「御真影」奉還所警備員で加世田洋真国民学校の職員西秀雄が、来村の際に機銃弾を受け、7日死亡する	郡山
			8月6日に広島、9日には長崎に原爆が投下される	
			8月15日 日本はポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏する	
			9月17日の枕崎台風、10月10日の阿久根台風により甚大な被害	郡山
			11月17日 郡山村青年団の発団式が行われる	郡山
			主に外地からの帰還者らで入来村境周辺の国有林などの開墾が始まる	郡山
1946	昭和21	丙戌	1月12日「神道指令」により、神社は政府・公共機関との関わりを絶たれる	郡山
			2月 郡山村青年学校に臨時部落学級を設置して、木竹工・農具など生活必需品の製作を教える	南日
			3月 郡山村青年団員50名は、炭坑奉仕者として出向く	南日
			4月10日 第22回衆院選で、婦人の参政権が認められる	
			5月10日 日置郡連合青年団結成式が行われる	郡山
			8月16日 郡山村農業組合が発足する 民生委員発令さる	南日
			10月23日 国分友睦郡山村長が辞任し、村長代理を助役の山口盛孝が勤める	郡山
			11月29日 郡山村婦人会発足する	
			12月 郡山村に農地委員会が発足し、農地改革が始まる	郡山
1947	昭和22	丁亥	3月14日 鹿児島市～郡山～宮之城間に国鉄バス「北薩線」が開通する	南日
			4月5日 市町村長選挙が行われ、郡山村長には増満喜吉が選ばれる(下伊集院村長は畠中英吉)。30日の村議選では議員22名が当選	郡山 伊町
			5月 学制改革により国民学校は小学校と改称。また新制中学校が誕生し(六・三制)、青年学校の生徒が編入する	
			5月2日 郡山中学校の開校式が行われる	郡山
			5月2日 下伊集院村東中学校大谷教場の開校式が行われる	伊町
			5月3日 日本国憲法が施行される	
			5月3日 郡山村青年団主催の憲法公布祝賀相撲が開催される	南日
			7月31日 郡山村警防団の解散式の後、消防団を新たに発足させる	郡山
			12月 里嶽に集落民や篤志者の寄付20万円になる公民館が完成する	南日
			郡山村に開墾促進委員会が設置され、開墾の適地は地主が開放することになる	郡山
1948	昭和23	戊子	2月22日 中福良公民館の完工式が行われる	南日
			5月 郡山村教員組合結成式が行われる	南日
			5月 東俣集落に農機具製作所が始業する	南日
			6月 郡山村農業協同組合が設立される(郡山本所・東俣支所・川田出張所)	郡山
			12月23日 大谷教場が下伊集院東中学校大谷分校と改称する	伊町
1950	昭和25	庚寅	4月1日 下伊集院中学校大谷分校と改称する	学校
			6月 朝鮮戦争が始まり、日本は特需景気に沸く	
1951	昭和26	辛卯	1月15日 各小学校に郡山青年学級が開設され、女子は郡山中学校で受講する	郡山
			4月23日 郡山村長・村議選。増満村長が無投票で再選(下伊集院村は畠中英吉村長)。村議22名が選ばれる	郡山
			6月1日「郡山村広報」第1号が発行される	郡山
			10月23日 開拓委員会が新しく発足する	広報

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			12月7日 新しく郡山森林組合が発足する	郡山
1952	昭和27	壬辰	2月7日 郡山村遭族会が結成される	広報
			4月 青年学級の授業を中学校にて男女共学で行う	郡山
			10月5日 郡山村教育委員の選挙により5名が選出される	郡山
1953	昭和28	癸巳	6月1日 馬場集落が経営する私立郡山保育園が開園する	郡山
			6月 豪雨の被害甚大	伊町
			9月1日 町村合併促進法が公布される(10月1日施行)	
			9月 郡山村議会で鹿児島市との合併を議決。増満村長・脇議長が市側に伝える	南日
			この年、郡山村議会内に鹿児島市合併調査特別委員会が設置される	南日
1954	昭和29	甲午	1月19日 下伊集院村有屋田・里嶽・本嶽三集落の合併推進委員が鹿児島市に編入を陳情する	南日 郡山
			4月 下伊集院村大谷中学校として独立する	
			4月 伊集院町・上下伊集院村・日置村・吉利村の5ヶ町村合併促進協議会では合併を賛成する	南日
			4月27日 鹿児島市議会の隣接町村合併調査特別委員会では谷山・吉田・西桜島・郡山・重富の5ヶ町村との合併を正式に確認する	南日
			10月 県町村合併促進審議会で鹿児島市と西桜島・吉田・郡山村と嶽・有屋田地区の編入合併計画を決定し、各市・村に通達する	南日
1955	昭和30	乙未	2月10日 下伊集院村で町村合併特別委員会が再設置される。4月1日に県案の5ヶ町村合併が行われる場合は、有屋田・本嶽・里嶽の3集落が暫定的に郡山村との合併を求める請願が紹介議員をつけて提出される	下伊 広報
			2月12日 郡山村体育協会が発足する	
			4月30日 郡山村長・村議選。国分友睦が村長に当選し、村議18名が選ばれる。また、下伊集院村の村長・村議選では、合併問題を反映して各地域の議員数が大幅に変動し、22議員の東市来派・伊集院派・郡山派の線引きが明確になる	郡山 伊北
			7月 郡山村議会内に鹿児島市編入郡山村促進委員会が設置される	広報 郡山
1956	昭和31	丙申	3月19日 東侯幼稚園が開園する	
			8月10日 郡山村議会で鹿児島市に合併する前段階として有屋田・本嶽・里嶽を合併することを議決する	下伊 伊北
			8月16日 郡山村と下伊集院村の合併協議会が設置される	
			8月28日 町村合併促進協議会設置規約を制定し、事務局を郡山村役場に置く。構成は村長・議長・副議長・議員・学識経験者の計19名	下伊
			9月25日 下伊集院村の4分割合併が県に認可される	伊北
			9月29日 下伊集院村の閉村(廃庁)式が行われる	伊北
			9月30日 下伊集院村の嶽・有屋田地区が郡山村に分割編入される	伊町
			10月1日 郡山町が誕生する。初代町長は国分友睦。嶽・有屋田地区の旧下伊集院村村議4名が加わり、町議が計22名となる 町制施行	郡山 学校
1957	昭和32	丁酉	3月31日 大谷中学校が郡山中学校に統合される。	
			4月1日 有屋田地区の児童70名が共進小から郡山小に編入する。旧大谷中生徒は郡山中に通学を始める	学校
			4月8日 郡山町の新部落会が発足する	広報
			7月15日 郡山町商工会が発足する	広報
			東侯～吉田都迫間が貫通し、国鉄バスの運行が始まる	広報
			8月1日 大浦線には国鉄バスと林田バス、里岳線には林田バスが運行する	記念
			日置郡衛生協会が設立される	広報
1958	昭和33	戊戌	4月 町内の部落会を部落公民館と改称する	記念
			8月2日 第1回町内一周駅伝大会が開催される	記念
			11月1日 常盤校区公民館の運営する私立常盤保育園が開園する	郡山
			11月3日 第1回町民体育祭が郡山中で開催される	広報
1959	昭和34	己亥	4月30日 町長・町議選。国分友睦町長再選。22名の議員	広報
			3月 郡山～湯之元停車場線(林田)、6月12日 伊集院～蒲生線(国鉄)、15日 鹿児島～水俣線(国鉄・林田)が開通し、バスが往復する	広報
			8月29日 郡山町果樹振興会が発足する	広報
1960	昭和35	庚子	3月 県道山田湯之元停車場線が嶽まで完通する	伊北
			4月28日 町身体障害者協会が発足する	広報
			9月29日 町体協県体で優良団体として表彰される	
1961	昭和36	辛丑	11月18日 郡山町愛林会が発足する	広報
			11月23日 町畜産センターが開設される	記念
1962	昭和37	壬寅	3月24日 第1回農民祭が開催される	広報
			上園のイヌマキが所有者から照国神社に献木され、「斉鶴」と命名される	広報
1963	昭和38	癸卯	3月 峠放牧場(3ha)が開設される	記念
			4月30日 町長・町議選。国分町長無投票で3選。22名の議員	広報
			6月17日 川田堂園の供養塔群が県指定文化財となる	文化

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
1964	昭和39	甲辰	5月28日 郡山町老人クラブが発足する 6月 郡山町総合企画審議会が発足する	記念 広報
1965	昭和40	乙巳	3月30日 有線放送電話の開通式が開催される 4月 花尾校区公民館が運営する花尾幼児学級が開設される 5月22日 郡山町スポーツ少年団が発足する 7月1日 気象庁雨量計入来峠に設置される 11月26日 東俣郵便局が開局する	広報 郡山 広報
1966	昭和41	丙午	10月1日 町制10周年記念に町章が制定され、町歌・小唄・音頭が作られる	広報
1967	昭和42	丁未	2月 賦合公営住宅団地が完成する 4月28日 町長・町議選。中村正が無投票で新町長となる。議員20名 7月8日 国分前町長に名誉町民の称号を贈呈する 7月16日 国分友睦前町長死去につき、17日に町葬が行われる	記念 広報 記念 広報
1968	昭和43	戊申	4月 郡山町育英制度が始まる 12月6日 里岳簡易郵便局が開局する	条例 広報
1969	昭和44	己酉	7月5日 6月末からの豪雨により河川氾濫。出勤中の役場職員2名が殉職し、7日に町葬が行われる	広報
1970	昭和45	庚戌	4月1日 鹿児島市～出水の県道が国道328号に昇格する 4月 早馬の畜産センターが完成する	広報 広報
1971	昭和46	辛亥	4月25日 町長・町議選。中村正町長は無投票で再選される。議員18名 3月 部落統合が終わり、52から19の部落にまとまる。地区公民館、自治公民館設立 4月1日 郡山小・常盤小・大谷小が名目合併し、それぞれ郡山小学校郡山教場・同常盤教場・同大谷教場となる 7月2日 町木イヌマキ・町花木ツツジ・町花カンナに決まる 8月4日 台風19号により死者2名、住宅倒壊27棟 8月23日 花尾簡易郵便局が開局する	広報 広報 広報 広報 広報
1972	昭和47	壬子	4月 郡山小学校が中牟田に新築移転し、常盤・大谷教場の児童も新校舎に通学する 7月1日 役場庁舎が郡山小の旧校舎を利用するため麓の地頭仮屋跡に移転する 7月26日 郡山町文化協会が発足する 11月3日 第1回町文化祭が開催される 12月2日 郡山中学校内に町の弓道場が完成し、道場開きが行われる	広報 広報 広報 広報
1973	昭和48	癸丑	4月1日 郡山・東俣駐在所が移転新築される 10月20日 町立学校給食センターが完成する 12月18日 町内で初めて川田に温泉が湧出する この年から町内の地籍調査が始まる	広報 広報 広報 広報
1974	昭和49	甲寅	2月25日 竹下久盛議長の死去につき、27日に町葬が行われる 3月27日 自動電話が開通する。町総世帯の98.3%が加入する 4月1日 文化財保護条例が施行される 4月5日 常盤保育園が町営の保育所に移管され、花尾幼児学級は農山村保育所に切替る 6月19日 神之川の支流で天然記念物のオキチモズクが鹿児島大学の新敏夫教授らによって発見される 7月1日 高齢者教室「郡山八重大学」が開講する	広報 広報 広報 郡山 南日 広報
1975	昭和50	乙卯	4月1日 花尾の農山村保育所が町立花尾保育所となる 4月27日 町長・町議選。中村町長無投票で3選。議員18名 4月 国道328号のバイパスが開通する 8月 第1回納涼盆踊り大会が開催される	郡山 広報 広報
1976	昭和51	丙辰	4月1日 甲陵高校が開校し、7日入学式が行われる 11月3日 町民憲章が制定される	広報
1977	昭和52	丁巳	10月 市来町を除く日置郡7町で日置地区森林組合が発足する	
1978	昭和53	戊午	3月1日 伊集院・松元・郡山・日置・吉利の農協合併で「日置中部農協」が発足する 4月1日 3月末に馬場集落の私立保育園を閉じ、町立保育所が事業を引き継ぐ 5月20日 郡山町中央公民館の落成式が行われる	伊町 広報 広報
1979	昭和54	己未	3月 早馬運動公園が完成する 4月22日 町長・町議選。中村正町長4選。議員18名 7月1日 在京郡山会が再結成される	広報 広報 関東
1980	昭和55	庚申	特別養護老人ホーム「愛泉園」が設立される 大英団地造 3月16日 三重岳緑の少年団が結成される	広報 農林
1981	昭和56	辛酉	1月19日 第一回郡山町婦人大会開催される 2月 西有里研修館が完成する 西有里研修館下に製茶工場が完成する	広報 広報
1982	昭和57	壬戌	4月1日 金峰町を除く日置郡7町による日置地区消防組合が発足、10月1日から業務を始める	広報
1983	昭和58	癸亥	3月23日 花尾地区運動場が完成する	広報

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			4月24日 町長・町議選。中村町長無投票で5選。議員18名	広報
			6月21日～ 大雨災害が発生し、被害総額5,500万円に達する	広報
1984	昭和59	甲子	3月 老人福祉センターが完成する	広報
			郡山町第一次総合振興計画が策定される	
1985	昭和60	乙丑	3月 花尾・南方公営住宅が完成する	広報
			8月31日 台風13号が直撃。被害甚大	広報
			12月 甲突池を改修する	広報
1986	昭和61	丙寅	4月 町制施行30周年記念事業として寄席名人会を開催する	広報
			11月 役場新庁舎が現在地(賦合)に完成する	広報
			12月 町制30周年記念式典を開催する	広報
1987	昭和62	丁卯	4月1日 農村情報連絡施設が開局し、全世帯に農業・災害・気象・行政の放送網が整備される	広報
			4月5日 厚地運動場と研修館の落成式が行われる	広報
			4月26日 町長・町議選。中村町長無投票で6選。議員18名	広報
			4月 都市計画区域を設定する	広報
			7月17日 前日からの大雨で川田上から発生した土石流により死者2名	広報
			8月4日～9日 小中高校生・指導者ら87名が青少年の船事業で奄美大島の研修活動を体験する	広報
			県知事から町の南半部が都市計画区域に指定される	広報
1988	昭和63	戊辰	8月 ふるさと郡山の歌「甲突池カラッパどん」「郡山花しぐれ」が発表される	広報
1989	平成 1	己巳	3月23日 地籍調査事業が終了し、完了式が行われる	広報
			3月 中福良に町公営住宅が完成する	広報
			8月17日 町特産品協会が設立される	広報
			9月25日 中央構造改善センターの落成式が行われる	広報
			郡山町第二次総合振興計画が策定される	
1990	平成 2	庚午	3月 甲突に町公営住宅が完成する	広報
			5月11日 町青年団が再興される	広報
			7月4日「花尾瓢箪村」が開村する	広報
			10月6日 国道328号の峠大橋が完成し、渡り初め式が行われる	広報
1991	平成 3	辛未	3月 西俣に町公営住宅が完成する	広報
			4月21日 町長・町議選。町長に岩戸良治初当選。議員18名	広報
			7月 西俣工業団地が完成する	広報
1992	平成 4	壬申	4月1日 日置郡6農協と串木野が合併し、「さつま日置農業協同組合」が設立される	
			5月3日 八重山公園がオープンする	広報
			7月20日 郡山町生涯学習の町宣言	
			9月1日 郡山都市計画用途地域・計画道路が決定する	広報
			12月7日 郡山郵便局が小字辻の下へ移転、営業開始する	広報
1993	平成 5	癸酉	4月 東部研修館が完成する	広報
			4月24日 地域おこしグループ「マグニチュード21」が発足する	広報
			8月1・6日9月3日の大雨と台風13号により被害総額は76億1500万円(梅雨期含む)。死者・行方不明者はなし(八・六災害)	広報
1994	平成 6	甲戌	3月 「ストリームタウン賦合」が完成する。川田にガーデンヒルズこやま設立	広報
			7月20日 町青少年海外派遣事業が始まり、2名がアメリカで1ヶ月のホームステイを体験する	広報
			郡山町第三次総合振興計画(新総合振興計画)が策定される	広報
1995	平成 7	乙亥	3月 第二次行政改革大綱が策定される	広報
			4月15日 愛泉園在宅介護支援センターが業務を開始する	広報
			4月23日 町長・町議選。町長には池山泰正初当選。議員は16名となる	広報
			12月3日 わくわくフェスタ郡山が開催される	広報
			レイシの選別機と予冷庫が県単村づくり事業で設置される	農林
1996	平成 8	丙子	10月 花尾コミュニティーセンターが完成する	広報
			11月 竹林公園内に特産品の館「八重の里」が開館する	広報
1997	平成 9	丁丑	4月12日 町制施行40周年記念式典と総合運動公園落成式が開催される。町のイメージソングが発表される	広報
			8月2日 町制施行40周年記念野外コンサートに約1万人が集まる	広報
1998	平成10	戊寅	5月1日 八重山キャンプ村のコテージ棟が完成する	広報
			10月12日 郡山中央地区区画整理事業に着工する	広報
1999	平成11	己卯	2月10日 第8回「知事と若者の語る会」が中央公民館で開催され、須賀龍郎知事と地域興しの団体代表が意見を交換する	広報
			2月 東俣駐在所が新築移転する	広報
			3月21日 常盤保育所で「かごしま子ども文化の里」開設ふるさと協定の調印が行われる	広報

年 表

西暦	年号	干支	記 事	出典
			4月1日 郡山保育園が開園し、学童保育も同時に行う	広報
			4月2日 八重山キャンプ村・交流促進センター「てんがら館」がオープンする	広報
			4月14日 松元町の日置地区塵芥処理組合クリーンリサイクルセンターが稼働し、町内のごみを処理する	
			4月25日 町長・町議選。池山町長が再選し、初の女性議員が2名誕生する	広報
			6月1日 金峰町を除く日置郡7町による日置広域連合が発足する	広報
			7月1日 市来町と串木野市を加え、ひおき森林組合が発足する	森林
			8月3日～5日 第1回「郡山町青少年の翼in輪之内」事業が実施され、小学生らが「薩摩義士」縁の岐阜県輪之内町を訪問する	広報
			郡山中学校に「こどもエコクラブ」が誕生する	広報
			郡山町第四次総合振興計画が策定される	
			日置地区隔離病棟組合が解散される	吹上
2000	平成12	庚辰	1月1日 常盤に知的障害者更生施設「ときわの家」が開園する	南日
			2月22日 常盤コミュニティセンター「ふれあい館」の落成式が行われる	新報
			6月1日 町立保育所跡地に町児童館「わくわくパンダ」が開館する	広報
			7月2日 在京郡山会がこの第22回から「関東郡山会」に改称する	広報
			7月10日 郡山町健康交流促進財団の温泉活用型健康増進施設「スパランド裸・楽・良(ら・ら・ら)」がオープンする	広報
			7月10日 町内巡回バス「元気バス」が運行を始める	広報
			7月27日～8月3日 町青少年海外派遣事業ではじめてマレーシアのホームステイを実施する	広報
			8月25日 第1回レイシ料理コンテストが開催される	広報
2001	平成13	辛巳	3月 甲突コミュニティセンターが完成する	広報
			4月1日 花尾小学校に小規模校入学特別認可制度を導入する	広報
			10月28日 郡山ライオンズクラブが結成される(翌年6月1日に認証式)	広報
2002	平成14	壬午	1月23日 町が市来農芸高校に依頼したレイシの優良種子の引渡会が行われる	新報
			2月6日 交通死亡事故ゼロ1000日達成記念式典が開催される	広報
			2月25日 JR九州バス郡山駅の落成式が行われる	広報
			3月1日 町交流施設「悠遊館」がら・ら・ら前に開館する	広報
			3月26日 郡山1期農免農道が開通する(西俣上～常盤地区間)	広報
			3月 第三次行政改革大綱を策定する	広報
			4月1日 県内初の情緒障害児短期治療施設「鹿児島自然学園」が開校し、郡山小・中の分教室が設置される	南日
			4月19日 林道「峠・岩戸線」が開通する	新報
			4月23日 花尾神社社殿が県指定文化財となる	広報
			4月 花尾小に郡山小校区児童が転入学できる小規模校入学特別認可制度が導入される	教行
			4月 町立学校給食センターが柿園に設置される	
			9月14日 グループホーム「あったかハウス郡山」が開設される	
2003	平成15	癸未	1月31日 第1回鹿児島地区法定合併協議会が開催される	広報
			3月 花尾第二町営住宅が完成する	広報
			4月27日 町長・町議選。池山町長は無投票で3選。議員16名	広報
			5月9日 伊集院・蒲生・溝辺線の東俣バイパスが開通する	広報
			11月1日 グループホーム「ふるさとの家郡山」開設される。	
2004	平成16	甲申	2月16日 郡山駐在所が賦合から上園に新築移転する	南日
			3月3日 鹿児島地区合併協議会による合併協定が締結される	広報
			4月 県知事へ廃置分合申請書を提出し、6月に議案が可決され、決定書が交付される	広報
			8月2日 郡山町戸籍情報システムが稼働し、電算処理化が実施される	広報
			10月24日 郡山町閉町式が開催される	
			11月1日 郡山町・吉田町・松元町・桜島町・喜入町は鹿児島市に編入合併する	



# 郡山郷土史編纂関係者

## 郡山郷土史編纂委員会

会長 石踊政昭 (前) 橋元忠也

副会長 四元正二 管理部長

委員 幸 登喜男 文化課長

” 竹下裕行 郡山公民館長

## 郡山郷土史編纂事務局

事務局職員 幸 登喜男 文化課長 (前) 大園次男

” 竹之内祐司 文化課主幹

” 佐々木幸男 文化課主任指導主事

” 有川孝行 文化課主事

” 郡山繁幸 文化財保護事務嘱託

” 池平貴子 郷土史編纂事務補助員 (前) 長嶺泉子

## 郡山郷土史編纂委員会(合併前)

編纂委員長 大迫健一郎 郡山町教育委員会教育長

委員 白坂健太郎 総務課長

” 加世田正隆 企画振興課長

” 北英史 教育委員会総務課長

” 竹下裕行 教育委員会社会教育課長

郡山繁幸 文化財保護審議会会長  
三木靖 執筆専門委員会委員長

郡山郷土史編纂事務局(合併前)

事務局長 竹下裕行 教育委員会社会教育課長

事務局職員 田中公弘 社会教育課

〃 平川公明 社会教育課

〃 有川孝行 社会教育課

〃 久保山志信 社会教育課

〃 長嶺泉水 郷土史編纂事務補助員

郷土史執筆委員

第一編 郡山町の概要 長嶺泉水 郷土史編纂事務補助員

第二編 地形と地質 大木公彦 鹿児島大学総合研究博物館教授

第三編 植物と動物 大野照好 鹿児島短期大学名誉教授

第四編 先史時代 上村俊雄 国際大学国際文化学部教授

〃 (コラム) 竹中正巳 鹿児島女子短期大学生活科学科助教

第五編 古代・コラム 中村明蔵 国際大学国際文化学部教授

第六編 中世・コラム 三木靖 国際大学生涯学習センター長

第七編 近世 徳永和喜 県歴史資料センター調査資料室長

〃 (農政) 尾口義男 鹿児島県立喜界高等学校校長

第八編 近現代（近代化への胎動） 徳永和喜 県歴史資料センター調査資料室長  
〃（行政・財政・福祉・防災・社会教育等）  
〃（コラム） 長嶺泉水 郷土史編纂事務補助員

〃（経済） 山田 晋 国際大学国際文化学部教授

〃（学校教育） 山田興嗣 国際大学国際文化学部教授

第九編 文化財（花尾神社） 南新秀一 国際大学国際文化学部教授

〃（郡山の社寺） 上村 文 県歴史資料センター資料調査編集員

〃（史的石造物） 郡山繁幸 鹿児島市教育委員会文化課文化財嘱託

〃 郡山繁幸 〃

第二〇編 民俗（住居・年中行事・人の一生）

〃（衣食） 増田勝機 国際大学国際文化学部教授

〃（民間信仰・民話伝承・子どもの遊び・民俗芸能） 牧島知子 県民俗学会員・民具学会員

第二編 資料編（古代・近世） 郡山繁幸 鹿児島市教育委員会文化課文化財嘱託

〃（近現代） 長嶺泉水 郷土史編纂事務補助員

〃（字・小字） 長嶺泉水 〃

〃（石碑・記念碑・歌碑・ふるさとの唄） 長嶺泉水 〃

〃（年表） 郡山繁幸 鹿児島市教育委員会文化課文化財嘱託

〃 長嶺泉水 郷土史編纂事務補助員

## 編集後記

鹿児島市への合併を機に、郡山郷土史編纂の声が高まり、平成一三年に準備、翌一四年に編纂委員会・専門執筆委員会・編纂事務局を立ち上げ、郡山郷土史の編纂作業に入った。

編集の目的として、(1) 旧郡山町の文化的遺産と貴重な資料を収集保存し、後世へ伝え残すこと。(2) 編集事業を通じて、地域住民参加による文化活動の啓発と発展に寄与すること。(3) 市民が郷土や歴史への関心を引くとともに、郷土の歴史に深い関心を持つ方々の資料として提供することを念頭に編集する。

また、基本方針として、(1) 既刊の郷土史を全面改訂の方向で編集、そのため先に編纂された郡山郷土史前後編の編纂時の資料を原点に返って再研究する。そして、公正な史実に基づき記述することを基本に、写真や図版をできるだけ多く登載して、読みやすく・親しみやすいものにする。そのために広い範囲の資料収集に努める。

先の郡山郷土史は、上下二巻から構成されており、上巻は昭和四六年に、下巻は同五八年にそれぞれ発行されているが、上巻は発刊から既に三四年が経過しようとしており、現在は絶版の状態である。また、一部の地域については、資料不足のため盛り込まれていない部分がある。発刊後の調査研究の推移により、補填・補正あるいは新たに追加を必要とする事項等も生じている。このようなことから、内容の充実とともに、市民一般に広く親しまれる郷土史を編纂発行し、市民や読者の期待に応えようとするもので、文化面と同時に精神面においても、大きく寄与するものがあるように、先に発掘されなかった旧郡山町の歴史的事実を掘り出し、郷土の歴史を深く広く理解するために、先の郷土史と合わせて利用いただければ、一層有意義な学習ができるのではないかと考える。

今回の専門執筆委員には、大木公彦（鹿児島大学教授）、大野照好（元鹿児島短期大学教授）、上村俊雄

(国際大学教授)、中村明蔵(国際大学教授)、三木靖(国際大学教授)、徳永和喜(県歴史資料センター調査資料室長)、山田晋(国際大学教授)、山田興嗣(国際大学教授)、南新秀一(国際大学教授)、増田勝機(国際大学教授)を委嘱、編集会議や執筆委員会を年数回ずつもって、編集作業を進めてきた。なお、執筆作業を進めていくうち、竹中正巳(鹿児島短期大学助教授)、尾口義男(県立喜界高等学校長)、上村文(県立歴史資料センター資料調査編集委員)、牧島知子(県民俗・民具学会員)のご協力もお願いしてきた。

ここまで来るには、執筆委員の先生方には、大変お忙しい中、ご苦労いただいた。また、旧郡山町内の多くの方々の資料の提供、町当局の絶大なお力添えもあった。それに鹿児島市に合併後は、市の教育委員会には大変なご理解ご協力をいただいた。わずか四年間の集大成である。十分な時間がかけれなかったことが心残りであるが、ここで関係各位へ深く感謝申し上げるとともに、本誌が多くの市民や読者のために少しでも役立つことを心から願うものである。

平成一八年三月一日

郡山郷土史監修委員 郡山 繁 幸

# 郡山郷土史

平成十八年三月一日

編集者 郡山郷土史編纂委員会

発行者 鹿児島市教育委員会

住所 鹿児島市山下町六番一号

電話 (〇九九)二二七—一九六二

FAX (〇九九)二二二—八七九六

印刷所 中央印刷株式会社

住所 鹿児島市春日町十二番十六号

電話 (〇九九)二四七—三三〇〇





花尾大權現社  
其二

